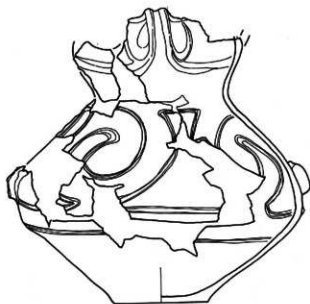


茨城県常陸大宮市

上ノ宿遺跡

— 第2次調査 I —

発掘調査報告書



2009

常陸大宮市教育委員会
ホームック株式会社
有限会社 日考研茨城

茨城県常陸大宮市

上ノ宿遺跡

－第2次調査Ⅰ－

発掘調査報告書

2009

常陸大宮市教育委員会
ホームック株式会社
有限会社 日考研茨城

ごあいさつ

常陸大宮市は、茨城県の北西部、県都水戸市から約20kmの八溝山地及び阿武隈山地の南端と関東平野岡緑大地北端の境界部に位置し、東に久慈川、南に那珂川、中央部に緒川、玉川が流れ、市の6割を山林が占めている。

久慈川と那珂川の二大河川の沿岸には、肥沃な土地が開け、豊かな自然に恵まれ古くから人々の生活の場となり、多くの歴史を重ねております。そのためこの地域には、古墳・塚・集落跡など多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は、当時の様子を知る手がかりとなることはもちろんのこと、現代の私たちが豊かに生活することができる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり、郷土の発展のためにも貴重なことと考えております。このたびの調査は、店舗の建設に伴い、周知の遺跡である上ノ宿遺跡の発掘調査による記録保存を目的に行ったものであります。遺跡内からは、縄文・奈良・平安・中世時代の竪穴住居・土坑・柱穴状遺構・溝状遺構・土器等が多数検出されました。この調査報告によって地域の祖先の遺業をしるのぶことができるとともに、文化財に対する意識が一層深まり、遺跡愛護の精神や郷土の文化を培う上で貴重な資料として役立てていただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査にあたり格別のご指導を賜りました茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳先生、そしてご協力いただきました地元の関係者、また、一切の経費をご負担いただきました ホームマック株式会社様、運営かつ慎重な調査をしていただきました発掘業者 有限会社日考研茨城様、各位に心から厚く感謝を申し上げます。

平成21年12月

茨城県常陸大宮市教育委員会

例 言

1. 本書は、ホームマック株式会社の委託を受けて、常陸大宮市教育委員会の指導のもと、有限会社日考研茨城が行った、店舗建設に伴う記録保存調査を目的とした発掘調査報告書である。
2. 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

遺跡名 上ノ宿(かみのしゅく)遺跡
所在地 常陸大宮市宇留野3083-1他9筆
調査面積 9,820㎡
3. 掘調査の現地調査及び整理調査は、下記の期間に実施した。

調査期間 平成20年4月1日～平成20年12月25日
整理期間 平成21年1月30日～平成21年7月26日
4. 発掘調査組織は下記の通りである。

調査担当 大瀧 淳志〔(有)日考研茨城〕 現地・整理
調査員 遠藤 啓子〔(有)日考研茨城〕 現地・整理
現地調査作業員 相田三郎、大谷和枝、岡崎稔、小野豊、佐藤寛、菅原裕子、佐賀実、
沢田すみ江、塩澤和紀、島崎清子、下山豊二、友部政夫、戸空均、
西宮芳江、藤岡勲、緑川覚吾、皆川典子、谷中晶、綿引界市朗
整理調査員 大瀧由紀子・大野美佳〔以上(有)日考研茨城〕
事務局 (有)日考研茨城
調査指導 常陸大宮市教育委員会生涯学習課
5. 本書の編集執筆は、小川和博・大瀧淳志・遠藤啓子が行った。
6. 本書では以下のような遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。

掘立柱建物跡：SB 竪穴建物跡：SI 上坑：SK 溝：SD 竪穴遺構：SX
柱穴(ピット)：P 旧石器時代調査地点：PG 複乱：K
7. 本書中の色調に関する表現は新版標準土色帖(農林水産技術会議事務局監修2000年版)に従った。
8. 書で使用した図面の方位は、すべて座標北であり、標高は海拔高である。
9. 本書に掲載した遺物のスクリーントーンについては、いずれも黒色処理が施されていることを示している。
10. 遺構および遺物の写真撮影は大瀧淳志・小川和博が行った。
11. 調査の記録および出土遺物は、常陸大宮市教育委員会が保管している。
12. 発掘調査および報告書の作成に当たり、以下の方々のご教示・ご高配を賜った。記して、深く謝意を表す次第です。(敬称略・順不同)

茨城県教育委員会、(財)茨城県教育財団、上浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場、
川崎純徳、比毛君男、鴨志田篤二

本文目次

ごあいさつ

例言

第1章 序章	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過とその概要	1
第3節 調査経過	2
第4節 遺跡の位置と周辺遺跡	2
1. 遺跡の位置	2
2. 周辺の遺跡	2
第2章 検出された遺構と遺物	8
第1節 概要	8
第2節 旧石器時代の調査	8
第1項 概要	8
第2項 基本層序	8
第3節 縄文時代の遺構と遺物	9
第1項 竪穴建物跡	9
第2項 土坑	14
第4節 古代の遺構と遺物	37
第1項 竪穴建物跡	37
第2項 土坑	82
第5節 中世以降の遺構	82
第1項 掘立柱建物跡	82
第2項 溝状遺構	83
第3項 土坑	87
第4項 柱穴状遺構	87
第3章 まとめ	90
付章 出土土器観察表	92

挿図目次

第1図	グリッド配置図	1
第2図	遺跡周辺地形図	3
第3図	遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第4図	遺構配置図	7
第5図	基本層序	8
第6図	旧石器時代遺物分布図・基本層序グリッド配置図 (PG1・PG2)	9
第7図	旧石器時代の石器	9
第8図	縄文時代遺構位置図	10
第9図	竪穴建物SI12実測図	11
第10図	竪穴建物SI12出土遺物	11
第11図	竪穴建物SI14実測図	12
第12図	竪穴建物SI19実測図	13
第13図	竪穴建物SI19出土遺物	13
第14図	竪穴建物SI57実測図	14
第15図	竪穴建物SI57出土遺物	14
第16図	土坑SK15,16,17,18,19,20,21,22,23,24実測図	15
第17図	土坑SK25,27,29,30,31,32,33,34,35,38,41,43実測図	16
第18図	土坑SK46,48,49,50,51,52,53,54,56,58,59,63実測図	18
第19図	土坑SK64,65,66,67,68,70,72,74,77,79,80,81,82実測図	20
第20図	土坑SK83,84,86,87,88,89,90,91,92,93,94,95実測図	24
第21図	土坑SK97,98,99,100,101,102,103,104,105,106,107,108,109,110,154実測図	26
第22図	土坑SK111,112,114,115,116,117,118,119,120,121,122,123,132,133実測図	28
第23図	土坑SK136,139,140,142,144,150,151,152,153,155,156,158,160実測図	30
第24図	土坑SK16,17,21,22,23,24,25,30,32,33,34,35,46,48,50,51,53出土遺物	33
第25図	土坑SK63,64,65,66,67,70,72,77,79,80,82,83,84,87,88,89,90,91,93,94,95,97,99出土遺物	34
第26図	土坑SK100,102,103,104,105,106,108,110,114,115,116,120,121,122,123,132,139,150,152出土遺物	35
第27図	土坑SK153,154,160出土遺物	36
第28図	調査区内出土遺物	36
第29図	竪穴建物SI09実測図	38
第30図	竪穴建物SI10実測図	38
第31図	竪穴建物SI10カマド実測図	38
第32図	竪穴建物SI10出土遺物	38
第33図	竪穴建物SI11実測図	39
第34図	竪穴建物SI11出土遺物	39
第35図	竪穴建物SI13実測図	40
第36図	竪穴建物SI13カマド実測図	40
第37図	竪穴建物SI13出土遺物	40
第38図	竪穴建物SI15実測図	41
第39図	竪穴建物SI15カマド実測図	41
第40図	竪穴建物SI15出土遺物	41
第41図	竪穴建物SI16実測図	42
第42図	竪穴建物SI16カマド実測図	42
第43図	竪穴建物SI16出土遺物	43
第44図	竪穴建物SI17実測図	43
第45図	竪穴建物SI17カマド実測図	43
第46図	竪穴建物SI17出土遺物	43
第47図	竪穴建物SI18実測図	44
第48図	竪穴建物SI18カマド実測図	44

第49図	竪穴建物SI18出土遺物	44
第50図	竪穴建物SI20実測図	45
第51図	竪穴建物SI20カマド実測図	45
第52図	竪穴建物SI20出土遺物	45
第53図	竪穴建物SI21実測図	46
第54図	竪穴建物SI21カマド実測図	46
第55図	竪穴建物SI21出土遺物	46
第56図	竪穴建物SI22実測図	47
第57図	竪穴建物SI22出土遺物	47
第58図	竪穴建物SI23実測図	48
第59図	竪穴建物SI23カマド実測図	48
第60図	竪穴建物SI23出土遺物	48
第61図	竪穴建物SI24実測図	49
第62図	竪穴建物SI24カマド実測図	49
第63図	竪穴建物SI24出土遺物	49
第64図	竪穴建物SI25実測図	50
第65図	竪穴建物SI25カマド実測図	50
第66図	竪穴建物SI25出土遺物	50
第67図	竪穴建物SI26実測図	51
第68図	竪穴建物SI26カマド実測図	51
第69図	竪穴建物SI26出土遺物	51
第70図	竪穴建物SI27実測図	52
第71図	竪穴建物SI27カマド実測図	52
第72図	竪穴建物SI27出土遺物	53
第73図	竪穴建物SI34実測図	54
第74図	竪穴建物SI34カマド実測図	54
第75図	竪穴建物SI34出土遺物	54
第76図	竪穴建物SI35実測図	55
第77図	竪穴建物SI35炭化物出土状況図	55
第78図	竪穴建物SI35カマド実測図	55
第79図	竪穴建物SI35出土遺物	56
第80図	竪穴建物SI36実測図	57
第81図	竪穴建物SI36カマド実測図	57
第82図	竪穴建物SI36出土遺物	57
第83図	竪穴建物SI37実測図	58
第84図	竪穴建物SI37カマド実測図	58
第85図	竪穴建物SI37出土遺物	58
第86図	竪穴建物SI38実測図	59
第87図	竪穴建物SI38カマド実測図	59
第88図	竪穴建物SI38出土遺物	59
第89図	竪穴建物SI39実測図	60
第90図	竪穴建物SI39カマド実測図	60
第91図	竪穴建物SI39出土遺物	60
第92図	竪穴建物SI40実測図	61
第93図	竪穴建物SI40カマド実測図	61
第94図	竪穴建物SI40出土遺物	61
第95図	竪穴建物SI41実測図	62
第96図	竪穴建物SI41カマド実測図	62
第97図	竪穴建物SI41出土遺物	63
第98図	竪穴建物SI42実測図	64

第99図	竪穴建物SI42カマド実測図	64
第100図	竪穴建物SI42出土遺物	64
第101図	竪穴建物SI43実測図	65
第102図	竪穴建物SI43カマド実測図	65
第103図	竪穴建物SI43出土遺物	65
第104図	竪穴建物SI44実測図	66
第105図	竪穴建物SI44カマド実測図	66
第106図	竪穴建物SI44出土遺物	66
第107図	竪穴建物SI45実測図	67
第108図	竪穴建物SI45カマド実測図	67
第109図	竪穴建物SI45出土遺物	67
第110図	竪穴建物SI46実測図	68
第111図	竪穴建物SI46カマド実測図	68
第112図	竪穴建物SI46出土遺物	68
第113図	竪穴建物SI47・48実測図	69
第114図	竪穴建物SI47カマド実測図	69
第115図	竪穴建物SI48カマド実測図	69
第116図	竪穴建物SI47出土遺物	70
第117図	竪穴建物SI48出土遺物	70
第118図	竪穴建物SI49実測図	71
第119図	竪穴建物SI49カマド実測図	71
第120図	竪穴建物SI49出土遺物	71
第121図	竪穴建物SI50実測図	72
第122図	竪穴建物SI50カマド実測図	72
第123図	竪穴建物SI50出土遺物	72
第124図	竪穴建物SI51・55実測図	73
第125図	竪穴建物SI51カマド実測図	73
第126図	竪穴建物SI51出土遺物	74
第127図	竪穴建物SI55出土遺物	74
第128図	竪穴建物SI52実測図	75
第129図	竪穴建物SI52カマドA・B実測図	75
第130図	竪穴建物SI52出土遺物	76
第131図	竪穴建物SI53実測図	77
第132図	竪穴建物SI53カマド実測図	77
第133図	竪穴建物SI53出土遺物	77
第134図	竪穴建物SI54実測図	78
第135図	竪穴建物SI54カマド実測図	78
第136図	竪穴建物SI54出土遺物	78
第137図	竪穴建物SI56・58実測図	79
第138図	竪穴建物SI58出土遺物	79
第139図	竪穴建物SI59・60実測図	80
第140図	竪穴建物SI59カマド実測図	80
第141図	竪穴建物SI59出土遺物	80
第142図	竪穴建物SI60出土遺物	80
第143図	竪穴建物SI61実測図	81
第144図	竪穴建物SI61出土遺物	81
第145図	土坑SK128・135実測図	82
第146図	土坑SK128・135出土遺物	82
第147図	中世以降遺構配置図(1)	84
第148図	中世以降遺構配置図(2)	85

第149図 掘立柱建物跡SB01・02・03実測図	86
第150図 掘立柱建物跡SB04・05・06実測図	88

写真図版目次

PL.1	1. 遺跡調査区航空写真、2. 遺跡調査区航空写真
PL.2	1. 遺跡調査区航空写真、2. 調査区全景
PL.3	1. 旧跡時代試掘グリット1、2. 旧石器時代試掘グリット2、3. SI12、4. SI14、5. SI19・20、6. SI57
PL.4	1. SK22、2. SK24、3. SK25、4. SK27、5. SK33-1、6. SK33-2、7. SK46、8. SK50
PL.5	1. SK59、2. SK60、3. SK64・60~70、4. SK72、5. SK77、6. SK79、7. SK83、8. SK97
PL.6	1. SK99、2. SK115・116、3. SK117、4. SK120、5. SK123、6. SK139、7. SK140、8. SK152
PL.7	1. SI15-1、2. SI15-2、3. SI16、4. SI17、5. SI18、6. SI21、7. SI24、8. SI26
PL.8	1. SI27、2. SI34、3. SI35-1、4. SI35-2、5. SI36、6. SI37、7. SI38、8. SI39
PL.9	1. SI41-1、2. SI41-2、3. SI42、4. SI43、5. SI44、6. SI45、7. SI46、8. SI48
PL.10	1. SI49、2. SI51.55、3. SI52、4. SI53、5. SI54、6. SB02、7. SB03、8. SB05
PL.11	1. 旧石器、2・3. SI19、4~8. SI57、9・10. SK17、11. SK34、12. SK83、13. SK33、14. SK24
PL.12	1. SK60、2~5. SK99、6~8. SK103、9・10. SK110 1. SK151、2. SK153、3. SI12、4. SK46、5. SK72、6. SK110
PL.13	1. SI10、2. SI11、3. SI13、4. SI15、5. SI17、6. SI18、7. SI20、8. SI21、9. SI22、10. SI22、11. SI22
PL.14	1. SI26、2. SI26、3. SI27、4. SI34、5. SI35、6. SI35、7. SI35、8. SI35 9. SI36、10. SI36、11. SI38
PL.15	1. SI36、2. SI39、3. SI40、4. SI41、5. SI41、6. SI42、7. SI42、8. SI42、9. SI42、10. SI42、11. SI43、12. SI44、13. SI44、14. SI44
PL.16	1. SI45、2. SI45、3. SI45、4. SI45、5. SI47、6. SI47、7. SI47、8. SI48、9. SI48、10. SI49、11. SI49、12. SI49、13. SI49、14. SI49
PL.17	1. SI50、2. SI50、3. SI50、4. SI50、5. SI51、6. SI51、7. SI52、8. SI52、9. SI52
PL.18	1. SI53、2. SI54、3. SI54、4. SI54、5. SI54、6. SI69、7-1・7-2. SI15 8. SI41
PL.19	1. 土製品、2. 石製品、3. 鉄製品
PL.20	1. 旧石器、2・3. SI19、4~8. SI57、9・10. SK17、11. SK34、12. SK83 13. SK33、14. SK24

表目次

表1	上ノ宿遺跡と周辺遺跡一覧
----	--------------

第1章 序 章

第1節 調査に至る経緯

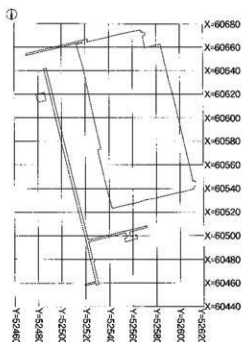
本発掘調査は、店舗造成に伴う事前調査である。平成19年10月26日にホームマック株式会社から常陸大宮市教育委員会に埋蔵文化財の所在の有無の照会が提出され、それに基づき市教育委員会は、以前に今回の開発地域南側の上層上坪遺跡の発掘調査を平成15年7月から実施し、また、平成18年5月からも上坪遺跡の発掘調査を行った結果、多数の遺構・遺物が確認されていることから、立地条件が良く開発箇所の周囲に古代の集落が存在することが確認されていることから、平成20年2月6日に茨城県教育委員会との協議により、本調査実施することとなり、有限会社日考研茨城に調査依頼をおこなう。承諾後、常陸大宮市教育委員会・ホームマック株式会社・有限会社日考研茨城は三者協議を行い、平成20年4月1日～同年12月25日まで本調査を実施した。

(常陸大宮市教育委員会)

第2節 調査経過とその概要

上坪遺跡の本調査は、平成20年4月1日から同年12月25日まで実施した。確認調査の結果に基づき、開発予定区域全面9,820㎡を調査することとなった。まず重機による表土除去から開始し、遺構確認のための精査を人力により行う。また更に西側および南側の排水溝掘削予定地には幅2mのトレンチ様調査区を設け発掘を実施した。確認調査で把握されていた黒色土の落ち込み部はすべて竪穴建物跡であることが判明し、これら竪穴建物跡を中心に丁寧な精査を繰り返した。また円形を主体とする土坑をはじめ、溝状遺構、掘立柱建物跡、柱状遺構(ピット)を検出する(第4図)。竪穴建物跡は、縄文時代中・後期、奈良・平安時代に属し、調査区北端を除くほぼ全面から検出され、集落本体は東西帯状に展開することが予想されるが、縄文時代に限れば土坑との関連で南東側に集中している。

まず、縄文時代の竪穴建物跡は4軒検出され、中期中葉から後期初頭に比定されるが、いずれも出土遺物が少なく所属時期判断を困難している。一方土坑は101基検出され、中期中葉から後期前半に比定されている。わずかに楕円形土坑も存在するが、大半は正円形を基調とする。また出土遺物も限定されるが、土坑SK33出土の壺形土器は微隆線のみで装飾された注口土器で、中期末葉・加賀利E4式土器に比定でき、県内において出土例も少ないことから特筆される。



第1図 グリッド配置図

また、古代の竪穴建物跡は43軒である。8世紀から10世紀に比定され、確認できるいずれの建物もカマドが設置され、屋内に柱穴をもたない屋内無柱建物が主体を占める。建物内からは多数の土師器・須恵器が出土しており、土師器では墨書土器が目立つ。なかでも関連遺物として15号竪穴建物跡から出土した風字破は注目される。また鉄製品では鉄斧、鋤先、鉄鏃など豊富である。なお、土坑として縄文時代以外に土師器が出土した2基が確認されている。

なお、掘立柱建物跡が7棟確認されているが、いずれも出土遺物がなく、時期を判断できないが、間尺の状況から判断して古代の建物としてはやや貧弱であることから中世以降の時期とした。これは北側の調査で明らかにされた中世村落が確認されたことにより、その広がりがかつて及んでいるとみられるからである。

最後に平坦で遺構密度の薄い調査区の中心軸にあたる南側と北側の2ヶ所に旧石器文化層を確認するため2m×2mのグリッドを設定し深掘調査を実施した。上層の今市スコリア層と下層にあたるIX層底沼軽石層が鍵層となっているが、明確な旧石器文化層を検出できず、基本層序のみの観察となった。

なお、調査区の設定にあたっては、国家座標を基準とし、調査区北西隅のX軸=60,680m、Y軸=52,460mの交点を基準点とする10m×10mのグリッドを設定し、遺構の所在および遺構外出土遺物のすべての地点を明確にすることとした(第1図)。

また、遺構の記録は実測図の作成と写真撮影により行った。遺構の図化については竪穴建物跡・掘立柱建物跡の平面図、土層断面図は20分の1の縮尺で作図を行っている。また土坑、カマドの平面図および土層断面図については10分の1の縮尺の図面を作成した。さらに遺構写真は35mmのカラーリバーサル、カラーフィルムにより撮影を行った。

(大淵淳志・遠藤啓子)

第3節 調査経過

現場の本調査は平成20年4月1日から平成20年12月25日までの9ヶ月間にわたって実施した。また整理作業は平成21年1月30日から平成21年7月26日まで6ヶ月にわたって実施した。以下その概要を工程表で表記した。

(大淵淳志・遠藤啓子)

調査経過 平成20年4月1日～平成21年7月26日

工程	平成20年												平成21年						
	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月		
調査準備 表土除去 遺構確認		■	■																
遺構調査			■	■	■	■	■	■											
補足調査 取									■	■	■								
遺物洗浄 注 写真撮影												■	■	■	■	■	■		

※㈱ホーマック株式会社

第4節 遺跡の位置と周辺遺跡

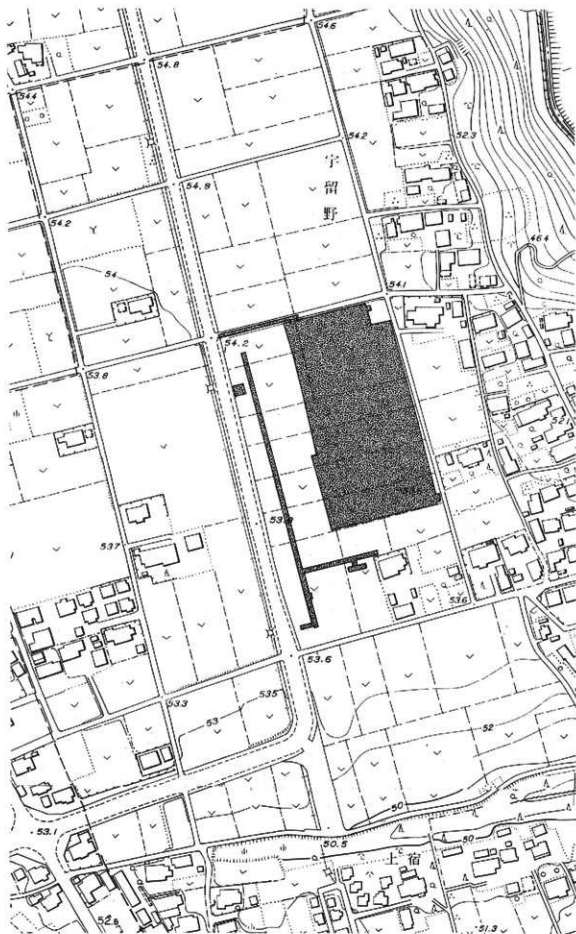
1. 遺跡の位置 (第2・3図)

遺跡は、北緯36°32'42"5、東経140°25'12"1の茨城県北部、常陸大宮市宇留野3083に所在する。ここは水郡線常陸大宮駅東わずか600m、旧国道118号線に並行し、市街地の東端に位置する。付近の台地は八溝山系から延びた丘陵の一部が北から西側に突出した洪積世の台地が形成され、東に久慈川、西に那珂川によって大きく分断され、さらに市街地西に流れる玉川によって二分される。遺跡の立地する通称大宮台地は久慈川と玉川に挟まれた南北に細長く延びた舌状台地で、久慈川と玉川が下岩瀬付近で合流することによって収束する。こうした大宮台地は両河川とその支流によってさらに侵食され複雑な地形を呈している。遺跡は東に流れる久慈川の右岸で、直接影響を受け、より開析された比較的幅広く平坦な台地上に立地しているため、遺跡の範囲が明確に線引きできない。すなわち標高53.5m前後の平坦面が南北800m、東西1500mまで延びており、北は部垂城跡(040)、南は宇留野城跡(038)によって境されるものの、西側は玉川まで達する広さがあり、東端に位置する本遺跡から西側の玉川まで小規模な中宮遺跡(062)のわずかに1遺跡しか確認されていない。こうした状況のなか本遺跡は南北700m、東西200mという大規模な範囲が遺跡として周知されている。さらに平成15年に発掘調査を実施した「上宿上坪遺跡(094)」とはほぼ同一遺跡と理解してもよいほど遺跡の境は明瞭ではない。なお東側の久慈川低地との比高差は約32.5mを測る。調査前の現況は畑地で、遺跡西側は市街の中心地である。

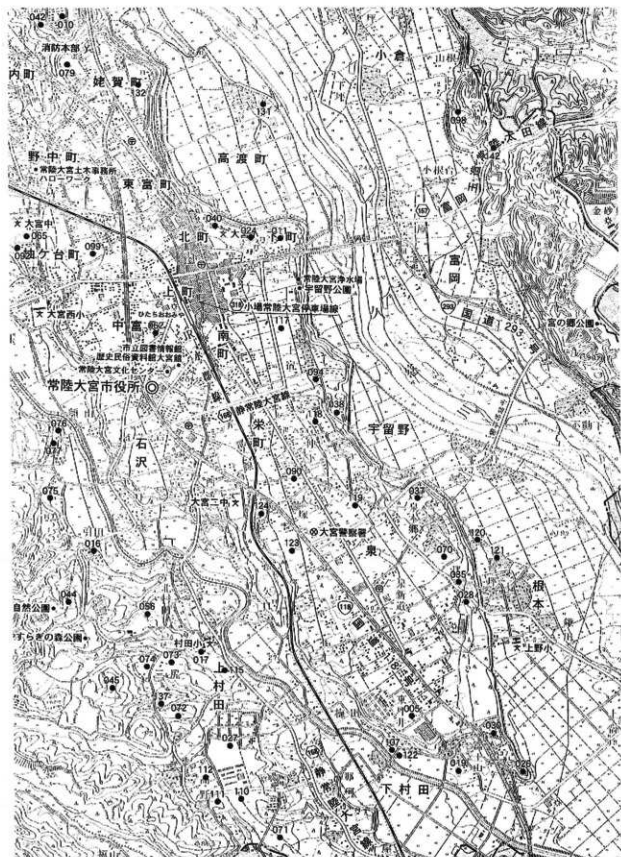
(大淵淳志・遠藤啓子)

2. 周辺の遺跡 (第3図)

上ノ宿遺跡が立地する常陸大宮市は東に久慈川、西に那珂川と県内を代表する主要河川に挟まれ、さらに中央には玉川が流れ、県北部において水利に恵まれた稲にみる肥沃な環境を呈している。そのため旧石器時代から中近世に至るまで多くの遺跡が周知されており、各時期それぞれ学史的に古くから注目されている遺跡が多いのも特徴である。



第2圖 遺跡周辺地形圖 (1:2,500)



117上ノ原遺跡 005坪井上遺跡 010磯島原遺跡 011宮内遺跡 016引田前遺跡 017北村田遺跡 019西坪井遺跡 0345峠寺古墳 030富士山古墳群 027一騎山古墳群
 028榎木古墳群 030上野原富士山遺跡 035榎木古墳 037前小畑遺跡 038宇留野城跡 040榎本城跡 042黒屋五馬跡群 044大宮自然公園遺跡 043倉庫遺跡
 056小中遺跡 063中家遺跡 065徳ヶ台遺跡 070尊日神社前遺跡 071空山A遺跡 072前ツケ尻A遺跡 073後ツケ尻A遺跡 074徳ヶ台尻B遺跡 076島の石遺跡
 076船山A遺跡 077船山B遺跡 079島質遺跡 090大塚遺跡 092徳ヶ台古墳 094上原上坪遺跡 098山根遺跡 099見渡遺跡 107念仏塚 110空山B遺跡
 111高野入遺跡 112高野B遺跡 115北村田B遺跡 118神下遺跡 119臥木所遺跡 120泉取遺跡 121根本後坪遺跡 122念仏塚遺跡 123上原中遺跡 124穴丁遺跡
 131丸瀬遺跡 132徳賀島遺跡 137前ツケ尻B遺跡 142高長ツツ塚

第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

いま時期ごとに主な遺跡を列挙してみても、旧石器時代の梶巾遺跡、縄文時代の坪井上遺跡、高ノ倉遺跡、弥生時代の小野天神前遺跡、上岩瀬富士山遺跡、小祝梶巾遺跡、古墳時代の下村田一騎山古墳や糠塚古墳、奈良・平安時代の小野源氏平遺跡や鷹巣原遺跡等が知られている。これらはいずれも県内の歴史を語るとき必ず代表的な遺跡のひとつとして挙げられ、しかも全体的にみてもいずれも数少ない発掘調査によって明らかにされた成果であり、逆にみると市内どこの遺跡の調査を実施しても注目度の高い成果が期待できることを示唆している。

さて、ここで本遺跡周辺遺跡の概要について、すでに市教育委員会で報告されている分布調査に基づき簡単に触れていきたい。まず旧石器時代の遺跡については「梶巾遺跡(007)」で調査され、槍先形尖頭器が出土し、「小野天神前遺跡」でも細石核が採集されている。そのほか市内最古といわれている「小野高ノ倉遺跡」および上坪遺跡(033)、鷹巣戸内遺跡(034)が知られている。次ぎの縄文時代になると急に遺跡数が増えてくる。周辺では昭和51、58年に調査された「梶巾遺跡(007)」をはじめ、「諏訪台遺跡(050)」「宮中遺跡(011)」「富士山遺跡(003)」等21遺跡が知られ、また正式な調査は行われていないが、「河井台遺跡(096)」では多量の石鏃が採集されている。そのほか中期の大集落として確認された「坪井上遺跡」「高ノ倉遺跡」があり、縄文早期・中期から弥生時代に営まれた「小野天神前遺跡」は、主となる晩期段階で上侘や亀形土製品をはじめ石剣、石棒、独鈷石等祭祀具が多数出土している。そして当遺跡は県内でも数少ない弥生時代中期前半まで継続され、市内に限らず県内を代表する遺跡のひとつとなっている。そのほか周辺地域では、後期の「富士山遺跡(003)」や「梶巾遺跡(003)」が著名である。以上のほか弥生時代の遺跡は明確ではないものが多い。

古墳時代では須恵器や形象埴輪を含めた豊富な埴輪の出土が知られている。「鷹巣古墳群(023)」のほか、前方後方墳である「富士山4号墳」は墳長38mを測り、県内でも最古の古墳のひとつとして周知されている。また「糠塚古墳(022)」は80mの大形古墳である。また集落跡も数は少ないが報告されている。「梶巾遺跡(007)」では前・中期の住居跡が検出されている。さらに玉川左岸には「番神山横穴群(091)」と「岩久横穴群(139)」があり、いずれも5基ずつ確認されている。

次ぎの奈良・平安時代では本遺跡を含め市内の大半の遺跡で確認されており、その数は115遺跡以上にのぼり市内の全体的に80%を占めている。そのなかで主要遺跡のひとつが「鷹巣原遺跡(010)」である。8世紀中葉から10世紀にかけて32軒の住居跡が確認されている。さらに隣接して「鷹巣瓦窯跡(042)」が知られており、ここで焼かれた瓦が竪穴建物跡のカマド構築材として利用されていた。そのほか最近調査された「上宿上坪遺跡(094)」や「上坪遺跡(033)」でも明確な集落跡として注目されている。これらに本遺跡が加わることで久慈川中流域における8世紀から10世紀にかけての拠点集落がより鮮明になってきた。最後に中世では城跡として詳細な測量調査を実施した「前小屋城跡(037)」をはじめ「宇留野城跡(038)」や「菅又城跡(100)」が知られている。平成15年に発掘調査した「上宿上坪遺跡(094)」では宇留野城跡北西側の一郭に位置する集落遺跡であるが、明確な郭跡は確認できなかったものの、溝や土坑から古瀬戸の平碗・茶壺、志戸呂の播鉢、常滑の裏や内耳土器、さらに硯の出土が報告されている。また近世の塚としては「宮岡七ツ塚群(142)」が確認されている。

(遠藤啓子)

表1 上ノ宿遺跡と周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代・時期	番号	遺跡名	種別	時代・時期
117	上ノ宿遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	076	鞍山A遺跡	集落跡	奈良・平安
010	鹿島原遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安、中世	077	鞍山B遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
011	宮中遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	082	鹿島原B遺跡	集落跡	奈良・平安、中世
016	引田前遺跡	集落跡	奈良・平安	088	高塚先遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安
017	北村田遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安、中世	090	大塚遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
019	西坪丹遺跡	集落跡	弥生、古墳、奈良・平安	091	雲神山横穴群	横穴群	古墳
024	松崎寺古墳	古墳	古墳	092	抽ヶ台古墳	古墳	古墳
027	一騎山古墳群	古墳群	古墳	094	上塚上坪遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安
028	堀本古墳群	古墳群	古墳	096	河井台遺跡	集落跡	奈良・平安
034	黒瀬戸内遺跡	集落跡	旧石器、奈良・平安	097	田子内遺跡	集落跡	奈良・平安
035	根本遺跡	包蔵地	古墳	098	山根遺跡	集落跡	不詳
037	前小屋籠跡	城館跡	奈良・平安、中世	099	見渡遺跡	集落跡	奈良・平安、中世
038	宇留野城跡	城館跡	中世	107	念仏塚	塚塚	近世
040	部島城跡	城館跡	中世	112	高野山遺跡	集落跡	奈良・平安
044	大宮自然公園遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	115	北村田B遺跡	集落跡	奈良・平安、中世
045	堂塚遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安	119	駄木所遺跡	集落跡	奈良・平安
056	小中遺跡	集落跡	奈良・平安	120	坂下遺跡	集落跡	弥生
062	中瀬遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	122	念仏塚遺跡	集落跡	古墳
065	抽ヶ台遺跡	集落跡	奈良・平安、中世	123	上高作遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
068	石帯遺跡	集落跡	奈良・平安	124	六丁遺跡	集落跡	奈良・平安
070	春日神社前遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安	142	富岡七ツ塚群	塚群	近世
072	前三ヶ尻A遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	131	高瀬遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
073	後三ヶ尻B遺跡	集落跡	奈良・平安	132	地賀東遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安
074	後三ヶ尻B遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安、中世	137	前三ヶ尻B遺跡	集落跡	奈良・平安
075	熊の石遺跡	集落跡	奈良・平安				



第4図 遺構配置図

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 概要 (第4図)

上ノ宿遺跡は南北700m、東西200mという広大な範囲が遺跡として周知されており、東に流れる久慈川の右岸で、標高53.5m前後の平坦面上に立地している。なお、昭和56、59年に隣接する地点が発掘調査され、縄文時代および古代の集落跡が検出されただけでなく、さらに中世では城郭に密接に関連する集落跡として注目されていた遺跡であり、今回の調査でもその集落跡の広がりおよび限界が期待された。以前調査された地点に隣接し、限られた範囲であったが、ここから旧石器時代の石器、縄文時代の竪穴建物跡・土坑群、古代の竪穴建物跡、土坑、中世以降の掘立柱建物跡、土坑、柱穴群が検出された。なお、現状は畑地であった。

第2節 旧石器時代の調査 (第5～7図)

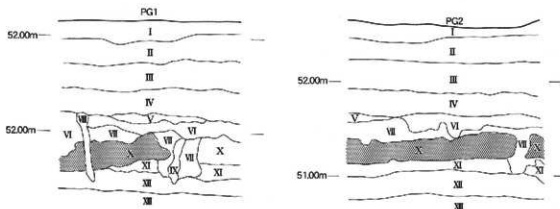
第1項 概要

今回の調査で、旧石器時代に係る文化層を確認するために、深掘調査を実施した。遺構の希薄である調査区中央北側と南側の2地点に2×2mのグリッドを設定して調査した。あいにく明確な旧石器文化層は検出できなかったものの、北側設定の確認グリッドPG2北側から安山岩製の剥片1点がⅡ層明黄褐色ローム層中から検出された。

第2項 基本層序 (第5図)

ここでの謎層はⅠ層の今市スコリア層とⅩ層の赤城-鹿沼軽石堆積層である。また肉眼観察では捉えることができなかったが、Ⅲ層下層およびⅣ層最上部が始良Tn火山灰(AT)の降灰層が推定される。

- Ⅰ層 不ぶい黄褐色バミス層(10YR7/2) 今市スコリア層(Nt-I)に対比される。橙色粒子は比較的粗く、堅緻である。日光男体山が供給源である。
- Ⅱ層 明黄褐色ローム層(10YR7/6) 白色粒子をわずかに含む。比較的締まりに欠ける。軟質ロームである。
- Ⅲ層 黄褐色ローム層(10YR5/6) 硬質ローム。白色粒子を含み、締りがあり、堅緻である。
- Ⅳ層 暗褐色ローム層(10YR3/4) 白色粒子を含み、締りがあり、粘性にとむ。第2黒色帯に比定される。
- Ⅴ層 灰黄褐色ローム層(10YR4/2) 黄色バミス粒をわずかに含む。締りがある。
- Ⅵ層 不ぶい黄褐色ローム層(10YR5/4) 黄色バミス粒を多く含む。締りがあり、堅緻である。
- Ⅶ層 不ぶい黄色ローム層(2.5Y6/3) 黄色バミス粒を多量に含む。締りがあり、堅緻である。
- Ⅷ層 不ぶい黄褐色ローム層(10YR5/4) 黄色バミス粒をわずかに含む。締りがある。
- Ⅸ層 黒褐色土(10YR3/2) 黄色バミス粒を多く含む。クラック状。
- Ⅹ層 黄色バミス層(2.5Y8/8)赤城-鹿沼(Ag-KP)の堆積層である。粒子は比較的粗く、締りがあるが、粘性に欠ける。

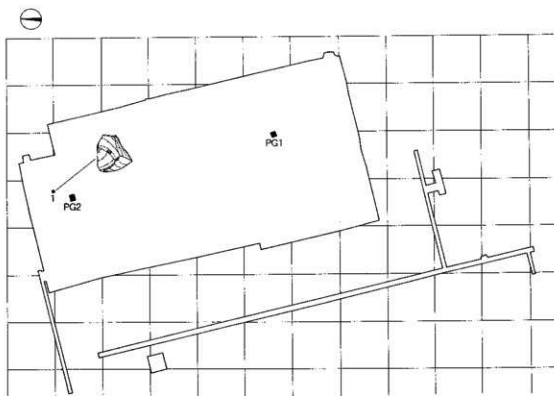


第5図 基本層序

Ⅰ 不ぶい黄褐色ローム層(10YR7/2)
Ⅱ 明黄褐色ローム層(10YR7/6)
Ⅲ 黄褐色ローム層(10YR5/6)
Ⅳ 暗褐色ローム層(10YR3/4)
Ⅴ 灰黄褐色ローム層(10YR4/2)
Ⅵ 不ぶい黄褐色ローム層(10YR5/4)
Ⅶ 不ぶい黄色ローム層(2.5Y6/3)
Ⅷ 不ぶい黄褐色ローム層(10YR5/4)
Ⅸ 黒褐色土(10YR3/2)
Ⅹ 黄色バミス層(2.5Y8/8)

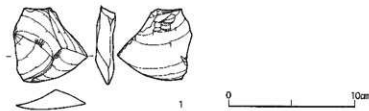
今市・七尾砂礫石
赤城-鹿沼軽石
始良Tn火山灰(AT)
日光男体山

Ⅰ 不ぶい黄褐色ローム層(10YR7/2)
Ⅱ 不ぶい黄褐色ローム層(10YR5/4)
Ⅲ 黄褐色ローム層(10YR5/6)
Ⅳ 暗褐色ローム層(10YR3/4)
Ⅴ 灰黄褐色ローム層(10YR4/2)
Ⅵ 不ぶい黄褐色ローム層(10YR5/4)
Ⅶ 不ぶい黄色ローム層(2.5Y6/3)
Ⅷ 不ぶい黄褐色ローム層(10YR5/4)
Ⅸ 黒褐色土(10YR3/2)
Ⅹ 黄色バミス層(2.5Y8/8)



第6図 旧石器時代遺物出土分布図・基本順序グリッド配置図 (PG1・PG2)

0 40m



第7図 旧石器時代の石器

X I 層 にぶい黄褐色ローム層(10YR4/3) 黄色バミス粒をわずかに含む。締りがあり、堅緻である。

X II 層 暗褐色ローム層(10YR3/3)白色粒子をわずかに含む。締りがあり、堅緻である。

X III 層 褐色ローム層(10YR4/6)白色粒子をわずかに含む。締りがあり、堅緻である。

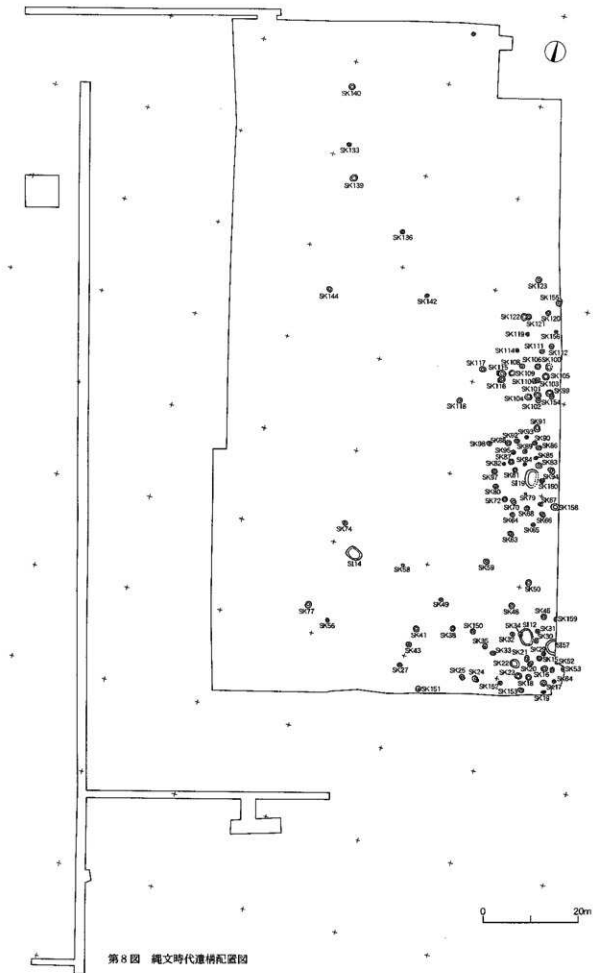
第3項 発見された旧石器時代の遺物 (第6・7図)

確認グリッドPG2の北側、II層明黄褐色軟質ローム層上層から出土した石器は、安山岩製の剥片である。略台形を呈する縦長剥片で、裏面には良好なバルブが発達している。長さ6.053cm、幅5.542cm、厚さ1.46cm、重量43.20gを測る。

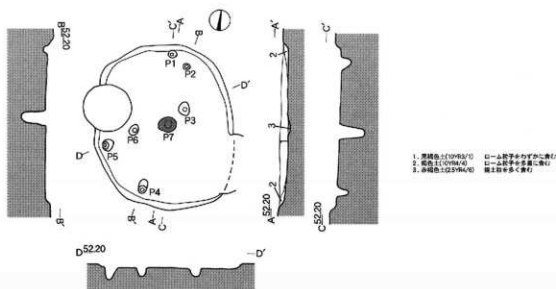
(小川和博)

第3節 縄文時代の遺構と遺物 (第8～28図)

第1項 竪穴建物跡

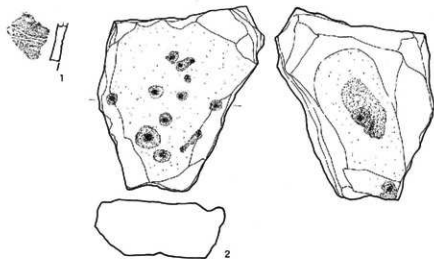


第8図 縄文時代遺構配置図



第9図 竪穴建物SI12実測図

0 2m



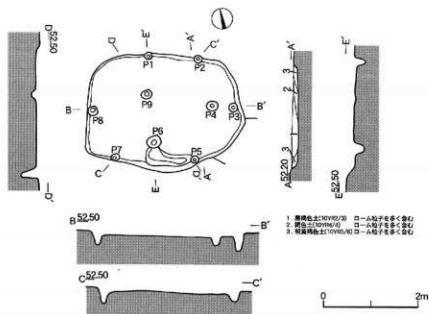
第10図 竪穴建物SI12出土遺物

0 10cm

調査区東側を中心に縄文時代中期末葉から後期初頭の竪穴建物跡4軒、土坑101基が検出された。調査は部分的なものであり、全体の様相は把握できないが、竪穴建物跡の周辺に土坑が集中しており、竪穴建物と土坑が環状を呈する可能性が高い。

1) 竪穴建物跡SI12 (第9・10図)

調査区の南東隅に位置する。南東側に土坑が重複している。規模は南北軸長3.50m、東西軸長2.87mの楕円形を呈し、主軸方位はN-5°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は短く外傾して立ち上がり、壁高は7.0~13.0cmを測る。柱穴は7本検出でき、明瞭な主柱穴は確認できなかった。P1は径18.0×15.0cm、深さ10.0cm、P2は径15.0×



第11図 竪穴建物SI14実測図

14.0cm、深さ20.5cm。P3は径28.0×18.0cm、深さ22.0cm。P4は径25.0×21.0cm、深さ25.5cm。P5は径25.0×21.0cm、深さ20.0cm。P6は径24.0×16.5cm、深さ16.5cm。P7は径33.0×28.0cm、深さ52.0cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は縄文土器1点と多孔石1点が出土した。第10図1は深鉢・胴部破片。有節沈線文が施文される。2は凝灰質礫岩製の多孔石である。表裏面に凹部を有する。長さ18.2cm、幅16.6cm、厚さ6.11cm、重量2325gを測る。

出土遺物から縄文時代中期中葉・阿玉台Ⅱ式に比定される。

2) 竪穴建物跡SI14 (第11図)

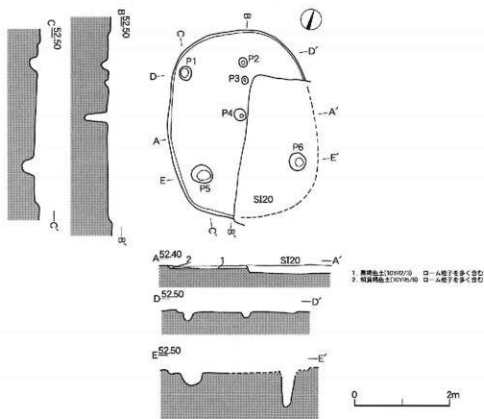
調査区の南側中央に位置する。規模は南北軸長2.47m、東西軸長3.22mの東西に長い隅丸方形を呈し、主軸方位はN-8°-Eを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は浅く外傾して立ち上がり、壁高は5.0~10.5cmを測る。柱穴は9本検出でき、P4・6・9を除き6本が壁柱穴である。P1は径15.0×15.0cm、深さ21.5cm。P2は径15.0×15.0cmの円形、深さ19.5cm。P3は径16.5×15.0cm、深さ30.0cm。P4は径16.0×15.0cm、深さ23.5cm。P5は径29.0×25.0cm、深さ21.0cm。P6は径18.0×17.0cm、深さ32.5cm。P7は径18.0×18.0cm、深さ24.0cm。P8は径20.0×18.0cm、深さ8.5cm。P9は径21.0×19.0cm、深さ17.0cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は縄文土器の小破片が出土したものの図示できなかったが、縄文時代後期初頭と推定される。

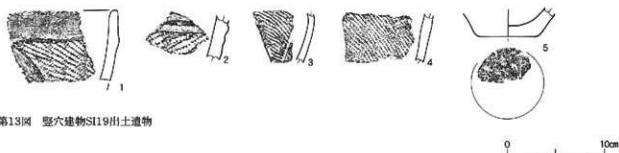
3) 竪穴建物跡SI19 (第12・13図)

調査区の東側に位置する。南東側が古代の竪穴建物跡によって切られている。規模は南北軸長3.90m、検出された東西軸長2.78mを測り、平面形は南北に長い楕円形を呈し、主軸方位はN-19°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は浅く外傾して立ち上がり、壁高は3.0~9.0cmを測る。柱穴は6本検出され、P1・P2・P5・P6の4本が主柱穴であろう。P1は径18.0×16.0cm、深さ10.0cm。P2は径42.0×35.0cm、深さ21.5cm。P3は径30.0×25.0cm、深さ15.0cm。P4は径14.0×12.5cm、深さ7.0cm。P5は径23.0×22.0cm、深さ48.0cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は縄文土器5点を図示した。いずれも深鉢の破片である。第13図1は口縁部破片。微隆線施文。2は沈線枠状区画文。3は細沈線文。5は底部破片。



第12図 竪穴建物SI19実測図



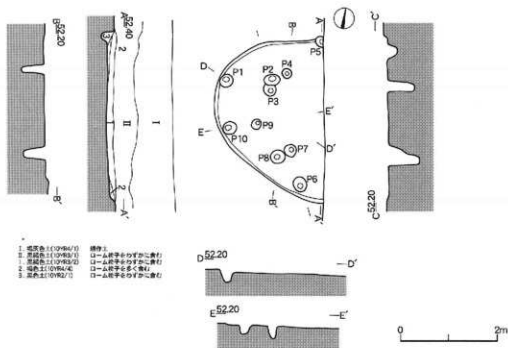
第13図 竪穴建物SI19出土遺物

これら出土遺物は縄文時代中期末葉・加曾利E4式に比定される。

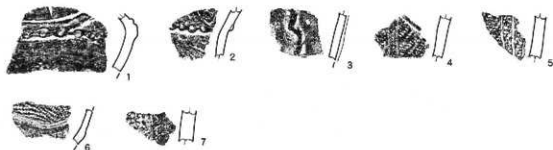
4) 竪穴建物跡SI57 (第14・15図)

調査区の南東隅に位置し、東側約半分は未調査区域に延びている。規模は検出された東西軸2.26m、南北軸3.00mを測り、平面形は楕円形を呈するものと推定される。床面はほぼ平坦で、壁面は低く外傾して立ち上がり、壁高は2.5cmを測る。柱穴は10本確認でき、P1・P3・P6が主柱穴であろう。P1は径21.0×19.0cm、深さ46.0cm。P2は径31.5×24.0cm、深さ67.5cm。P3は径28.0×25.0cm、深さ42.5cm。P4は径19.0×18.0cm、深さ27.0cm。P5は径29.0×27.0cm、深さ51.0cm。P6は径27.0×21.0cm、深さ56.5cm。P7は径21.5×18.5cm、深さ15.5cm。P8は径30.0×24.5cm、深さ24.3cm。P9は径26.0×25.0cm、深さ18.5cm。P10は径24.5×24.0cm、深さ22.7cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は縄文土器7点を図示した。第15図1は浅鉢、押捺隆帯に沿って一列の角押文が施文される。阿玉台I b式。



第14図 竪穴建物SI57実測図



第15図 竪穴建物SI57出土遺物



2は波状隆帯。3は蛇行隆帯が垂下する。阿玉台II～III式。4・5は縄文地文に沈線文が垂下する。加曾利E1式。6は隆帯区画文。7は磨消沈線文が垂下する。加曾利E2式。出土遺物の時期に幅があるもの、遺構時期は、縄文時代中期・加曾利E1式と推定される。

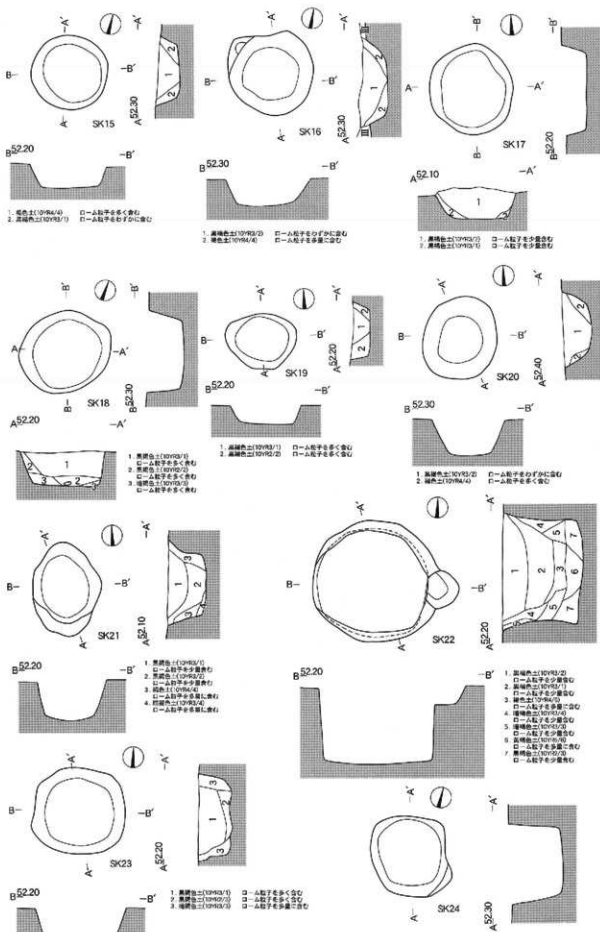
第2項 土坑 (第16～27図)

1) 土坑SK15 (第16図)

調査区の南東隅に位置し、平面形は長径1.19m、短径1.18mの円形を呈する。最大深度35.3cm。壁面は外傾気味に立ち上がる。覆土は3層の自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頃と推定する。

2) 土坑SK16 (第16・24図)

調査区の南東隅に位置し、平面形は長径1.32m、短径1.25mの円形。最大深度33.0cm。壁面は外傾気味に立ち上



第16図 土坑SK15・16・17・18・19・20・21・22・23・24実測図

0 2m
(1/60)

がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は2層の埋戻し土層。遺物として縄文土器1点を図示(第24図1)。1は壺の底部破片。単節RL。縄文中期末・加曾利E4式に比定される。

3) 土坑SK17 (第16・24図)

調査区の南東隅に位置し、平面形は長径1.41m、短径1.29mの楕円形。最大深度32.9cm。壁面は外傾気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、覆土は2層の埋戻し土層である。遺物として縄文土器4点を図示(第24図2)。2は波状口縁。微降線の玉抱文。2は大沈線区画文。縄文中期末・加曾利E4式に比定される。

4) 土坑SK18 (第16図)

調査区の南東隅に位置し、平面形は長径1.41m、短径1.28mの楕円形。最大深度57.0cm。壁面は外傾気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、覆土は3層の埋戻し土層。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

5) 土坑SK19 (第16図)

調査区の南東隅に位置し、平面形は長径1.09m、短径0.87mの楕円形。最大深度28.1cm。壁面は外傾気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦。覆土は2層の埋戻し土層。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

6) 土坑SK20 (第16図)

調査区の南東隅に位置し、平面形は長径1.29m、短径1.15mの楕円形。最大深度46.5cm。壁面は外傾気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、覆土は2層の埋戻し土層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

7) 土坑SK21 (第16・24図)

調査区の南東隅に位置し、平面形は長径1.48m、短径1.09mの楕円形。最大深度62.5cm。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、底面は平坦。覆土は4層の自然堆積層である。遺物として縄文土器4点を図示(第24図6～9)。6は補修孔が穿ってある。7・9は単節LR、8は単節RL縄文。縄文中期末と推定する。

8) 土坑SK22 (第16・24図)

調査区の南東隅に位置し、東端に柱穴1基が重複している。平面形は長径2.30m、短径1.92mの円形。最大深度122.0cm。壁面はややオーバーハング気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は7層の自然堆積層である。遺物として縄文土器8点と石器2点を図示(第24図10～19)。10・16は微降線による区画。地文は単節LR。11・12は沈線による区画。地文は単節LR。13・14は二本の平行描線による交互充填施文。13はJ字文。15・17は地文が単節RL。18は砂岩製の磨石。側面に敲打痕。表裏面に磨面が確認できる。長さ6.38cm、幅8.97cm、厚さ3.31cm、重量281.0g。19も砂岩製の磨石。側面に磨痕が認められる。長さ7.68cm、幅5.30cm、厚さ2.7cm、重量134.0g。縄文時代後期前半・網取1式期に比定される。

9) 土坑SK23 (第16・24図)

調査区の南東隅に位置し、平面形は長径1.41m、短径1.36mの隅丸方形を呈する。最大深度50.5cm。壁面は外傾気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、覆土は3層の埋戻し土層。遺物として縄文土器3点を図示(第24図20～23)。20は有孔鈔付土器。波状口縁で、赤彩が施されている。21は微降線による意匠文。単節RL。縄文時代中期末・加曾利E4式期。

10) 土坑SK24 (第16・24図)

調査区の南東隅に位置し、平面形は長径1.26m、短径1.17mの隅丸方形を呈する。最大深度79.4cm。壁面は垂直気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第24図23)。23は大型深鉢の体部下半。単節LR縄文施文。縄文時代中期末・加曾利E4式期に比定される。

11) 土坑SK25 (第17・24図)

調査区の南東隅に位置し、平面形は長径1.27m、短径1.16mの円形。最大深度38.3cm。壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層の自然堆積層。遺物として縄文土器1点を図示(第24図24)。24は単節LR縄文を施文。縄文時代中期末と推定する。

12) 土坑SK27 (第17図)

調査区の南側に位置し、平面形は長径1.08m、短径1.01mの円形。最大深度は25.0cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

13) 土坑SK29 (第17図)

調査区の南東隅に位置し、平面形は長径1.12m、短径1.12mの円形。最大深度25.1cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

14) 土坑SK30 (第17・24図)

調査区の南東隅に位置し、西側で土坑SK45と重複している。平面形は長径1.18m、短径0.86mの楕円形。最大深度68.0cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含む自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第24図25・26)。25は羽状縄文。26は押捺を加えた貼付隆帯を垂下させる。縄文時代中期・阿玉台式期に比定される。

15) 土坑SK31 (第17図)

調査区の南東に位置し、平面形は長径0.92m、短径0.86mの楕円形。最大深度18.5cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

16) 土坑SK32 (第17・24図)

調査区の南東側に位置し、平面形は長径1.05m、短径0.98mの円形。最大深度49.3cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物として縄文土器1点を図示(第24図27)。27は条線施文。縄文時代後期初頭・称名寺2式期と推定する。

17) 土坑SK33 (第17・24図)

調査区の南東側に位置し、平面形は長径1.14m、短径1.04mの円形。最大深度49.3cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は5層の埋戻し土層。遺物として縄文土器4点を図示(第24図28~31)。28~30は同一個体で完形に近い瓢形の注口付甕である。体部上部は二本平行の微隆線による連結する渦巻文。体部中央に横位の橋状把手が付く。30は口縁部が3単位の橋状把手と注口が付く。微隆線により連結する。31は無節縄文。縄文時代中期末・加曾利E4式期に比定される。

18) 土坑SK34 (第17・24図)

調査区の南東側に位置し、竪穴建物跡SI12と重複している。平面形は長径0.99m、短径0.98mの円形。最大深度29.3cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第24図32・33)。32は平行する微隆線を無文となる懸垂文。単節RL縄文。33は単節RL縄文。縄文時代中期末・加曾利E4式期に比定される。

19) 土坑SK35 (第17・24図)

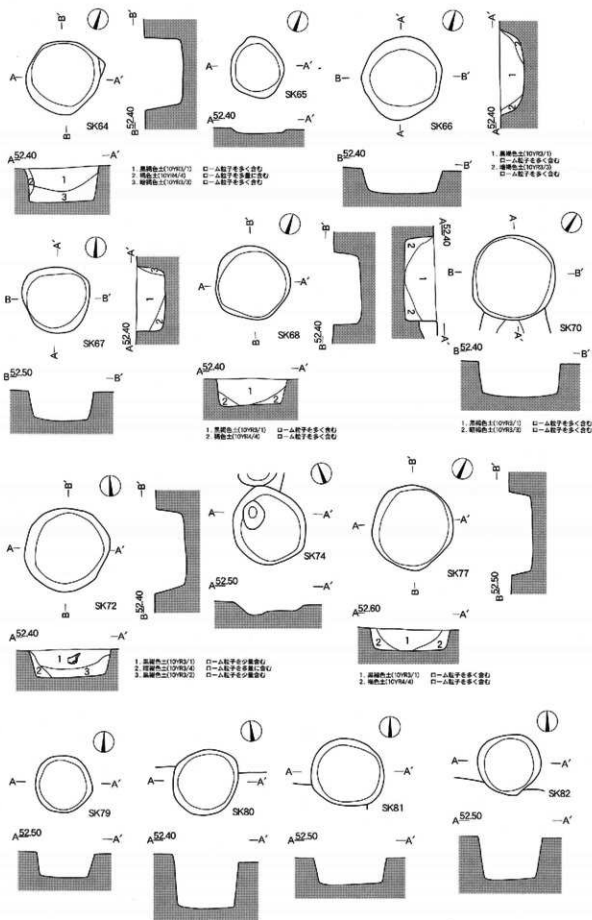
調査区の南東側に位置し、平面形は長径1.05m、短径0.92mの楕円形。最大深度16.6cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物として縄文土器1点を図示(第24図34)。34は単節RL縄文施文。縄文時代中期末と推定する。

20) 土坑SK38 (第17図)

調査区の南側に位置し、平面形は長径1.24m、短径1.14mの円形。最大深度30.3cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

21) 土坑SK41 (第17図)

調査区の南側に位置し、平面形は長径1.18m、短径1.15mの不正円形。最大深度48.3cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層の埋戻し土層。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。



第19図 土坑SK64・65・66・67・68・70・72・74・77・79・80・81・82実測図

0 2m
(1/50)

22) 土坑SK43 (第17図)

調査区の南側に位置し、平面形は長径1.41m、短径1.32mの円形。最大深度38.1cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は3層の埋戻し土層。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

23) 土坑SK46 (第18・24図)

調査区の南東側に位置し、平面形は長径1.24m、短径1.17mの円形。最大深度39.8cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は3層の埋戻し土層。遺物として縄文土器1点、石器3点を図示(第24図35~38)。35は単節R L縄文。36~38は磨石類である。36は砂岩製。表面に敲打痕をもち、側面に磨面を有する。長さ11.93cm、幅8.54cm、厚さ4.41cm、重量755.0g。37はホルンフェルス製。側面に敲打痕が認められる。長さ11.68cm、幅6.75cm、厚さ2.44cm、重量259.0g。38は砂岩製。明瞭な磨面は確認できない。長さ11.71cm、幅6.66cm、厚さ3.26cm、重量309.0g。縄文時代中期末と推定する。

24) 土坑SK48 (第18・24図)

調査区の南東側に位置し、平面形は長径1.48m、短径1.32mの円形。最大深度28.2cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、南側に柱穴1本(径23.0×16.0cm、深さ3.5cm)が穿ってある。覆土は2層の埋戻し土層。遺物として縄文土器2点を図示(第24図39・40)。39・40は懸垂文陶を磨消し、地文は単節LR。縄文時代中期・加曾利E2式期に比定される。

25) 土坑SK49 (第18図)

調査区の南側に位置し、西端に柱穴と重複している。平面形は長径0.97m、短径0.84mの円形。最大深度13.0cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

26) 土坑SK50 (第18・24図)

調査区の南東側に位置し、平面形は長径1.34m、短径1.15mの円形。最大深度44.0cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層の埋戻し土層。遺物として縄文土器2点を図示(第24図41・42)。41は単節LR。42は縄文RL縄文。縄文時代中期末と推定する。

27) 土坑SK51 (第18・24図)

調査区の南東隅に位置し、平面形は長径1.17m、短径1.13mの円形。最大深度47.5cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物として縄文土器2点を図示(第24図43・44)。43は口縁部破片。貼付隆帯が横走する。44は無文。縄文時代中期・加曾利E1式期に比定される。

28) 土坑SK52 (第18図)

調査区の南東隅に位置し、北側が未調査区域に延びている。平面形は長径0.76m、現存短径0.44mの円形と推定される。最大深度36.0cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

29) 土坑SK53 (第18・24図)

調査区の南東隅に位置し、東側が未調査区域に延びている。平面形は長径1.39m、短径0.72mの隅丸方形と推定される。最大深度65.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層の埋戻し土層。遺物として縄文土器2点を図示(第24図45・46)。45は隆帯に沿って二列の角押文。46は櫛歯描文を充填させる。縄文時代中期・阿玉台Ⅱ式に比定される。

30) 土坑SK54 (第18図)

調査区の南東隅に位置し、南端に柱穴(径36.0×26.0cm、深さ23.8cm)が重複している。平面形は長径0.79m、短径0.79mの円形。最大深度8.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

31) 土坑SK56 (第18図)

調査区の南側に位置し、平面形は長径1.08m、短径0.80mの楕円形。最大深度28.3cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

32) 土坑SK58 (第18図)

調査区の南側に位置し、平面形は長径0.93m、短径0.78mの楕円形。最大深度14.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含む自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

33) 土坑SK59 (第18図)

調査区の南東側に位置し、平面形は長径1.18m、短径1.15mの円形。最大深度18.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

34) 土坑SK63 (第18・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.44m、短径1.25mの楕円形。最大深度15.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物として縄文土器1点を図示(第25図1)。1は大型深鉢の口縁部破片。微塵線による口縁部区画。地文は単節RL縄文。縄文時代中期末・加曾利E4式期に比定される。

35) 土坑SK64 (第19・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.16m、短径1.17mの円形。最大深度58.3cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は3層の埋戻し土層。遺物として縄文土器2点を図示(第25図2・3)。2は単節RLに磨消し。3は磨消し沈線文による意匠文。単節RLを地文とする。縄文時代後期初頭・称名寺1式と推定する。

36) 土坑SK65 (第19・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径0.98m、短径0.84mの円形。最大深度6.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第25図4)。4は胴部破片。単節LR施文。縄文時代中期末と推定する。

37) 土坑SK66 (第19・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.30m、短径1.27mの円形。最大深度37.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物として縄文土器3点を図示(第25図5～7)。5は口縁部破片。無文。6は単節LR。7は縹系R。縄文時代中期・加曾利E1式と推定する。

38) 土坑SK67 (第19図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.05m、短径1.03mの円形。最大深度45.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

39) 土坑SK68 (第19図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.18m、短径1.16mの円形。最大深度42.0cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

40) 土坑SK70 (第19・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.34m、短径1.27mの円形。最大深度54.5cmを測り、壁面は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物として縄文土器3点を図示(第25図8～10)。8は深鉢口縁部破片。沈線区画文による幅狭な無文帯が巡る。9は単節LR施文。10は口縁部破片。無文。縄文時代中期・加曾利E3式に比定される。

41) 土坑SK72 (第19・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.33m、短径1.31mの円形。最大深度45.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は3層の埋戻し土層。遺物として縄文土器1点、石器1点を図示(第25図11・12)。11は縦隆帯を貼付。2は砂岩製。凹部を有する台石で石皿として使用。表面に凹部を2ヶ所。裏面に磨面凹面となる。

長さ20.46cm、幅14.19cm、厚さ7.10cm、重量2245.0g。縄文時代中期末・加曾利E4式に比定される。

42) 土坑SK74 (第19図)

調査区の南側に位置し、平面形は長径1.24m、短径1.14mの円形。最大深度10.6cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、北壁寄りに柱穴が穿っている(径44.0×34.0cm、深さ4.2cm)。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

43) 土坑SK77 (第19・25図)

調査区の南西側に位置し、平面形は長径1.34m、短径1.25mの円形。最大深度35.0cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物として縄文土器1点を図示(第25図13)、13は深鉢胴部、角押文が施文される。縄文時代中期・阿木台Ⅱ式に比定される。

44) 土坑SK79 (第19・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径0.89m、短径0.87mの円形。最大深度40.9cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第25図14)、14は口縁部破片。円筒が巡る。縄文時代中期末と推定する。

45) 土坑SK80 (第19・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.05m、短径1.01mの円形。最大深度82.0cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第25図15)、15は深鉢胴部破片。単筋RL施文。縄文時代中期末と推定する。

46) 土坑SK81 (第19図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.13m、短径1.05mの円形。最大深度40.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

47) 土坑SK82 (第19・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径0.99m、短径0.94mの円形。最大深度67.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含む自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第25図16)、16は深鉢胴部破片。無筋Iが施文される。縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

48) 土坑SK83 (第20・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.39m、短径1.30mの円形。最大深度48.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層の自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第25図17・18)、17・18は同一個体。微隆線を貼付け意匠文とする。縄文時代中期末・加曾利E4式に比定される。

49) 土坑SK84 (第20・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径0.98m、短径0.92mの円形。最大深度14.6cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第25図19・20)、19は懸垂文を垂下する。20は隆帯。縄文時代中期・加曾利E1式に比定される。

50) 土坑SK86 (第20図)

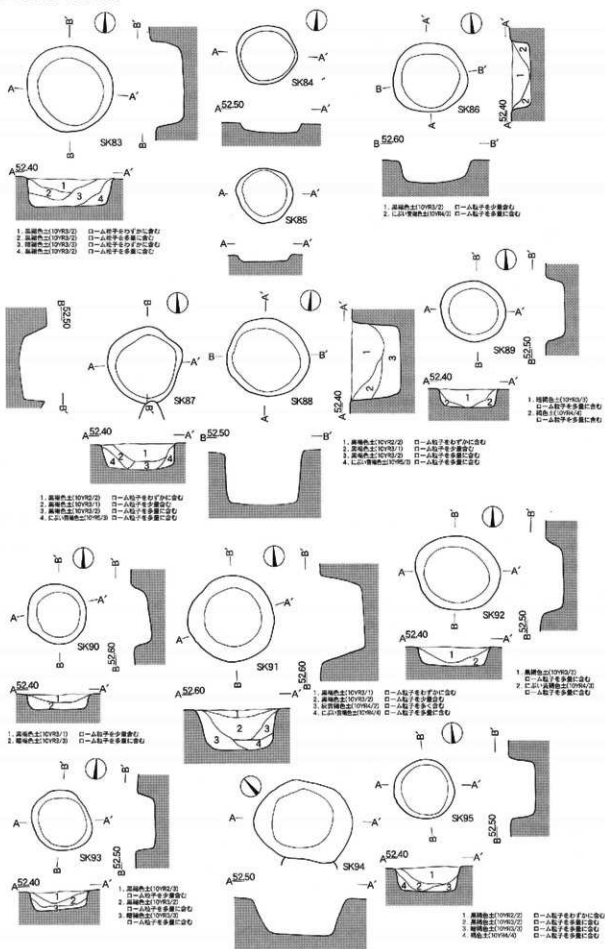
調査区の東側に位置し、平面形は長径1.18m、短径1.12mの円形。最大深度35.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

51) 土坑SK87 (第20・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径2.21m、短径2.15mの円形。最大深度44.3cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層の埋戻し土層自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第25図21・22)、21は懸垂文を垂下させる。22は単筋RL施文。縄文時代中期・加曾利E5式と推定する。

52) 土坑SK88 (第20・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.25m、短径1.22mの円形。最大深度82.0cmを測り、壁面は垂直気味に立



第20図 土坑SK83・84・86・87・88・89・90・91・92・93・94・95実測図

ち上がる。底面は平坦で、覆土は3層の自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第25図23・24)。23は曲線意匠による充填縄文。24は無節1縄文。縄文時代後期初頭・称名寺1式期に比定される。

53) 土坑SK89 (第20・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.00m、短径0.99mの円形。最大深度30.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物として縄文土器2点を図示(第25図25・26)。25は二本の平行曲線描文による交互充填縄文。単節RL。26は無文。縄文時代後期初頭・称名寺1式期に比定される。

54) 土坑SK90 (第20・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径0.91m、短径0.90mの円形。最大深度25.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第25図27・28)。27は胴部破片。単節LR。28は縄文地文に磨消し。縄文時代中期・加曾利E式と推定する。

55) 土坑SK91 (第20・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.38m、短径1.31mの円形。最大深度69.3cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層の自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第25図29・30)。29は胴部破片。単節RLを地文に磨消し懸垂文を垂下。30は単節LR施文。縄文時代中期・加曾利E3式と推定する。

56) 土坑SK92 (第20図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.27m、短径1.19mの円形。最大深度31.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の埋戻し土層。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

57) 土坑SK93 (第20・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径0.96m、短径0.90mの円形。最大深度30.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は3層の自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第25図31)。31は胴部破片。単節RL施文。縄文時代中期と推定する。

58) 土坑SK94 (第20・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.55m、短径1.23mの楕円形。最大深度5.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器3点を図示(第25図32～34)。32は浅鉢口縁部破片。無文。33・34は縄文施文。33が単節LR。34が単節LR施文。縄文時代中期・加曾利E1式に比定される。

59) 土坑SK95 (第20・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径0.97m、短径0.96mの円形。最大深度38.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層の自然堆積層である。遺物として縄文土器3点を図示(第25図35～37)。35は懸垂地文に沈線懸垂文を垂下。36・37は縄文施文。縄文時代中期・加曾利E1式と推定する。

60) 土坑SK97 (第21・25図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.27m、短径1.25mの隅丸方形。最大深度17.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器3点を図示(第25図38～40)。38は深鉢の底部破片。単節RL施文。39は口縁部破片。微隆縁を挟んで羽状縄文を施文する。40は胴部破片。単節LR施文。縄文時代中期末・加曾利E4式に比定される。

61) 土坑SK98 (第21図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.15m、短径1.05mの円形。最大深度77.8cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は3層の埋戻し土層。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

62) 土坑SK99 (第21・25図)

調査区の東側に位置し、土坑SK154と重複している。平面形は長径1.45m、短径1.40mの円形。最大深度52.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第26図41～51)。41は口縁部破片。微隆縁により口縁が区画され、無文。

地文は無節1。把手が剥離している。42~46は二本の平行描線による交互充填施文である。42・43・45は紡錘文を連結させる。47・48・50は微隆線の区画文。49は隆帯区画文。51は単節LR施文。縄文時代後期初頭・称名寺1式期に比定される。

63) 上坑SK100 (第21・26図)

調査区の東側に位置し、北側で柱穴2基と重複し、東側半分が未調査区域に延びている。平面形は長径1.80m、短径1.00mの円形と推定される。最大深度36.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第26図1)。1は単節LR縄文を施文。縄文時代中期末と推定する。

64) 上坑SK101 (第21図)

調査区の東側に位置し、南側で土坑SK102によって切られている。平面形は長径1.37m、短径1.15mの円形。最大深度38.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は3層の自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

65) 土坑SK102 (第21・26図)

調査区の東側に位置し、北側で土坑SK101を切って構築している。平面形は長径1.27m、短径1.26mの円形。最大深度51.3cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は3層の自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第26図2)。2は複節RLR縄文。縄文時代中期・加曾利E1式期と推定する。

66) 土坑SK103 (第21・26図)

調査区の東側に位置し、西側で土坑SK110を切って構築している。平面形は長径1.22m、短径1.21mの円形。最大深度70.3cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器10点を図示(第26図3~12)。3・4・9・12は微隆線による意匠文で、12を除き11線区画。3・4は11線部を無文とする。4には赤彩が施されている。9は波状11線。5~8・10は二本の平行描線による交互充填施文である。8は渦巻状文。縄文時代後期初頭・称名寺1式期に比定される。

67) 土坑SK104 (第21・26図)

調査区の東側に位置し、北西隅で平穴建物SI21に切られている。平面形は長径1.52m、短径1.49mの円形。最大深度51.3cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第26図13・14)。13は底部に近い胴部破片。単節LR縄文。14は深鉢底部破片。縄文時代中期末と推定する。

68) 土坑SK105 (第21・26図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.58m、短径1.36mの楕円形。最大深度83.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器3点を図示(第26図15~17)。15は口縁部破片。16は口唇部を欠損する。微隆線による区画。口縁を無文とする。17は二本の平行曲線描文による交互充填施文。沈積間は細縄文。単節LR施文。縄文時代後期初頭・称名寺1式期に比定される。

69) 土坑SK106 (第21・26図)

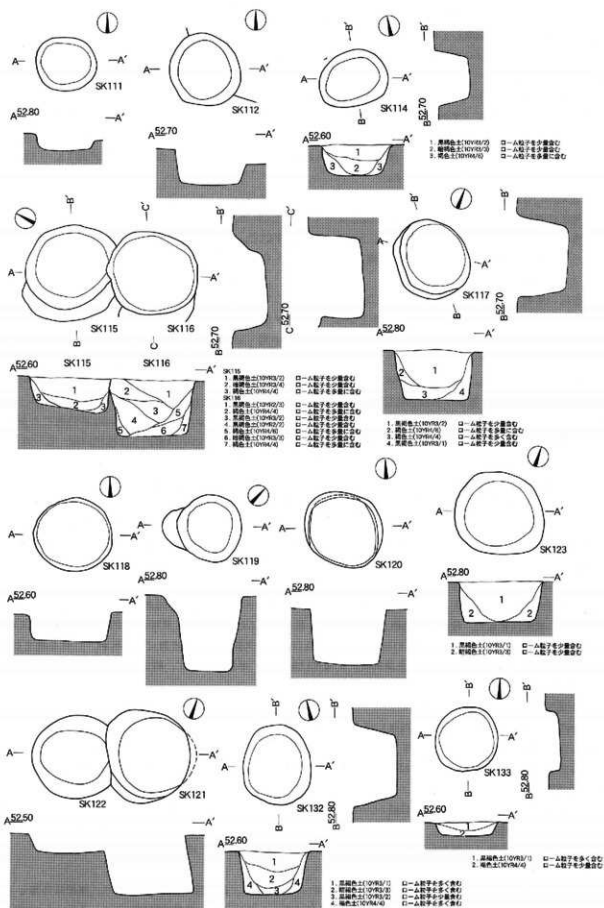
調査区の東側に位置し、平面形は長径1.27m、短径1.27mの円形。最大深度93.3cmを測り、壁面はオーバーハングして立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土主体で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第26図18・19)。18は単節RL、19は単節LR縄文を施文。縄文時代中期末と推定する。

70) 上坑SK107 (第21図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.09m、短径1.05mの円形を呈する。最大深度28.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

71) 上坑SK108 (第21・26図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.08m、短径1.07mの円形。最大深度36.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器



第22図 土坑SK111・112・114・115・116・117・118・119・120・121・122・123・132・133実測図

0 2m
(1/60)

2点を図示(第26図20・21)。20は口縁部破片。無文。21は無文であるが、ヒダ状指頭痕がみられる。縄文時代中期中葉・阿玉台式期と推定する。

72) 土坑SK109 (第21図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.32m、短径0.90mの円形。最大深度33.2cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、北西隅で柱穴(径20.0×19.0cm、深さ10.0cm)が穿ってある。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

73) 土坑SK110 (第21・26図)

調査区の東側に位置し、北東側で土坑SK103に切られている。平面形は長径1.05m、短径0.33mの円形。最大深度47.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器7点と磨石1点を図示(第26図22~29)。22~24は微隆線による区画。22は口縁部破片。口縁部は無文帯。23は微隆線上の突起。25は二本の平行捺線による交互充填施文。26は微隆線による区画。地文は無節1。27・28は沈線区画。29は砂岩製の磨石。表裏面に凹部をもち、磨面が確認できる。長さ12.88cm、幅8.28cm、厚さ5.26cm、重量553.0g。縄文時代後期初頭・称名寺1式期に比定される。

74) 土坑SK111 (第22図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径0.96m、短径0.85mの円形。最大深度22.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

75) 土坑SK112 (第22図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.13m、短径1.12mの円形。最大深度57.0cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

76) 土坑SK114 (第22・26図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.10m、短径0.86mの楕円形。最大深度56.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第26図30・31)。30・31は同一個体。単節RⅠ縄文を施文。縄文時代中期末と推定する。

77) 土坑SK115 (第22・26図)

調査区の東側に位置し、南側で土坑SK116を切って構築している。平面形は長径1.31m、短径1.28mの円形。最大深度53.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は3層の自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第26図32・33)。32は単節LR縄文に縦位の懸垂文。33は単節RI縄文。縄文時代中期・加曾利E1式に比定される。

78) 土坑SK116 (第22・26図)

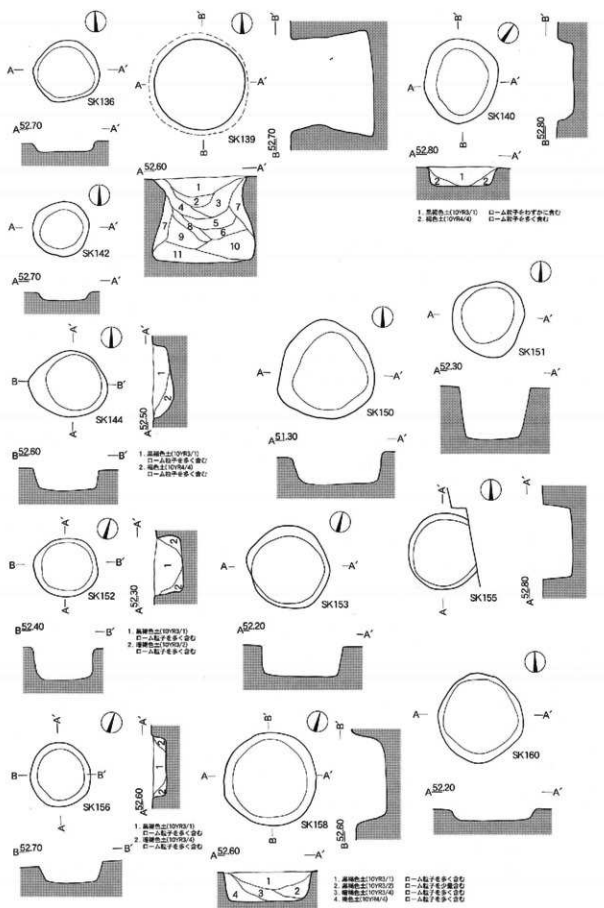
調査区の東側に位置し、北隅で土坑SK115を切って構築している。平面形は長径1.35m、短径1.30mの円形。最大深度90.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は7層の自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第26図34)。34は複節LRL縄文に懸垂文を垂下させる。縄文時代中期・加曾利E2式期に比定される。

79) 土坑SK117 (第22図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.25m、短径1.11mの円形。最大深度79.3cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層の自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

80) 土坑SK118 (第22図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.24m、短径1.16mの円形。最大深度41.3cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土で少量のローム粒子を含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。



第23図 土坑SK136・139・140・142・144・150・151・152・153・155・156・158・160尖頭図

0 2m
(1/60)

81) 土坑SK119 (第22図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.06m、短径1.04mの円形。最大深度117.6cmを測り、壁面は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土上で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

82) 土坑SK120 (第22・26図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.23m、短径1.16mの円形。最大深度88.0cmを測り、壁面は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土上で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器3点を図示(第26図35~37)。35は単節R L縄文地文に沈線区画。36は単節RL。37は単節LR縄文施文。縄文時代中期末と推定する。

83) 土坑SK121 (第22・26図)

調査区の東側に位置し、西側で土坑SK122を切って構築している。平面形は長径1.43m、短径1.30mの円形。最大深度91.2cmを測り、壁面はオーバーハングして立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第26図38・39)。38は口縁部破片。単節LR縄文。39は縄文地文に横位の平行沈線。縄文時代中期・加曾利E1式に比定される。

84) 土坑SK122 (第22・26図)

調査区の東側に位置し、東側で土坑SK121に切られている。平面形は長径1.31m、短径1.19mの円形。最大深度31.2cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第26図40)。40は単節LR縄文施文。縄文時代中期末と推定する。

85) 土坑SK123 (第22・26図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.34m、短径1.30mの円形。最大深度65.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の自然堆積層である。遺物として縄文土器2点と台石1点を図示(第26図41~43)。41は微跡線による区画。単節LR。42は単節R L縄文。43は砂岩製の台石。多孔石である。裏面は磨面をもつ。長さ21.84cm、幅16.45cm、厚さ12.44cm、重量4285.0g。縄文時代中期末・加曾利E4式期に比定される。

86) 土坑SK132 (第22・26図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.24m、短径1.07mの円形。最大深度70.8cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層の自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第26図44)。44は単節RL縄文。縄文時代中期末・加曾利E4式期に比定される。

87) 土坑SK133 (第22図)

調査区の北側に位置し、平面形は長径0.98m、短径0.98mの円形。最大深度21.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

88) 土坑SK136 (第23図)

調査区の中央北側に位置し、平面形は長径1.01m、短径0.97mの円形。最大深度14.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

89) 土坑SK139 (第23・26図)

調査区の北側に位置し、平面形は長径1.45m、短径1.41mの円形。最大深度131.3cmを測り、壁面はオーバーハングして立ち上がる。底面は平坦で、覆土は11層の自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第26図45)。45は単節LR縄文。縄文時代中期末と推定する。

90) 土坑SK140 (第23図)

調査区の北側に位置し、平面形は長径1.32m、短径1.10mの円形。最大深度27.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

91) 土坑SK142 (第23図)

調査区の中央北側に位置し、平面形は長径0.86m、短径0.86mの円形。最大深度15.1cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

92) 土坑SK144 (第23図)

調査区の中央北側に位置し、平面形は長径1.26m、短径1.04mの円形。最大深度32.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

93) 土坑SK150 (第23・26図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.55m、短径1.42mの不正円形。最大深度41.9cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第26図46)、46は胴部破片、刻み目、単節LR縄文施文。縄文時代中期・加曾利E1式期に比定される。

94) 土坑SK151 (第23・26図)

調査区の南側に位置し、平面形は長径1.17m、短径1.13mの円形。最大深度82.3cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土で少量のローム粒・ロームブロックを含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第26図47)、47は口縁部破片。押捺を加えた隆帯が区画される。縄文時代後期初頭・網取1式期に比定される。

95) 土坑SK152 (第23・26図)

調査区の南東側に位置し、平面形は長径0.95m、短径0.94mの円形。最大深度49.3cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第27図48)、48は縄文施文であるが、器面の粗れが著しい。縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

96) 土坑SK153 (第23・27図)

調査区の南東隅に位置し、平面形は長径1.30m、短径1.28mの円形。最大深度46.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土で少量のローム粒・ロームブロックを含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器2点を図示(第27図1・2)。1は深鉢口縁部破片。二本の平行溝線による交互充填施文の楕円形区画。地文は単節LR。2は単節RL。縄文時代後期初頭・称名寺1式期に比定される。

97) 土坑SK154 (第21・27図)

調査区の東側に位置し、北西側で土坑SK99を切って構築している。平面形は長径1.17m、短径1.12mの円形。最大深度96.3cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土で少量のローム粒・ロームブロックを含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器6点を図示(第27図3～8)。3～5は微隆線による区画。口縁部は無文帯。6は沈線による懸垂文間を無文。7は二本の平行溝線による交互充填施文。単節LRを地文とする。縄文時代後期初頭・称名寺1式期に比定される。

98) 土坑SK155 (第23図)

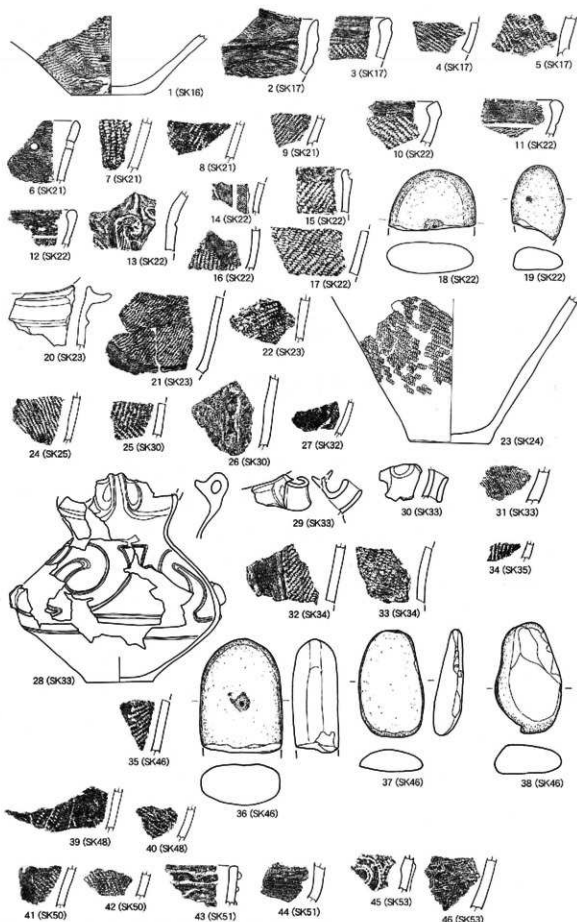
調査区の東側に位置し、東側が未調査区域に伸びている。平面形は長径1.20m、短径1.02mの円形。最大深度45.3cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

99) 土坑SK156 (第23図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.01m、短径0.95mの円形。最大深度29.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層の自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

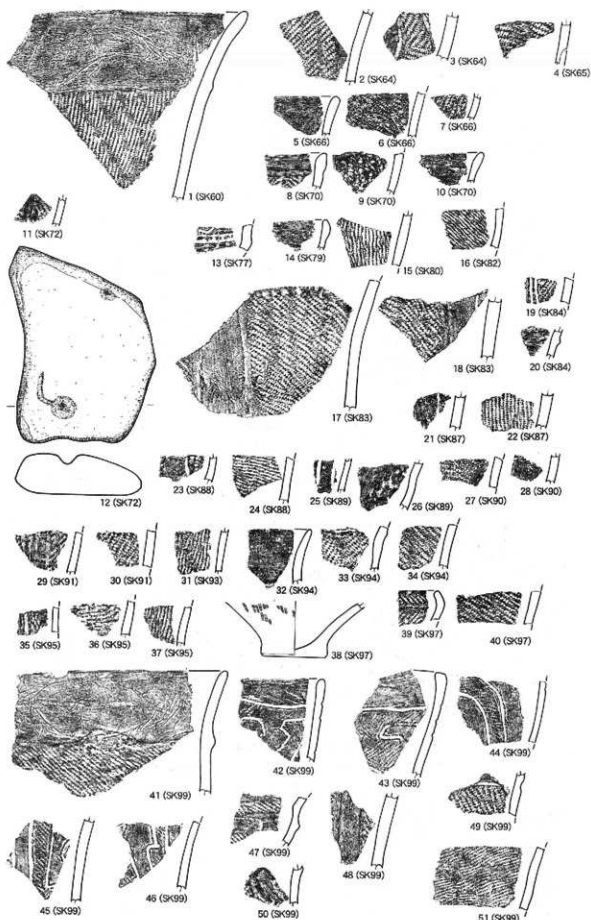
100) 土坑SK158 (第23図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.46m、短径1.45mの円形。最大深度50.0cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層の自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して



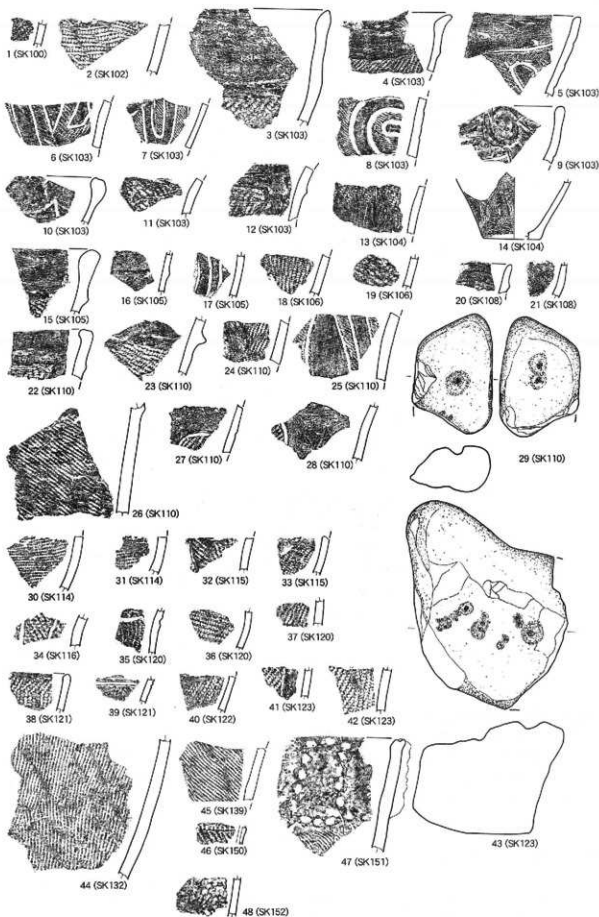
第24図 土坑SK16・17・21・22・23・24・25・30・32・33・34・35・46・48・50・51・53・出土遺物

0 10cm

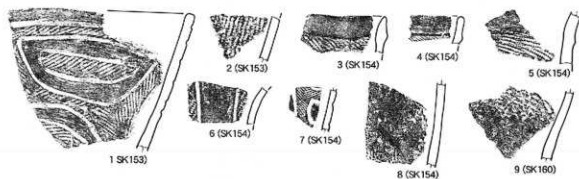


第25図 土坑SK60・64・65・66・70・72・77・79・80・82・83・84・87・88・89・90・91・93・94・95・97・99出土遺物

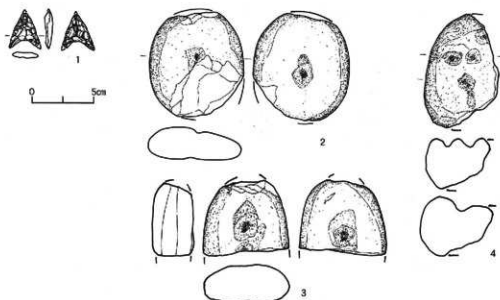
0 10cm



第26図 土坑SK100・102・103・104・105・106・110・114・115・116・120・121・122・123・132・139・150・151・152出土遺物



第27図 土坑SK153・154・160出土遺物



第28図 調査区内出土石器

縄文時代中期末から後期初頭と推定する。

101) 土坑SK160 (第23・27図)

調査区の東側に位置し、平面形は長径1.34m、短径1.33mの円形。最大深度16.1cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、自然堆積層である。遺物として縄文土器1点を図示(第27図9)。9は底部に近い胴部破片。単節R L縄文施文。縄文時代中期末・加曾利E 4式期に比定される。

第3項 遺構外出土の石器 (第28図1~4)

1はチャート製の石鏃。基部の一部をわずかに欠損する。両面とも丁寧な調整磨削が施されている。長さ1.41cm、幅1.52cm、厚さ0.336cm、重量0.66g。2は砂岩製の磨石。両面に凹部をもつ。長さ11.03cm、幅10.04cm、厚さ3.39cm、重量461.0g。3は砂岩製の磨石。両面に比較的深度の深い凹部をもつ。長さ7.38cm、幅8.98cm、厚さ

4.23cm、重量414.0g。4は安山岩製の石皿。凹部を有する。長さ12.06cm、幅7.77cm、厚さ6.09cm、重量289.0g。

第4節 古代の遺構と遺物 (第8～28図)

第1項 竪穴建物跡

1) 竪穴建物跡SI09 (第29図)

調査区の南西側に位置し、西側の未調査区域に大半が延びているため、東壁面のみ検出。確認された規模は南北軸長2.53m、東西軸長0.30mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。主軸方位は $N-7^{\circ}-W$ を示す。床面はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は38.5～51.0cm。覆土はレンズ状堆積を示す自然堆積である。

図示できる遺物は出土していない。覆土の状況から古代と推定する。

2) 竪穴建物跡SI10 (第30～32図)

調査区の南西側に位置し、西側半分が未調査区域に広がっている。確認された規模は南北軸長2.25m、東西軸長1.17mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位は $N-5^{\circ}-W$ を示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は19.7～21.2cm。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況は比較的良好である。北壁面を16.0～32.0cm半円形に掘り込んで煙道部とし、規模は焚口部から煙道部までの長さ69.0cm、両袖間の最大幅84.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。カマド覆土は3層に分層できる。

遺物は須恵器・蓋が出土している。9世紀前半に比定される。

3) 竪穴建物跡SI11 (第33・34図)

調査区の南側に位置し、北側約半分が未調査区域に広がっている。確認できる規模は南北軸長1.42m、東西軸長2.65mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。主軸方位は $N-1^{\circ}-E$ を示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は31.1～32.4cm。壁溝は東辺および南西隅にみられる上面幅で15.0～30.0cm、深さ3.2～5.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は8層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は土師器・杯、甕および鉄製品が出土している。1は杯の口縁部破片。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。2は皿で外面に墨書「真家」が書害されている。5は鉄斧。完存する有袋式無肩の手斧。小形で整った造りである。長さ7.38cm、幅3.35cm、厚さ1.51cm、重量100.0gを測る。

これらは9世紀後半に比定される。

4) 竪穴建物跡SI13 (第35～37図)

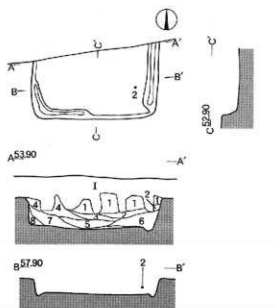
調査区の南東側に位置する。規模は南北軸長3.46m、東西軸長3.48mの方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位は $N-10^{\circ}-W$ を示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は19.5～32.5cm。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況は比較的良好である。北壁面を45.0～50.0cm半円形に掘り込んで煙道部とし、焚口部から煙道部までの長さ119.0cm、両袖間の最大幅118.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築され、覆土は3層に分層できる。

遺物は土師器・甕と鉄が出土している。1・2の甕底部は木炭痕が残置している。3～5はスラブである。5は自然礫にスラグが付着している。3は52.64g、4は45.90gを測る。これらは9世紀中葉に比定される。

5) 竪穴建物跡SI15 (第38～40図)

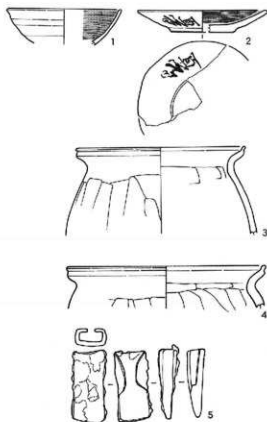
調査区の南側に位置する。規模は南北軸長3.12m、東西軸長3.13mの方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位は $N-5^{\circ}-W$ を示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は7.5～13.5cm。壁溝は構築されていない。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況は比較的良好である。北壁面を43.0～48.0cm三角形に掘り込んで煙道部とし、焚口部から煙道部までの長さ94.0cm、両袖間の最大幅100.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。覆土は2層に分層できる。

遺物は土師器・杯、須恵器・皿、甕、土製品として硯が出土している。1～8は土師器・杯。4は墨書土器。6を除き内面黒色処理。10は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。11は須恵器・風字硯。一部を欠損する。袖首にかけて縁帯が巡り、中央に内堤を設け、底部に貼付けの脚部が付く。奥行き12.47cm、幅



- 1 堀内土 (NWR4/2) 耕作土
 2 堀内土 (NWR3/2) □→土器をわずかに含む
 3 堀内土 (NWR3/4) □→土器をわずかに含む
 4 堀内土 (NWR2/1) □→土器をわずかに含む
 5 堀内土 (NWR2/2) □→土器を多数に含む
 6 堀内土 (NWR2/2) □→土器をわずかに含む
 7 堀内土 (NWR2/2) □→土器をわずかに含む
 8 堀内土 (NWR2/2) □→土器を多数に含む
 9 堀内土 (NWR2/2) □→土器をわずかに含む
 10 堀内土 (NWR2/2) □→土器を多数に含む

第33図 竪穴建物SI11実測図



第34図 竪穴建物SI11出土遺物

遺物は土師器・甕・手捏土器が出土している。3は木葉痕が残置している。4は手捏土器。これらは8世紀代に比定される。

8) 竪穴建物跡SI18 (第47～49図)

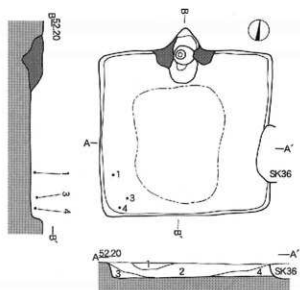
調査区の東側に位置する。規模は南北軸長4.36m、東西軸長4.48mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位は $N-10^{\circ}-E$ を示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は13.0～29.0cm。壁溝は北辺を除き構築されており、上面幅14.0～27.0cm、深さ1.0～8.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を94.0～99.0cm三角形に掘り込んで煙道部として、焚口部から煙道部までの長さ190.0cm、両袖間の最大幅163.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、甕、須恵器・坏、甕が出土している。1～6は土師器。7～10は須恵器。7～9は坏。ロク口成形。10は甕の胴部破片で、内外面はタタキにより器面調整を施している。

これらは8世紀中葉に比定される。

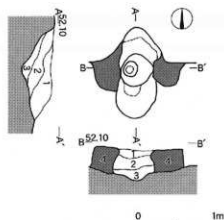
9) 竪穴建物跡SI20 (第50～52図)

調査区の東側に位置する。規模は南北軸長3.20m、東西軸長3.49mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位は $N-7^{\circ}-W$ 。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は4.0～18.0cm。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況は比較的良好である。北壁面を24.0～26.0cm三角形に掘り込んで煙道部とし、焚口部から煙道部までの長さ90.0cm、両袖間の最大幅98.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。



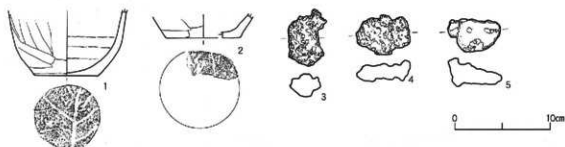
1. 須恵焼土(9世紀/1) ローム粒子をわずかに含む
 2. 須恵焼土(9世紀/2) ローム粒子を多く含む
 3. 須恵焼土(9世紀/2) ローム粒子を多く含む
 4. 須恵焼土(9世紀/2) ローム粒子をわずかに含む

第35図 竪穴建物SI13実測図



1. 須恵焼土(9世紀/1) ローム粒子を多く含む
 2. 須恵焼土(9世紀/2) ローム粒子を多く含む
 3. 土壌(赤褐色土)9世紀/2 第1層から第2層にかけて
 4. 須恵焼土(9世紀/2) カマド構築材

第36図 竪穴建物SI13カマド実測図



第37図 竪穴建物SI13出土遺物

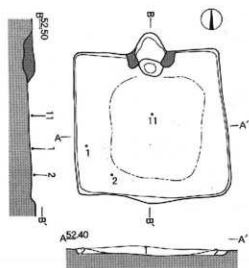
遺物は須恵器・高台付杯、甕および軽石が出土している。1はロクロ成形。3は軽石。加工面は明瞭ではないが、砥石として利用されたものであろう。長さ5.57cm、幅5.84cm、厚さ4.38cm、重量59.0g。これらは9世紀前葉に比定される。

10) 竪穴建物跡SI21 (第53～54図)

調査区の東側に位置する。規模は南北軸長4.51m、東西軸長4.38mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位はN-0°を示す。床面はほぼ平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、壁高は43.5～62.0cm。壁溝は北辺カマド東側の一部を除き、全周する。上面幅11.0～29.0cm、深さ1.5～8.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は8層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況は良好である。北壁面を22.0cm三角形に掘り込んで煙道部とし、焚口部から煙道部までの長さ165.0cm。両袖間の最大幅120.0cm。袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。遺物は土師器・高台付杯、甕、須恵器・杯、高台付杯が出土している。1～8は土師器。9～12は須恵器。

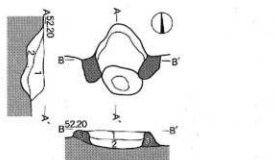
これらは9世紀前葉に比定される。

11) 竪穴建物跡SI22 (第56・57図)



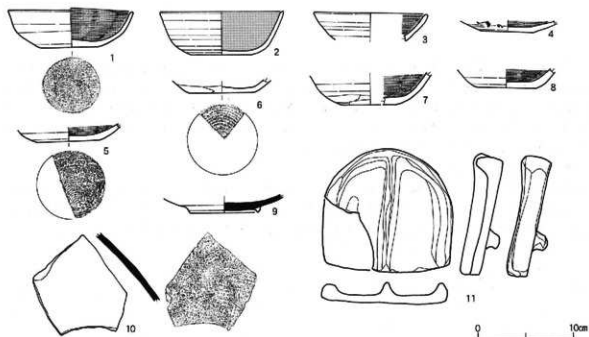
第38図 竪穴建物SI15実測図

1. 黒褐色土(10VR3/1) ローム粒子をわずかに含む
2. 黒褐色土(10VR3/2) ローム粒子を多く含む



1. 黒褐色土(10VR3/2) ローム粒子・炭末をわずかに含む
2. 黒褐色土(10VR3/2) 炭末を多く含む
3. 灰白色粘土(10VR5/1) カマド構築材

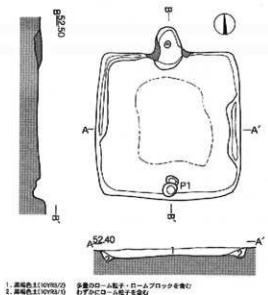
第39図 竪穴建物SI15カマド実測図



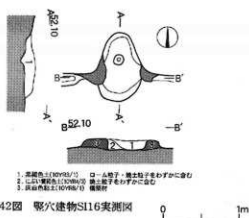
第40図 竪穴建物SI15出土遺物

調査区の東側に位置し、北側約半部が未調査区域に延びている。規模は検出南北軸長2.79m、検出された東西軸長4.40mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドが北壁に設置されているものとする主軸方位はN-0°を示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は35.5~46.0cm。覆土は7層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は土師器・坏、甕、須恵器・坏、高台付坏、石製品・砥石、鉄製品・刀子が出土している。1~3が土師器。



第41図 竪穴建物SI16実測図



第42図 竪穴建物SI16実測図



第43図 竪穴建物SI16出土遺物

1は塊形を呈し、内面黒色処理。6・7は砥石。8・9は刀子。6は凝灰岩製の砥石。平面長方形で裾広がりの形態。断面長方形。四面砥ぎ減りし、一面には細い擦痕が残る。長さ13.11cm、幅3.75cm、高さ4.47cm、重量269.0g。7は緑泥片岩製の砥石破片。長さ7.99cm、幅1.99cm、厚さ0.58cm、重量18.0g。8・9は刀子破片。小形の刀子である。8は長さ2.48cm、刃幅1.48cm、背厚さ0.47cm、重量4.12g。9は長さ2.23cm、刃幅1.37cm、背厚さ0.93cm、重量4.26g。これらは10世紀前葉に比定される。

12) 竪穴建物跡SI23 (第58～60図)

調査区の北側に位置する。規模は南北軸長3.22m、東西軸長3.03mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位はN-10°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾してわずかに立ち上がり、壁高は3.0～5.0cm。覆土は単一層である。カマドは北壁辺に設置されているが、遺存状況が不良のため計測できなかった。

遺物は土師器・高台付坏が出土している。これらは9世紀後葉に比定される。

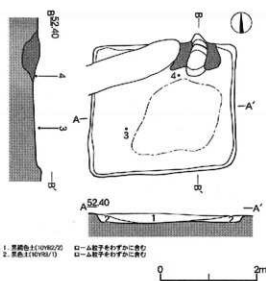
13) 竪穴建物跡SI24 (第61～63図)

調査区の東側に位置する。規模は南北軸長3.32m、東西軸長3.47mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位はN-0°を示す。床面はほぼ平坦で、明瞭な貼床構築がみられないが、床硬化面はカマド前面から建物の中央部とくに顕著であった。壁面は外傾して立ち上がり、壁高は10.5～21.5cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況はやや不良である。北壁面を20.0～30.0cm楕円形に掘り込んで煙道部としている。焚口部から煙道部までの長さ90.0cm、検出された両袖間の最大幅68.0cm。袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

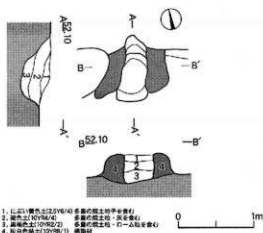
遺物は土師器・高台付坏、甕、須恵器・甕、鉄製品である刀子が出土している。1・2は土師器。2の底部は木葉痕が残置している。3は須恵器・甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。4は刀子の破片。刃先を欠損している。茎部に木質を残す。現存長11.21cm、刃幅0.98cm、背厚さ0.56cm、重量11.04gを測る。これらは9世紀後葉に比定される。

14) 竪穴建物跡SI25 (第64～66図)

調査区の東側に位置する。規模は南北軸長3.15m、東西軸長3.60mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置さ

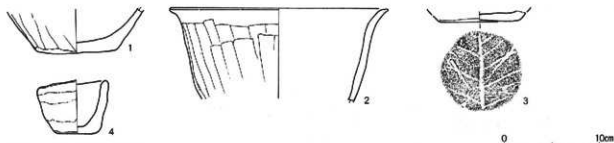


第44図 竪穴建物SI17実測図



第45図 竪穴建物SI17カマド実測図

第46図 竪穴建物SI17出土遺物

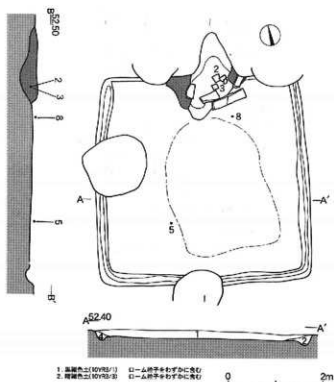


れ、主軸方位は $N-7^{\circ}-W$ を示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は6.0cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されているが、遺存状況が不良のため計測できなかった。

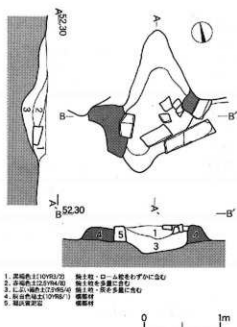
遺物は土師器・坏、甕が出土している。1は坏で内面ヘラミガキの後に黒色処理を施している。これらは9世紀後葉葉に比定される。

15) 竪穴建物跡SI26 (第67~69図)

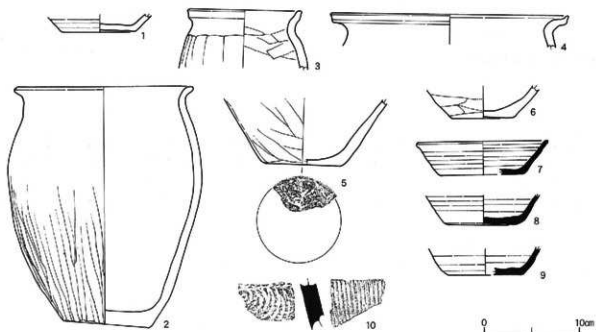
調査区の中央に位置する。規模は南北軸長4.37m、検出された東西軸長4.17mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位は $N-3^{\circ}-E$ を示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は20.0~32.5cm。壁溝は全周し、上面幅13.0~46.0cm、深さ1.5~12.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴4本と梯子穴の5本穿ってある。P1は径30.0×25.0cmの円形、深さ47.3cm。P2は径30.0×29.0cmの円形、深さ43.3cm。P3は径25.0×21.0cmの円形、深さ59.0cm。P4は径22.0×21.0cmの円形、深さ54.0cm。P5は径39.0×33.0cmの円形、深さ5.8cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況は良好である。北壁面を35.0cm三角形に掘りこんで煙道部としている。焚口部から煙道部までの長さ112.0cm、両袖間の最大幅115.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。



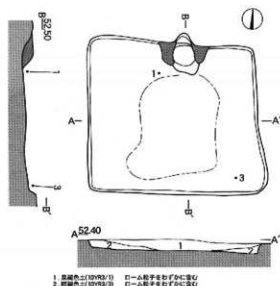
第47図 竪穴建物SI18実測図



第48図 竪穴建物SI18カマド実測図

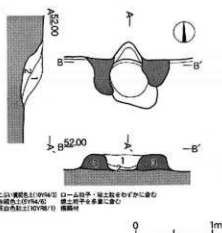


第49図 竪穴建物SI18出土遺物



第50図 竪穴建物SI20実測図

0 2m



第51図 竪穴建物SI20カマド実測図



第52図 竪穴建物SI20出土遺物

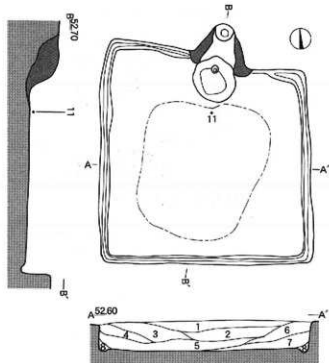
0 10cm

遺物は土師器・鉢、甕、須恵器・坏、蓋、鉄製品として鉄鎌が出土している。5は尖根の鉄鎌。錆化が著しく茎部が明瞭ではない。現存長8.49cm、鎌身長1.45、鎌身幅0.89cm、茎幅0.74cm、重量8.66g。6は鋸鉄状鉄製品。破片で現存長3.33cm、幅5.22cm、厚さ0.65cm、重量38.88g。これらは8世紀後半から9世紀前半に比定される。

16) 竪穴建物跡SI27 (第70~72図)

調査区の北側に位置する。規模は南北軸長4.38m、東西軸長3.80mを測り、平面形は長方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位はN-1°-Eを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は31.5~37.5cmを測る。柱穴は主柱穴4本と梯子穴の5本穿ってある。P1は径37.0×29.0cmの楕円形、深さ68.5cm。P2は径27.0×19.5cmの楕円形、深さ71.0cm。P3は径25.0×22.0cmの円形、深さ66.0cm。P4は径24.5×21.0cmの円形、深さ75.5cm。P5は径16.5×15.0cmの円形、深さ42.0cmを測る。出入口部の規模は、南北軸長84.0cm、東西軸長105.0cm、深さは4.5cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を58.0~64.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。焚口部から煙道部までの長さ146.0cm、両袖間の最大幅135.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

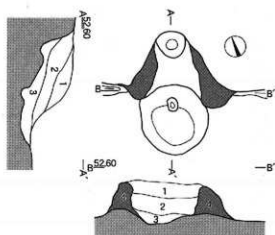
遺物は土師器・坏、高台付坏、甕、須恵器・坏、甕、土製紡錘車、管状土鍾、鉄製品である刀子、鉄滓が出土している。1は土師器・坏で内面黒色処理が施されている。11・12は土製紡錘車の破片である。13~42は管状土鍾で破片を含め30点がまとまって出土している。9・10は須恵器・甕の胴部破片。平行タタキ。11・12は土製紡錘車の破片。11は側面に丸みを持つ。現存上面長2.46cm、下面長1.48cm、高さ1.78cm、孔径0.58cm、重量19.5g。12は



- | | | | |
|------------------|------------------|------------------|--------------|
| 1. 黒褐色土(10YR5/2) | ロ-A敷子もわずかに含む | 5. 黒緑色土(10YR2/7) | ロ-A敷子も多く含む |
| 2. 黒褐色土(10YR5/1) | ロ-A敷子・焼土粒もわずかに含む | 6. 黒緑色土(10YR2/1) | ロ-A敷子もわずかに含む |
| 3. 黒褐色土(10YR5/3) | ロ-A敷子も多く含む | 7. 黒緑色土(10YR2/7) | ロ-A敷子も多く含む |
| 4. 黒褐色土(10YR5/2) | ロ-A敷子もわずかに含む | 8. 黒緑色土(10YR2/2) | ロ-A敷子も多く含む |

第53図 竪穴建物SI21実測図

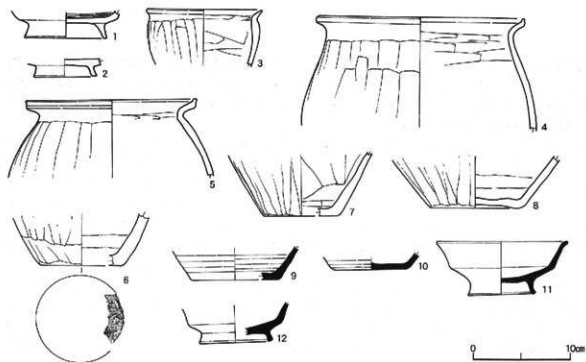
0 2m



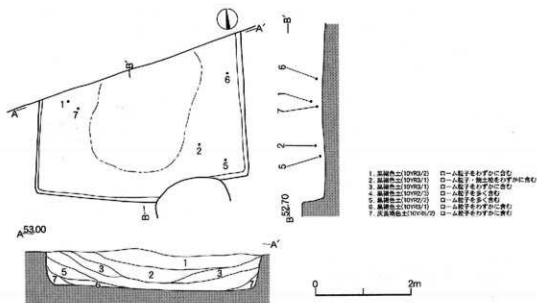
- | | |
|------------------|------------------|
| 1. 黒褐色土(10YR5/2) | ロ-A敷子・焼土粒もわずかに含む |
| 2. 黒褐色土(10YR5/3) | ロ-A敷子・焼土粒もわずかに含む |
| 3. 黒褐色土(10YR5/1) | 焼土粒も多く含む |
| 4. 黒褐色土(10YR5/2) | 焼土粒も多く含む |

第54図 竪穴建物SI21カマド実測図

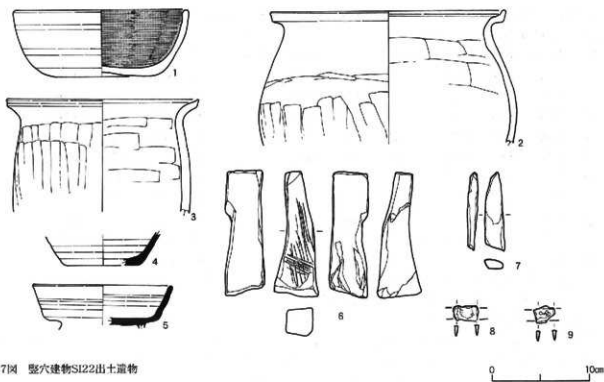
0 1m



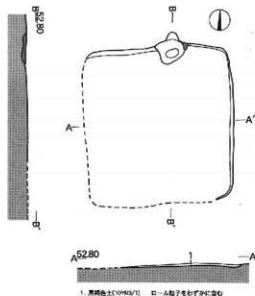
第55図 竪穴建物SI21出土遺物



第56図 竪穴建物SI22実測図

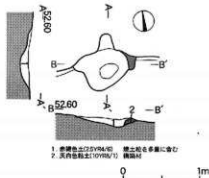


第57図 竪穴建物SI22出土遺物



第58図 竪穴建物SI23実測図

0 2m



第59図 竪穴建物SI23カマド実測図

0 1m



第60図 竪穴建物SI23出土遺物

0 10cm

現存上面長2.30cm、下面長1.21cm、高さ1.68cm、孔径0.55cm、重量1.10g。13~42は管状土垂である。計測は下記のとおりである。

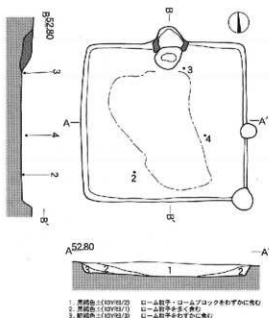
番号	長さcm	幅cm	重さg	番号	長さcm	幅cm	重さg	番号	長さcm	幅cm	重さg
13	5.72	1.10	6.50	14	6.00	0.99	4.46	15	5.63	0.87	4.52
16	5.47	0.98	4.56	17	6.07	0.98	4.46	18	5.32	0.98	3.46
19	5.78	0.91	4.20	20	5.67	0.94	4.32	21	4.95	0.98	4.06
22	4.56	0.96	4.34	23	4.54	0.97	3.44	24	5.37	1.06	5.26
25	4.45	0.98	3.98	26	4.67	0.92	3.94	27	4.93	0.86	3.40
28	4.19	0.94	3.62	29	3.84	0.85	2.76	30	3.87	0.93	3.06
31	4.06	1.04	3.56	32	3.67	0.97	3.30	33	3.73	1.08	3.90
34	3.61	0.80	2.70	35	3.45	1.00	2.74	36	3.18	0.90	2.16
37	2.75	0.92	2.04	38	3.49	0.97	2.76	39	3.32	0.93	2.50
40	3.73	1.06	2.96	41	2.18	0.90	1.70	42	2.49	0.88	1.54

43は刀子で基部先端を欠損する。長さ9.73cm、刃幅1.20cm、背厚さ0.34cm、重量6.92g。44はスラグである。重量110.0gを測る。これらは9世紀後葉に比定される。

17) 竪穴建物跡SI34 (第73~75図)

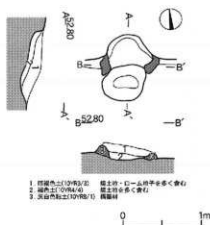
調査区の北側に位置する。規模は南北軸長3.17m、東西軸長3.18mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位はN-1°-Eを示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は13.5~21.0cm、覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況はやや不良である。北壁面を59.0~67.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。焚口部から煙道部までの長さ119.0cm、両袖間の最大幅132.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、甕、須恵器・甕、凝灰岩製の砥石が出土している。1・2・4の坏は内面がヘラミガキの後に黒色処理を施している。6の甕底部は木葉痕を残置している。9は凝灰岩製の砥石。平面長方形で、断面長方形。六面とも砥石面が認められ裏裏二面は砥石減りし、四面に擦痕が認められる。長さ17.47cm、幅5.18cm、高さ3.34cm、

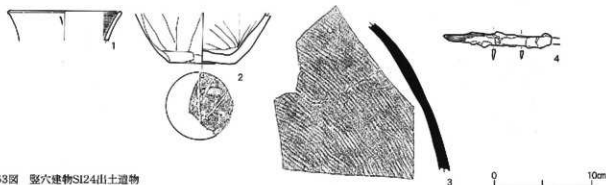


第61図 竪穴建物SI24基礎図

0 2m



第62図 竪穴建物SI24カマド実測図



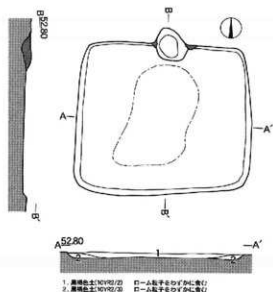
第63図 竪穴建物SI24出土遺物

0 10cm

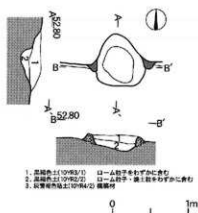
重量299.0g。これらは9世紀中葉に比定される。

18) 竪穴建物跡SI35 (第76~79図)

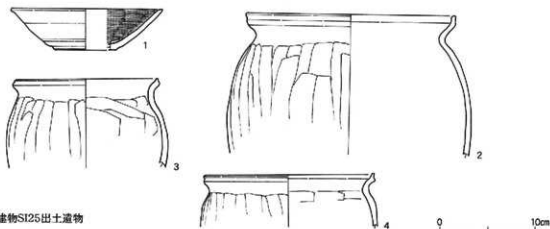
調査区の北西側に位置し、床面に多量の炭化材が検出される火災建物である。規模は南北軸長4.53m、東西軸長4.46mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位はN-2°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は42.0~67.0cmを測る。壁溝は北東隅および南辺中央の一部掘削部が欠ける部分が見られるが、検出された各辺で構築される。上面幅9.0~30.0cm、深さ9.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴4本と梯子穴の5本穿ってある。P1は径20.5×19.5cmの円形、深さ29.5cm。P2は径32.5×28.5cmの円形、深さ46.5cm。梯子穴P3は径50.0×44.0cmの円形、深さ49.0cm。北壁中柱P4は径51.5×48.0cmの不正円形、深さ54.5cm。同じく北壁中柱P5は径44.5×24.5cmの不正楕円形、深さ61.0cmを測る。覆土は5層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を94.0~97.0cm楕円形に掘り込んで煙道部としている。焚口部から煙道部までの長さ201.0cm、両袖間の最大幅132.0cm。



第64図 竪穴建物SI25実測図



第65図 竪穴建物SI25カマド実測図



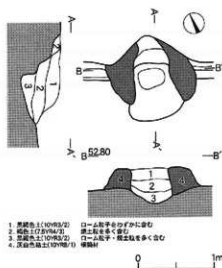
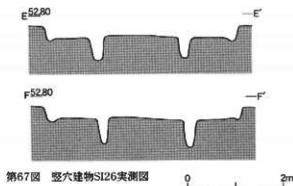
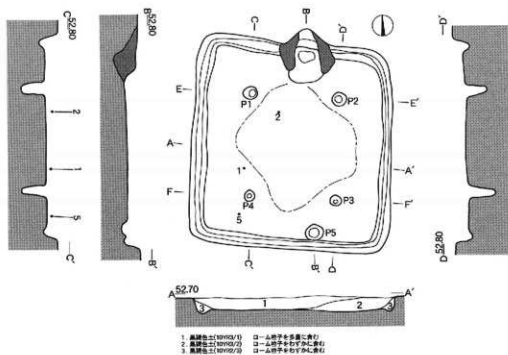
第66図 竪穴建物SI25出土遺物

袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

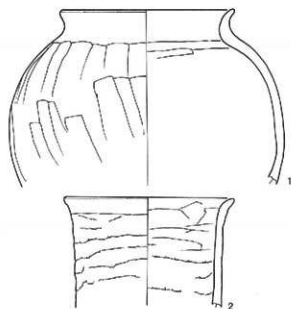
遺物は土師器・坏、高台付坏、甕、須恵器・坏、高台付坏、蓋、甕、鉄製品・鉄鏃、刀子、鉄滓、石製品・磨石が出土している。2～8は土師器・高台付坏で内面へラミガキの後に黒色処理を施している。13～19は須恵器である。16は蓋。17～19は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。20は鉄鏃。茎部端部を欠損する。有須織である鏃部は両丸造りである。茎部には木質が残る。現存長11.44cm、鏃身長6.23cm、鏃身幅3.76cm、鏃厚0.76cm、茎部幅0.61cm、重量26.24g。21は刀子の破片。小形の刀子で、刃部に木質を残す。刃幅1.39cm、背厚さ0.53cm、重量5.76g。22はスラグ。重量65.0g。23は砂岩製の磨石。側面に磨面が確認できる。長さ9.78cm、幅5.17cm、厚さ2.91cm、重量252.0gを測る。これらは9世紀前葉に比定される

19) 竪穴建物跡SI36 (第80～82図)

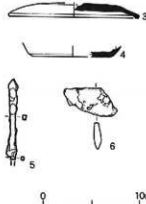
調査区の中央に位置する。規模は南北軸長4.10m、東西軸長3.95mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置さ

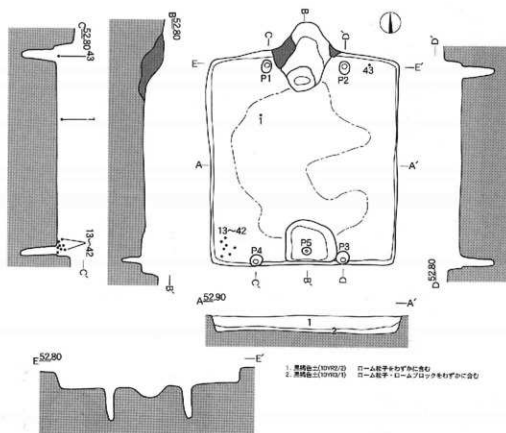


第68図 竪穴建物SI26カマド実測図



第69図 竪穴建物SI26出土遺物





第70図 竪穴建物SI27実測図

0 2m

れ、主軸方位は $N-0^\circ$ を示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は41.0～50.5cmを測る。壁溝は南西隅の一部掘削部が欠ける部分が見られるが、ほぼ全周する。上面幅で15.0～50.5cm、深さ0.5～11.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は梯子穴と思われる南辺際に穿ってある。重複しているが径35.0×29.0cmの円形、深さ26.0cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を59.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。焚口部から煙道部までの長さ136.0cm、検出された両袖間の最大幅121.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

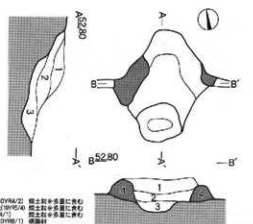
遺物は土師器・埴、須恵器・坏、蓋、甗。石製品である磨石破片が出土している。

1～4が土師器。5～11は須恵器である。11の甗は把手が付く。12は砂岩製の磨石破片。長さ3.54cm、幅2.76cm、厚さ4.20cm、重量52.5gを測る。これらは9世紀前葉に比定される。

20) 竪穴建物跡SI37 (第83～85図)

調査区の中央に位置する。規模は南北軸長4.27m、東西軸長4.27mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置さ

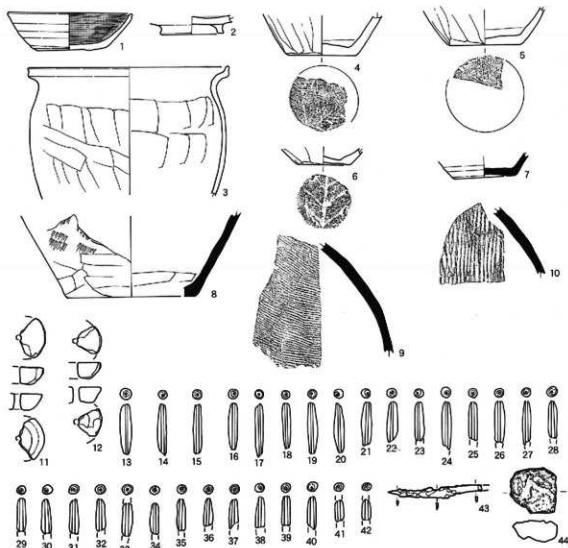
1. 須恵器土(1998/2) □—ム登平中平土を以て中心
2. 須恵器土(1998/2) □—ム登平・U—ムフロックをわずかに含む



第71図 竪穴建物SI27カマド実測図

0 1m

1. 須恵器土(1998/2) 竪土中平土を以て中心
2. U—ム登平土(1998/2) 竪土中平土を以て中心
3. 須恵器土(1998/2) 竪土中平土を以て中心
4. 須恵器土(1998/1) 竪土中平土



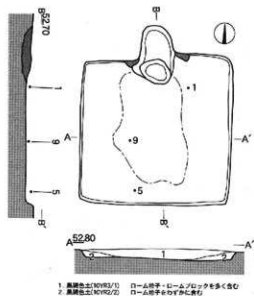
第72図 竪穴建物SI27出土遺物

れており、主軸方位はN-5°-Eを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は11.0~20.0cmを測る。壁溝は全周し、上面幅10.0~35.0cm、深さ5.0~11.9cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴4本と梯子穴の5本穿ってある。P 1 径36.0×31.0cmの円形、深さ75.5cm。P 2 径35.0×31.0cmの円形、深さ72.5cm。P 3 径39.0×29.5cmの楕円形、深さ50.0cm。P 4 径44.0×33.5cmの楕円形、深さ59.0cm。梯子穴P 5 径24.0×18.0cmの楕円形、深さ29.0cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を37.0~39.0cm箱形に掘り込んで煙道部としている。焚口部から煙道部までの長さ107.0cm、検出された両袖間の最大幅117.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は須恵器・坏、甕が出土している。4・5は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。これらは9世紀前葉に比定される。

22) 竪穴建物跡SI38 (第86~88図)

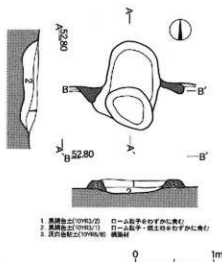
調査区の中央に位置する。規模は南北軸長2.74m、東西軸長3.18mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置さ



1. 黒褐色土(10V43/1) ローム粒子・ロームブロックを多く含む
2. 黒褐色土(10V42/2) ローム粒子をわずかに含む

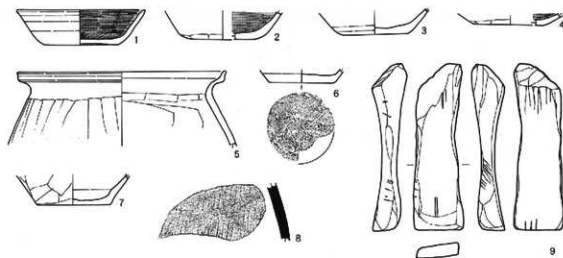
第73図 竪穴建物SI34実測図

0 2m



1 黒褐色土(10V42/2) ローム粒子をわずかに含む
2 黒褐色土(10V42/2) ローム粒子・灰土をわずかに含む
3 灰白色粘土(10V45/1) 焼炭粉

第74図 竪穴建物SI34カマド実測図

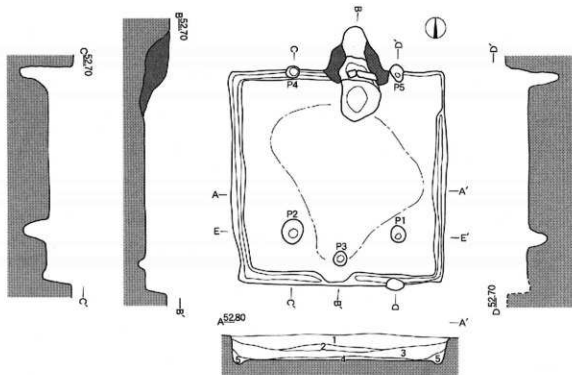


第75図 竪穴建物SI34出土遺物

0 10cm

れ、主軸方位は $N-1^{\circ}-E$ を示す。床面は平坦で、壁面はほぼ外傾して立ち上がり、壁高は10.5~17.0cm。柱穴は梯子穴と思われる南辺際に1本穿ってある。径32.0×32.0cmの円形、深さ17.3cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を43.0~46.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。焚口部から煙道部までの長さ102.0cm、検出された両袖間の最大幅82.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

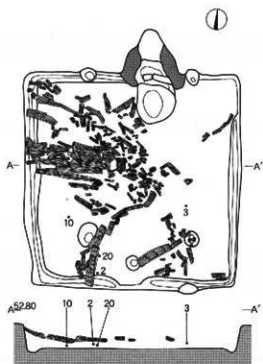
遺物は土師器・坏、甕。2は底面に判読できないが墨書されている。5の裏底部は木葉痕が残存する。これらは9世紀後葉に比定される。



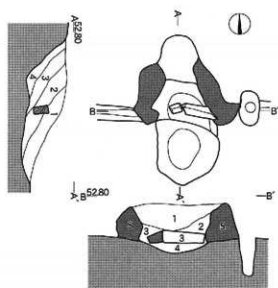
- | | |
|-----------------|-----------------------|
| 1. 黒曜石 (YWR3/7) | ロ-A 磁子・ローンプロックを多く含む |
| 2. 黒曜石 (YWR3/7) | ロ-A 磁子・黒土炭を多く含む |
| 3. 黒曜石 (YWR3/7) | ロ-A 磁子・黒土炭・赤土炭を多く含む |
| 4. 黒曜石 (YWR3/7) | ロ-A 磁子・黒土炭・赤土炭をわずかに含む |
| 5. 黒曜石 (YWR3/7) | ロ-A 磁子・黒土炭・赤土炭を少量に含む |



第76図 竪穴建物SI35実測図

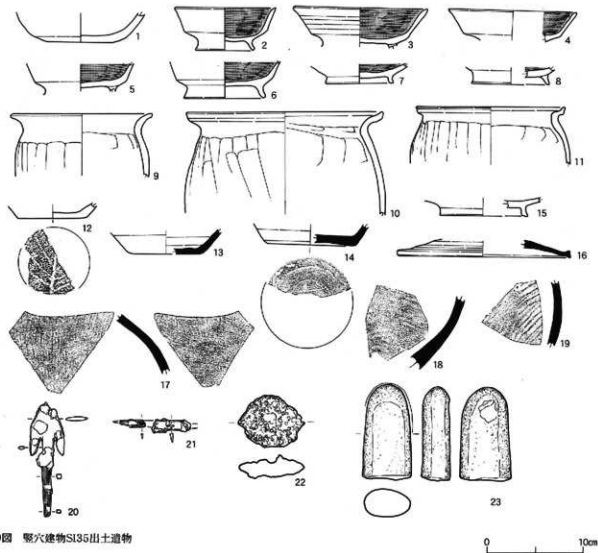


第77図 竪穴建物SI35炭化物出土状況図



- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1. 黒曜石 (YWR3/7) | ロ-A 磁子をわずかに含む |
| 2. 黒曜石 (YWR3/7) | ロ-A 磁子・黒土炭をわずかに含む |
| 3. 赤土炭 (YWR3/7) | ロ-A 磁子・黒土炭・赤土炭を多く含む |
| 4. 黒曜石 (YWR3/7) | ロ-A 磁子・黒土炭・赤土炭を多く含む |
| 5. 灰状物 (YWR3/7) | 黒土炭 |

第78図 竪穴建物SI35カマド実測図



第199図 竪穴建物跡SI35出土遺物

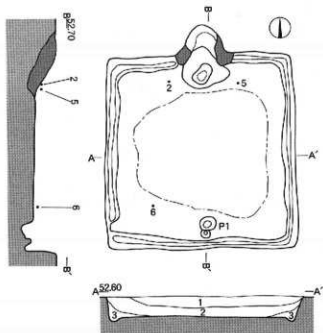
23) 竪穴建物跡SI39 (第89～91図)

調査区の中央に位置する。規模は南北軸長3.91m、東西軸長3.42mを測り、平面形は長方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位は $N-3^{\circ}-W$ を示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は25.0～34.0cmを測る。柱穴は梯子穴が南辺際1本穿ってある。径34.0×30.0cmの円形、深さ14.0cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を48.0～52.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。焚口部から煙道部までの長さ63.0cm、検出された両袖間の最大幅112.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・埴、甕、須恵器・高台付埴が出土している。1～6は土師器。1～3は埴で内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。これらは9世紀後葉に比定される。

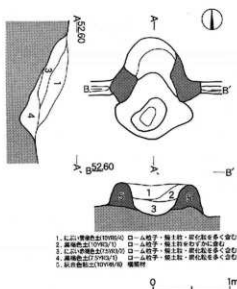
24) 竪穴建物跡SI40 (第92～94図)

調査区の中央に位置する。規模は南北軸長4.14m、東西軸長3.66mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位は $N-3^{\circ}-E$ を示す。床面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、壁高は19.5～42.0cmを測る。壁溝は南辺および東辺南側のみ構築されている。上面幅で12.5～38.0cm、深さ4.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は10本穿っており、壁柱穴である。P1径18.0×15.0cmの円形、深さ44.5cm。P2径21.0×15.0cmの楕円形、深



1. 厚焼土(1995/2) □—ム粒子・ロ—ムブロックを多く含む
 2. 厚焼土(1995/1) □—ム粒子・ロ—ムブロックを多く含む
 3. 厚焼土(1995/2) □—ム粒子をわずかに含む

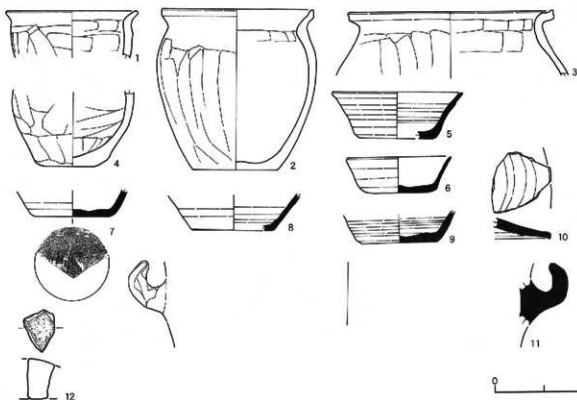
第80図 竪穴建物SI36実測図



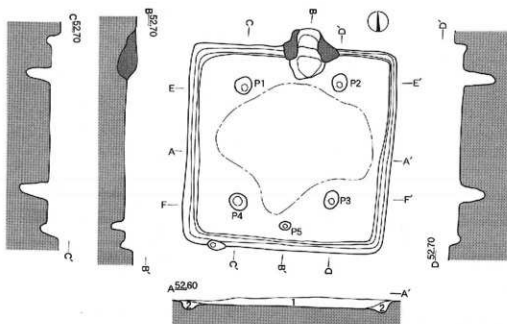
1. 土器(厚焼土1995/4) □—ム粒子・粘土を多く含む
 2. 厚焼土(1995/1) □—ム粒子・粘土を多く含む
 3. 土器(厚焼土1995/1) □—ム粒子・粘土を多く含む
 4. 厚焼土(1995/1) □—ム粒子・粘土を多く含む
 5. 厚焼土(1995/4) 厚焼土



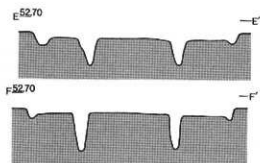
第81図 竪穴建物SI36カマド実測図



第82図 竪穴建物SI36出土遺物

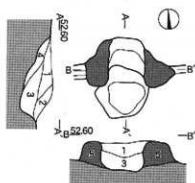


1. 高麗色土 (1979/6/2) □—ム松子・ロームブロックをわずかに含む
 2. 瑞穂色土 (1979/6/4) □—ム松子・ロームブロックを多く含む



第83図 竪穴建物SI37実測図

0 2m



1. 瑞穂色土 (1979/6/2) □—ム松子・黄土層、比較的多く含む
 2. 高麗色土 (1979/6/2) □—ム松子・黄土層を多く含む
 3. 高麗色土 (1979/6/2) □—ム松子・黄土層、層状に多く含む
 4. 高麗色土 (1979/6/2) 瑞穂色土

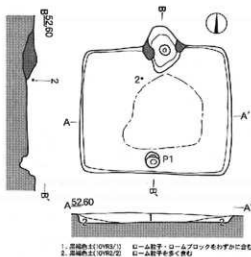
0 1m

第84図 竪穴建物SI37カマド実測図



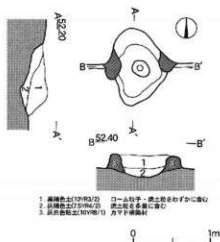
第85図 竪穴建物SI37出土遺物

0 10cm

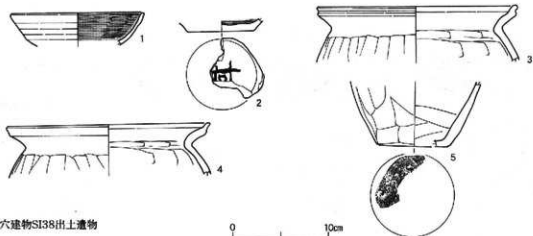


第86図 竪穴建物SI38実測図

0 2m



第87図 竪穴建物SI38カマド実測図



第88図 竪穴建物SI38出土遺物

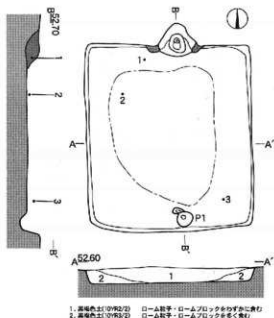
0 10cm

さ57.0cm, P 3 径16.5×14.0cmの円形、深さ29.0cm, P 4 径22.0×18.5cmの円形、深さ52.0cm, P 5 径20.0×17.0cmの円形、深さ32.0cm, P 6 径21.5×18.5cmの円形、深さ70.0cm, P 7 径18.5×18.0cmの円形、深さ38.0cm, P 8 径22.0×19.0cmの円形、深さ30.0cm, P 9 径20.0×18.0cmの円形、深さ47.0cm, P 10 径19.0×17.0cmの円形、深さ25.0cmを測る。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況は比較的良好である。北壁面を45.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ145.0cm、両袖間の最大幅140.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・変。須恵器・坏が出土している。1～4は土師器。3・4の甕底部に木葉痕を残置している。5～8は須恵器。5の底部にヘラ記号がみられる。これらは8世紀後葉に比定される。

25) 竪穴建物跡SI41 (第95～97図)

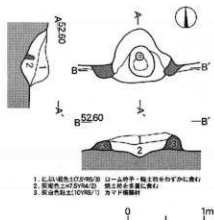
調査区の中央に位置する。規模は南北軸長4.14m、東西軸長4.34mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位はN-3°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は12.0～24.0cmを測



第89図 竪穴建物SI39実測図

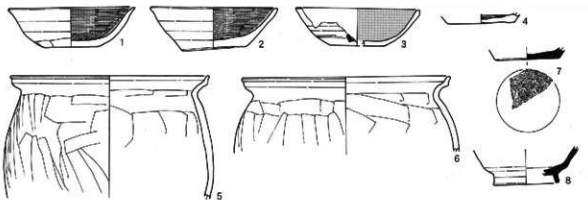
0 2m

1. 黒褐色土(中層部) ローム散平・ロームブロックをわずかに含む
2. 黒褐色土(下層部) ローム散平・ロームブロックを多く含む



第90図 竪穴建物SI39カマド実測図

1. 土色(褐色)の砂状土質 ローム散平・粘土粒をわずかに含む
2. 黒褐色土(中層部) 粘土粒を多く含む
3. 黒褐色土(下層部) 粘土粒を多く含む

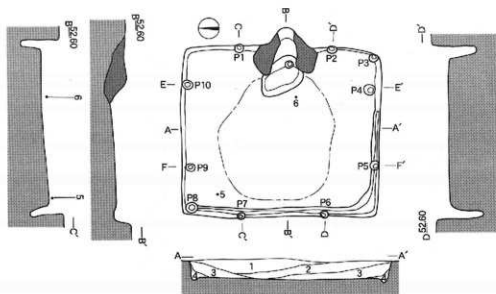


第91図 竪穴建物SI39出土遺物

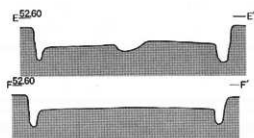
0 10cm

る。壁溝は南辺と西辺南側の一部掘削部が欠ける部分が見られる。規模は上面幅で12.0~24.0cm、深さ1.5~12.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴4本と梯子穴の5本が穿ってある。P 1径27.5×26.0cmの円形、深さ39.0cm。P 2径23.5×22.0cmの円形、深さ28.0cm。P 3径27.5×26.5cmの円形、深さ23.5cm。P 4径27.0×26.0cmの円形、深さ26.5cm。梯子穴P 5は径28.5×23.0cmの楕円形、深さ28.5cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は良好である。北壁面を54.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ156.0cm、両袖間の最大幅115.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、高台付坏、甕、須恵器・坏、蓋。土製品である管状土鍾3点、土製円板、鉄製品である大型鋤が出土している。1~3が土師器。1の内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。4~8は須恵器。4の底部

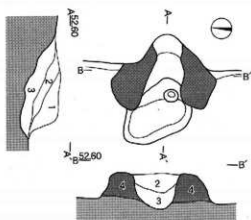


1. 遺構断面(1/1000/3) □—ムナ子をわずかに含む
2. 遺構断面(1/1000/2) □—ムナ子 □—ムナ子を含む
3. 遺構断面(1/1000/1) □—ムナ子 □—ムナ子を含む
4. 遺構断面(1/1000/0) □—ムナ子



第92図 竪穴建物SI40実測図

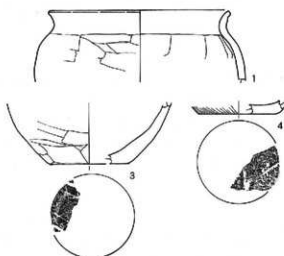
0 2m



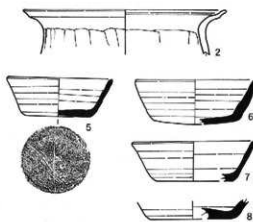
1. 遺構断面(1/1000/3) □—ムナ子を含む
2. □—ムナ子 □—ムナ子を含む
3. □—ムナ子 □—ムナ子を含む
4. 遺構断面(1/1000/0) □—ムナ子

第93図 竪穴建物SI40カマド実測図

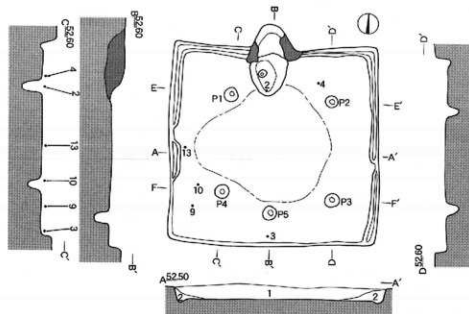
0 1m



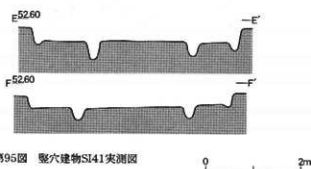
第94図 竪穴建物SI40出土遺物



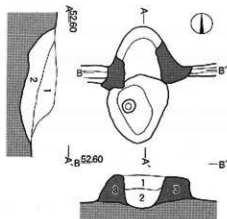
0 10cm



- 1. 黒褐色土(10VR5) ① ローム跡をわずかに含む
- 2. 黒褐色土(10VR5) ② ローム跡・ロームブロックをわずかに含む
- 3. 黒褐色土(10VR5) ③ ローム跡・ロームブロックをわずかに含む



第95図 竪穴建物SI41実測図

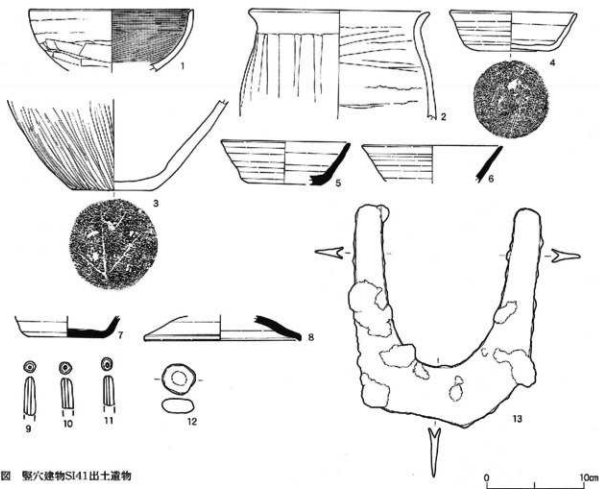


- 1. 灰褐色土(10VR6) ① ローム層・炭土層を少量含む
- 2. 灰褐色土(10VR6) ② 炭土層を少量含む
- 3. 灰褐色土(10VR6) ③ ローム跡をわずかに含む

第96図 竪穴建物SI41カマド実測図

にヘラ記号がみられる。9～11は管状土垂。9は長さ4.56cm、幅1.24cm、重量6.20g。10は長さ3.38cm、幅1.24cm、重量4.68g。11は長さ3.23cm、幅1.20cm、重量4.04g。12は土製円板である。碁石状を呈し、側面を研磨している。長さ3.25cm、短径3.14cm、厚さ1.54cm、重量10.08g。13は鐵鍬先の完存品である。柄部がU字状。刃部は鋸形を呈する。柄部、刃部内側に断面Y字状の切り込みがある。全長23.3cm、刃部の厚さ0.04cm、刃部幅15.9cm、刃部背厚さ0.87cm、茎部幅2.65cm、茎部厚さ0.94cm、重量523.0g。これらは8世紀後葉に比定される。

26) 竪穴建物跡SI42 (第98～100図)
 調査区の西側に位置する。規模は南北軸長2.42m、東西軸長3.20mを測り、平面形は長方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位はN-2°-Eを示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は14.0～24.0cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況は比較的良好である。北壁面を30.0～36.0cm箱形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ81.0cm、両



第97図 竪穴建物跡SI41出土遺物

袖間の最大幅83.0cm。袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、甕、須恵器・坏、高台付坏、蓋、高坏、甕、甗が出土している。1～3は土師器。1の坏は黒色処理。底部にヘラ記号がみられる。4～14は須恵器。9～11は坏。ロクロ成形で、底部はいずれも手持ちヘラケズリ。9は口径10.6cmを測るやや小型の坏である。11はヘラ記号がみられる。12・13は甗の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。これらは9世紀前葉に比定される。

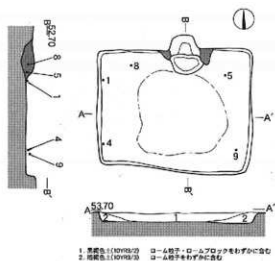
27) 竪穴建物跡SI43 (第101～103図)

調査区の西側に位置し、建物西側は未調査区域に広がっている。検出された規模は南北軸長3.29m、東西軸長3.02mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置され、主軸方位はN-9°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は6.0～16.0cmを測る。壁溝は検出部で全周し、上面幅で13.5～20.5cm、深さ3.0～25.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は梯子穴が1本穿ってある。径28.0×23.0cmの円形、深さ31.0cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を39.0～42.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ90.0cm、両袖間の最大幅120.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・高台付坏、甕、須恵器・坏が出土している。2の土師器・甕底部には木葉痕が残留している。これらは8世紀後葉に比定される。

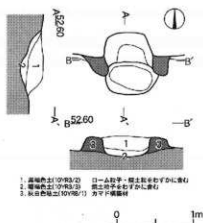
28) 竪穴建物跡SI44 (第104～106図)

調査区の西側に位置する。規模は南北軸長2.46m、東西軸長2.79mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置さ



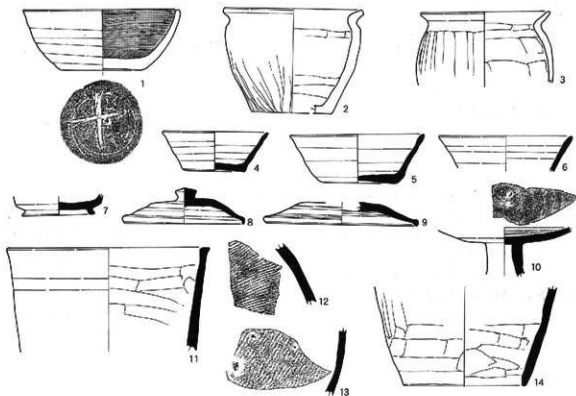
第98図 竪穴建物SI42実測図

0 2m



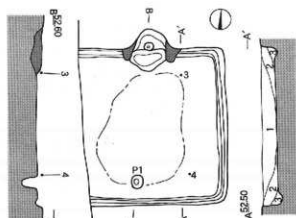
第99図 竪穴建物SI44カマド実測図

0 1m



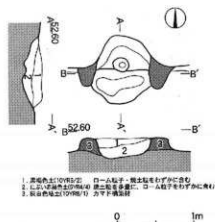
第100図 竪穴建物SI42出土遺物

0 10cm



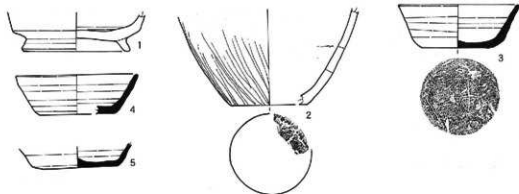
1. 黒褐色土(10952/7) □ローム散子・ロームブロックをわずかに含む
 2. 黒褐色土(10953/7) □ローム散子・ロームブロックをわずかに含む
 3. 黒褐色土(10954/7) □ローム散子をわずかに含む

第101図 竪穴建物SI43実測図



1. 黒褐色土(10952/7) □ローム散子・黒褐色土をわずかに含む
 2. 土間層(10953/7) □黒褐色土を多く含む
 3. 黒褐色土(10954/7) □ローム散子をわずかに含む

第102図 竪穴建物SI43カマド実測図



第103図 竪穴建物SI43出土遺物

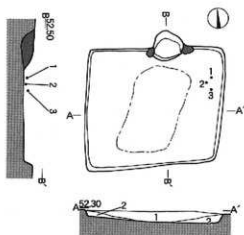


れ、主軸方位は $N-4^{\circ}-E$ を示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は7.5~16.0cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況はやや不良である。北壁面を36.0~37.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ44.0cm、両袖間の最大幅85.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・高台付坏が出土している。1の底部には墨書されている。いずれも内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。これらは9世紀前葉に比定される。

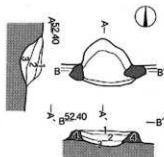
29) 竪穴建物跡SI45 (第107~109図)

調査区の西側に位置する。規模は南北軸長3.33m、東西軸長3.79mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位は $N-0^{\circ}$ を示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は23.5~31.0cmを測る。柱穴は南壁際に梯子穴1本穿ってある。径30.0×27.0cmの円形、深さ20.0cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況は比較的良好である。北壁面を40.0~47.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ88.0cm、両袖間の最大幅103.0cm、袖部



1. 黒褐色土(10995/2) ローム粘土をわずかに含む
2. 黒褐色土(10995/2) ローム粘土・ロームブロックをわずかに含む

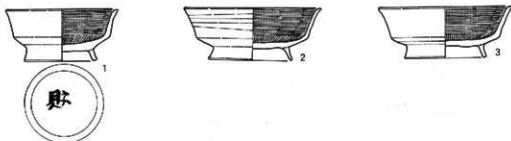
第104図 竪穴建物SI44実測図



1. 黒褐色土(10995/2) ローム粘土・黒土粒をわずかに含む
2. 濃い黒褐色土(10995/2) 黒土粒を多く含む。ローム粘土をわずかに含む
3. 黒褐色土(10995/2) ローム粘土・黒土粒をわずかに含む
4. 灰白色粘土(10995/19) カマド構築材



第105図 竪穴建物SI44カマド実測図



第106図 竪穴建物SI44出土遺物



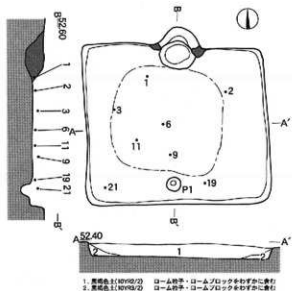
構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・杯、皿、甕。須恵器・杯、甕。鉄製品である鉄鏃が出土している。1～18は土師器。6・11・12は墨書されている。9・10は皿。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。19・20は須恵器。20は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。21は鉄鏃である。茎が欠損する。銹化が著しく形状が明瞭ではない。現存長8.45cm、鏃身3.05cm、鏃幅2.98cm、重量21.38g。これらは9世紀中葉に比定される。

30) 竪穴建物跡SI46 (第110～112図)

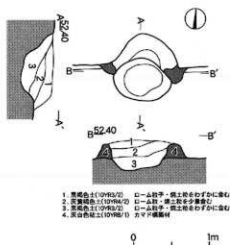
調査区の西側に位置する。規模は南北軸長3.19m、東西軸長3.95mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-6°-Eを示す。床面はほぼ平坦で、明瞭な貼床構築がみられないが、床硬化面はカマド前面から住居の中央部とくに顕著であった。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は3.5～10.5cmを測る。柱穴は入口施設と思われる南辺際に浅い土坑が掘削されている。径92.0×59.0cmの楕円形、深さ5.2cmを測る。覆土は黒褐色土の単一層。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況は不良である。北壁面を14.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ98.0cm、両袖間の最大幅102.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は須恵器・杯、甕が出土している。2は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。これら

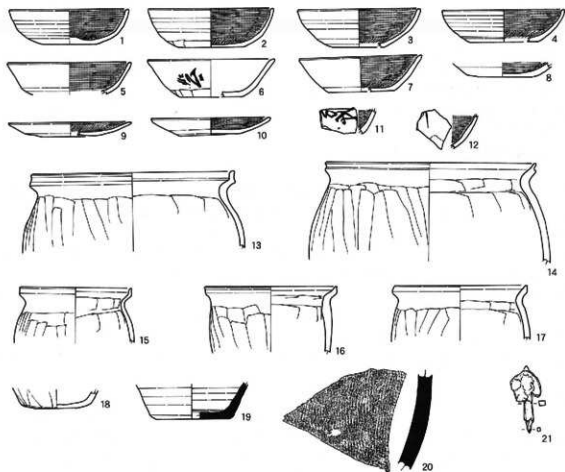


第107図 竪穴建物SI45実測図

0 2m

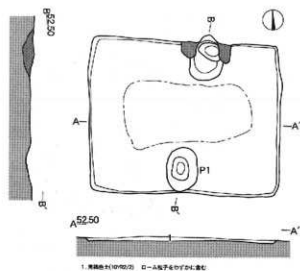


第108図 竪穴建物SI45カマド実測図

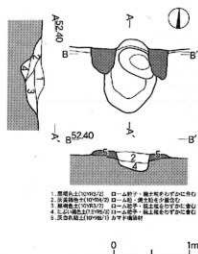


第109図 竪穴建物SI45出土遺物

0 10cm



第110図 竪穴建物SI46実測図



第111図 竪穴建物SI46カマド実測図

は9世紀代と推定される。

31) 竪穴建物跡SI47 (第113・114・116図)

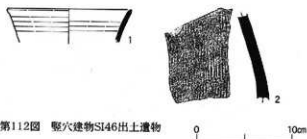
調査区の西側に位置する。建物南東側で建物跡SI48と重複している。規模は南北軸長3.02m、東西軸長4.19mを測り、平面形は長方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位はN-4°-Eを示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は21.5~24.0cmを測る。柱穴は梯子穴と思われる南辺際に1本穿ってある。径30.0×30.0cmの円形、深さ17.8cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

カマドは北壁辺に設置され、遺存状況は比較的良好である。北壁面を17.0~19.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ90.0cm、両袖間の最大幅90.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

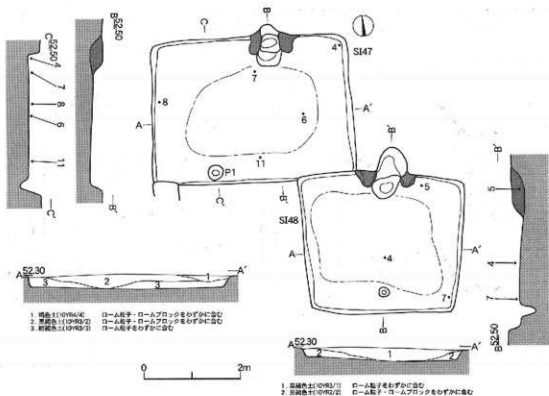
遺物は土師器・坏、甕、須恵器・坏、高台付坏、鉄製品・刀子、石製品・砥石、磨石が出土している。1~3は土師器。1の坏は塊形を呈する。3の甕底部に木葉痕が残る。7は刀子。8~10は砥石。7は刀子、刃先のみ残存する。刃長4.75cm、刃幅1.19cm、背厚さ0.35cm、重量5.16g。8~10は砂岩製の砥石。8は破片。現存長7.87cm、幅3.28cm、厚さ0.89cm、重量38.0g。表面に磨面が確認できる。9も破片。側面に磨面が確認できる。現存長6.37cm、幅1.53cm、厚さ0.93cm、重量9.5g。10は表面に磨面をもち、長さ7.07cm、幅5.87cm、厚さ2.31cm、重量109.0g。11は凝灰岩製の磨石。棒状を呈し全面に磨面が確認できる。長さ17.07cm、幅2.73cm、厚さ3.74cm、重量179.0g。これらは9世紀前葉に比定される。

32) 竪穴建物跡SI48 (第113・115・117図)

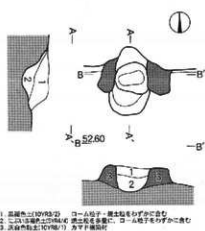
調査区の西側に位置、建物北西側で建物跡SI47と重複している。規模は南北軸長2.90m、東西軸長3.27mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位はN-8°-Eを示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は18.5~28.5cmを測る。柱穴は南壁際に梯子穴1本穿ってある。径21.5×18.5cmの円形、深さ32.0cm測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比



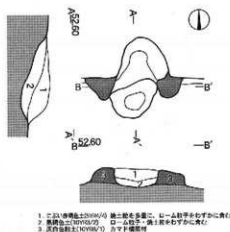
第112図 竪穴建物SI46出土遺物



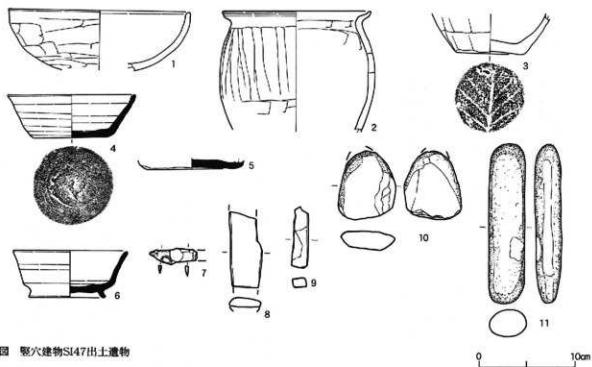
第113図 聖穴建物SI47・48実測図



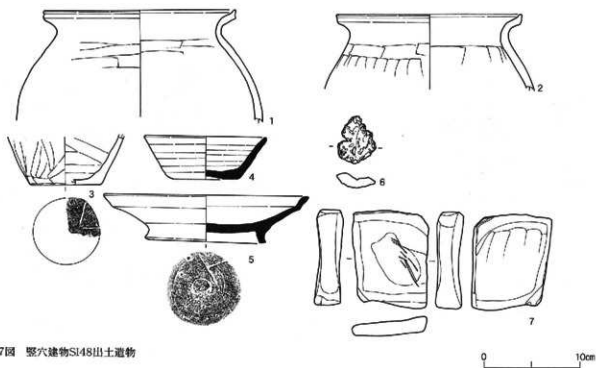
第114図 聖穴建物SI47カマド実測図



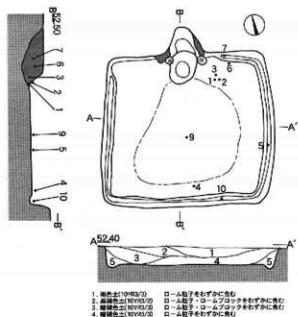
第115図 聖穴建物SI48カマド実測図



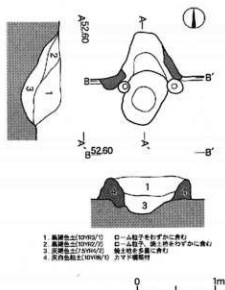
第116図 竪穴建物SI47出土遺物



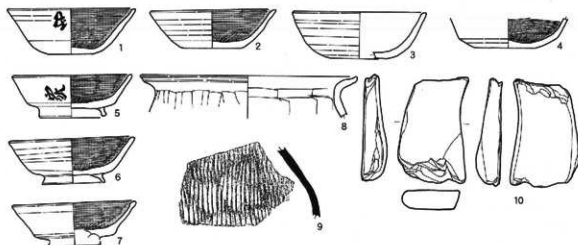
第117図 竪穴建物SI48出土遺物



第118図 竪穴建物SI49実測図



第119図 竪穴建物SI49カマド実測図

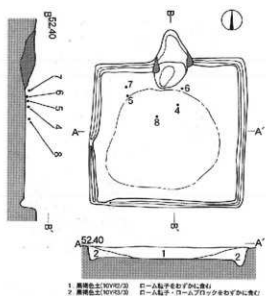


第120図 竪穴建物SI49出土遺物

較的良好である。北壁面を55.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ108.0cm、両袖間の最大幅123.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

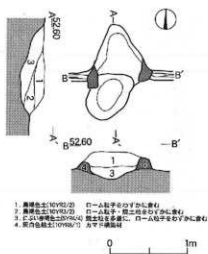
遺物は土師器・甕、須恵器・坏、甃、鉄製品・鉄滓が出土している。1～3は土師器・甕、3の底部に木葉痕を残置している。4・5は須恵器。6は鉄滓。7は砥石。6はスラグ。重量21.22gを測る。7は砂岩製の砥石。両面の磨面は砥ぎ減りして凹面となり擦痕が残る。長さ10.06cm、幅8.07cm、厚さ2.45cm、重量219.0g。これらは8世紀後葉に比定される。

33) 竪穴建物跡SI49 (第118～120図)



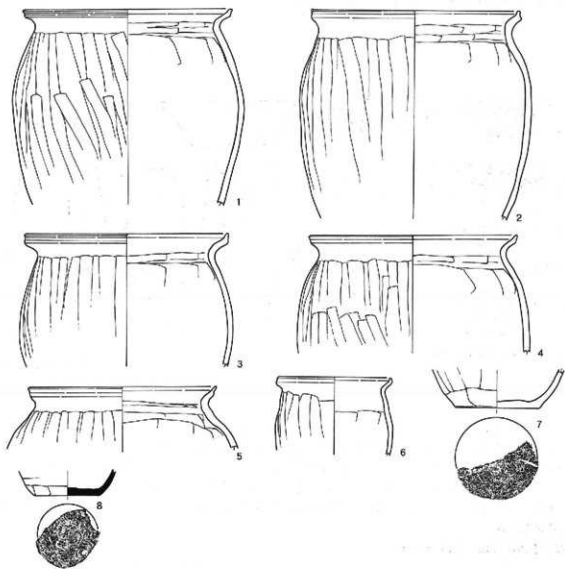
第121図 竪穴建物SI50実測図

0 2m

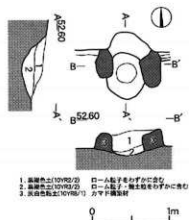
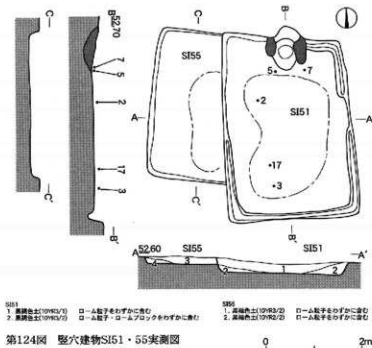


第122図 竪穴建物SI50カマド実測図

0 1m



0 10cm



調査区の西側に位置する。規模は南北軸長3.55m、東西軸長3.22mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位は $N-10^{\circ}-E$ を示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は31.0~36.5cmを測る。壁溝は北辺西側に一部掘削部が欠ける部分が見られる。上面幅で16.0~24.0cm、深さ1.0~14.5cmの横断面U字状を呈する。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況は比較的良好である。北壁面を60.0~61.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ122.0cm、両袖間の最大幅100.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、高台付坏、甕、須恵器・甕、石製品・砥石が出土している。1~8は土師器、1・5に墨書されている。9は須恵器・甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。10は砥石である。千枚岩製の砥石。上端部を欠損。表裏、側面の四面に磨面が認められる。表面、左側面は砥ぎ減している。長さ11.10cm、幅7.01cm、厚さ2.29cm、重量248.0g。これらは9世紀後葉に比定される。

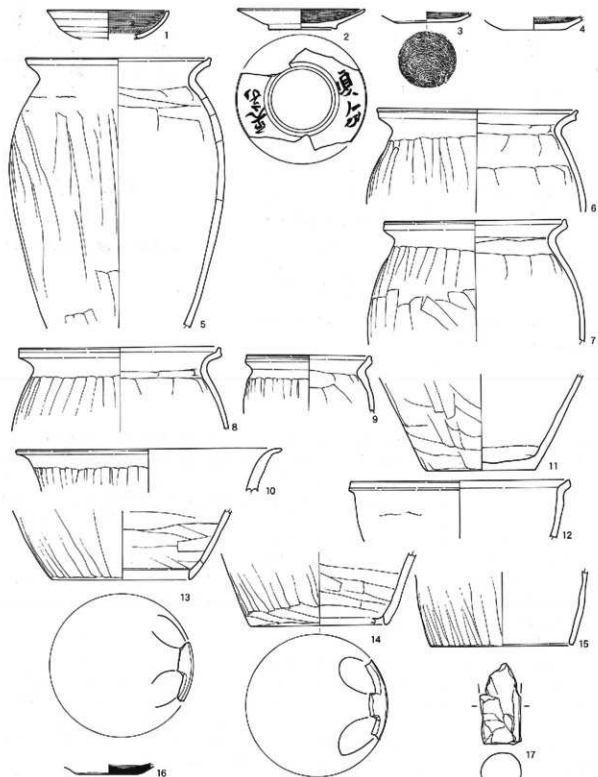
34) 竪穴建物跡SI50 (第121~123図)

調査区の西側に位置する。規模は南北軸長3.12m、東西軸長3.26mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位は $N-1^{\circ}-E$ を示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は23.0~31.5cmを測る。壁溝は西辺中央に一部掘削部が欠ける部分が見られるが、ほぼ全周し、上面幅で12.0~23.0cm、深さ2.0~10.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置され、遺存状況は比較的良好である。北壁面を62.0~63.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ124.0cm、両袖間の最大幅81.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・甕が出土している。1~8は土師器・甕である。7・8の底部に木葉痕が残存する。これらは9世紀前葉に比定される。

35) 竪穴建物跡SI51 (第124~126図)

調査区の南西側に位置し、西側に建物SI55と重複している。南北軸長3.83m、東西軸長2.77mを測り、平面形は長方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位は $N-5^{\circ}-W$ を示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は19.0~23.0cmを測る。壁溝は北辺西側、西辺北側、東辺中央の掘削部が欠ける部分が見られる。上面幅で13.0~

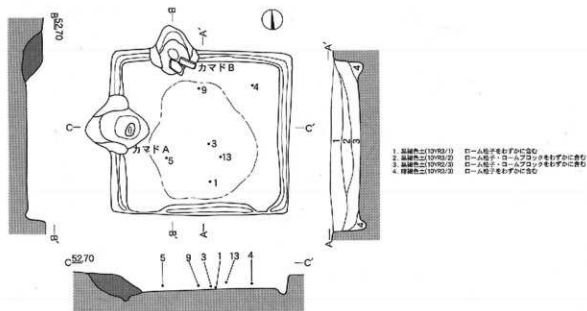


第126図 竪穴建物S151出土遺物

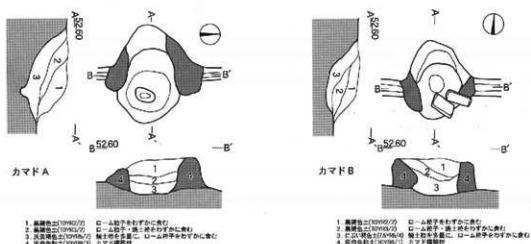


0 10cm

第127図 竪穴建物S155出土遺物



第128図 竪穴建物SI52実測図

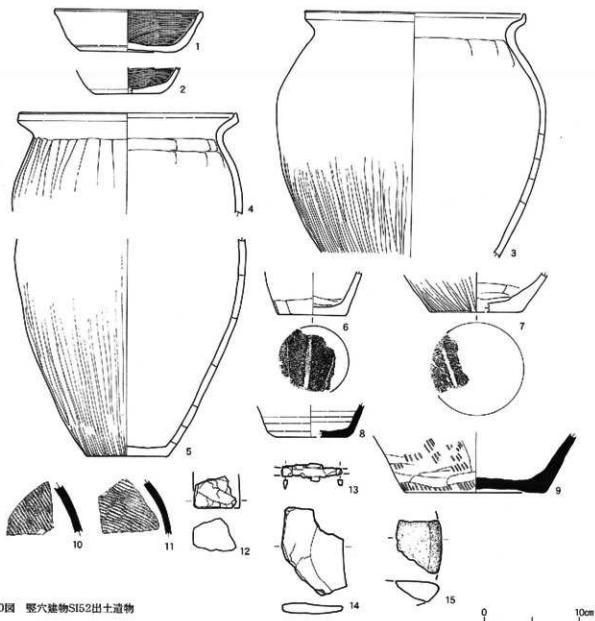


第129図 竪穴建物SI52カマドA・B実測図

25.0cm、深さ1.5～10.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を24.0～29.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ89.0cm、両袖間の最大幅83.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、皿、甕、須臾器・坏、土製支脚が出土している。1～15は土師器。2の皿は外面体部に墨書されている。12～15は甕である。17は土製支脚。17の土製支脚は上端が欠損、円柱状を呈する。現存長8.36cm、径4.16cm、重量119.0g。これらは9世紀後葉に比定される。

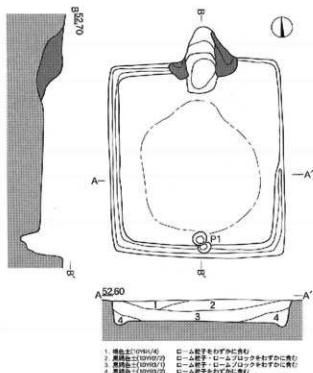
36) 竪穴建物跡SI52 (第128～130図)



第130図 竪穴建物S152出土遺物

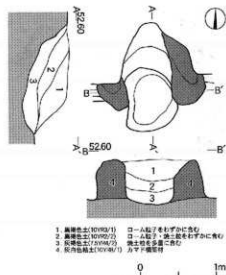
調査区の南西側に位置する。規模は南北軸長3.50m、東西軸長3.67mを測り、平面形は方形。カマドは北壁と西壁に設置されており、北軸を主軸とすると方位はN-5°-Eを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は31.0~43.0cmを測る。壁溝は南辺の一部に掘削部が欠ける部分のみみられる。上面幅で16.0~32.0cm、深さ8.0~15.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは西壁と北壁の2ヶ所ある。西カマド(カマド1)は古期設置で、遺存状況はやや不良である。西壁面を70.0~82.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ130.0cm、検出された両袖間の最大幅125.0cm。北カマド(カマド2)は新期設置で、遺存状況は良好である。北壁面を53.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ104.0cm、両袖間の最大幅117.0cm。袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、甕。須恵器・坏、甕。土製支脚。鉄製品・刀子。石製品・砥石、磨石が出土している。1~7



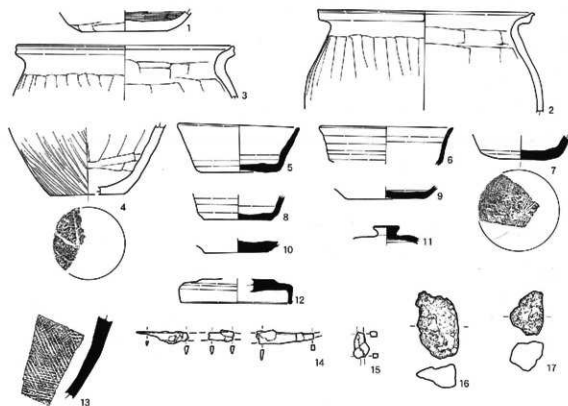
第131図 竪穴建物SI53実測図

0 1 2m



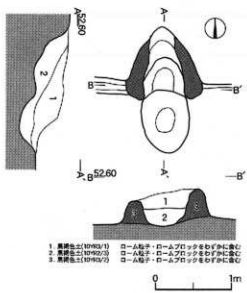
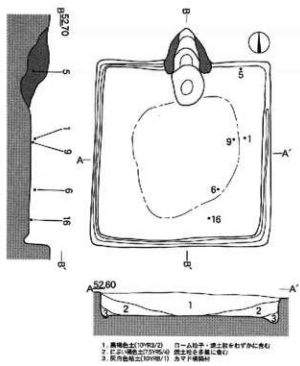
第132図 竪穴建物SI53カマド実測図

0 1m



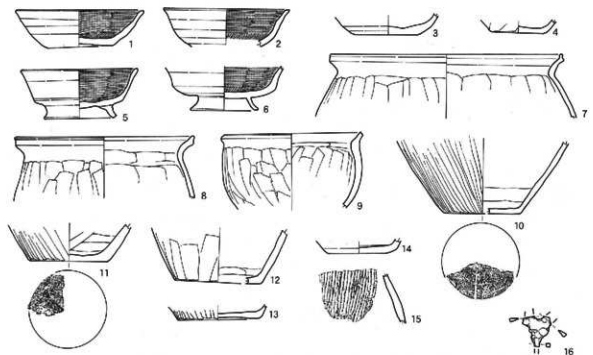
第133図 竪穴建物SI53出土遺物

0 10cm

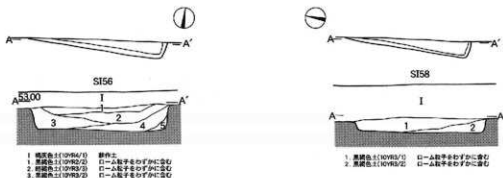


第135図 竪穴建物SI54カマド実測図

第134図 竪穴建物SI54実測図



第136図 竪穴建物SI54出土遺物



第137図 竪穴建物SI56・58実測図



第138図 竪穴建物SI58出土遺物

は土師器。1・2の坯の内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。6～8は裏底部に木葉痕が残置している。9～11は甕で、外面はタタキにより器面調整を施している。2は土製支脚の破片。小片のため粘土塊状を呈する。長さ3.10cm、幅4.34cm、厚さ3.44cm、重量29.0g。13は刀子。刃先、基部を欠損。錆化がすむ。現存長6.49cm、刃幅1.01cm、背厚さ0.48cm、重量9.24g。14は千枚岩製の砥石。表裏、側面に磨面が認められる。表面は砥ぎ減りし、凹面となる擦痕が残る。長さ9.30cm、幅6.41cm、厚さ1.13cm、重量91.0g。15は砂岩製の磨石破片。長さ5.57cm、幅4.59cm、厚さ2.10cm、重量59.0g。これらは9世紀前葉に比定される。

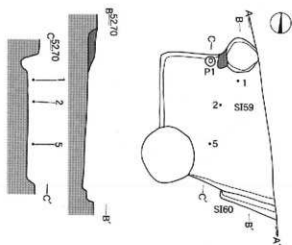
37) 竪穴建物跡SI53 (第131～133図)

調査区の南西側に位置する。規模は南北軸長4.07m、東西軸長3.59mを測り、平面形は長方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位は $N-1^{\circ}-E$ を示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は47.0～56.5cmを測る。壁溝は北東辺に捌削部が欠ける。上面幅で15.0～30.0cm、深さ1.5～11.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は梯子穴と思われる南辺際に重複して2本穿ってある。北側P1は径30.0×29.0cmの円形、深さ39.0cm。南側P2は径24.0×23.0cmの円形、深さ26.5cmを測る。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は良好である。北壁面を54.0～56.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ145.0cm、両袖間の最大幅145.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、甕、須恵器・坏、蓋、甕、鉄製品・刀子、鉄鏃、鉄滓が出土している。1～4は土師器。4の裏底部に木葉痕が残置する。5～13は須恵器。11・12は蓋。13は甕の胴部破片で、平行タタキにより格子目状を呈する。14は刀子。錆化がすすみ、破片となっている。推定長さ17.9cm、刃幅0.87cm、背厚さ0.38cm、重量14.92g。15は鉄鏃の茎。断面四角形。長さ2.64cm、幅0.72cm、重量23.52g。16・17はスラグ、16は重量69.0g。17は重量42.78g。これらは9世紀前葉に比定される。

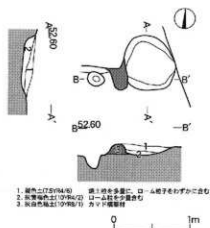
38) 竪穴建物跡SI54 (第134～136図)

調査区の南西側に位置する。規模は南北軸長3.93m、東西軸長3.63mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され、主軸方位は $N-0^{\circ}$ を示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は40.0～51.5cmを測る。壁溝は北東側に捌削部が欠ける部分がみられる。上面幅で10.0～20.5cm、深さ1.0～9.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積であるカマドは北壁辺に設置され、遺存状況は比較的良好であ



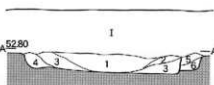
第139図 竪穴建物SI59・60実測図

0 2m



第140図 竪穴建物SI59カマド実測図

0 1m



SI59

- 1 黒褐色土(10V14/1)
- 2 黒褐色土(10V13/1)
- 3 黒褐色土(10V12/1)
- 4 黒褐色土(10V11/1)
- 5 赤褐色土(10V10/1)

附物1

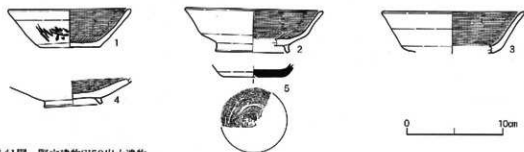
- 1 コーム粘土を多量に含む
- 2 コーム粘土・ローム質を多量に含む
- 3 コーム粘土・ローム質をわずかに含む
- 4 コーム粘土を多量に含む

SI60

- 1 黒褐色土(10V13/1)
- 2 赤褐色土(10V12/1)

- 1 コーム粘土を多量に含む
- 2 コーム粘土・ローム質をわずかに含む

第141図 竪穴建物SI59出土遺物

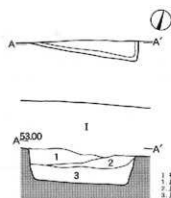


第142図 竪穴建物SI60出土遺物



る。北壁面を71.0～76.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ168.0cm、両袖間の最大幅105.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

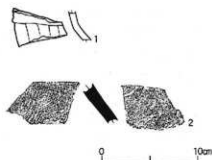
遺物は土師器・坏、高台付坏、甕、須恵器・坏、甕、鉄製品・鉄線が出土している。1～13は土師器である。1～4は坏。1・2は内面がヘラミガキの後に黒色処理。5・6は高台付坏。高台は貼付け、内面はヘラミガキの後に



第143図 竪穴建物SI61実測図



- | | |
|----------------|----------------------|
| 1 焼土層(10964/1) | 破片土 |
| 2 焼土層(10962/1) | □-A底下・□-Aブロックをわずかに含む |
| 3 焼土層(10962/2) | □-A底下・□-Aブロックを多数含む |
| 4 焼土層(10962/2) | □-A底下・□-Aブロックをわずかに含む |



第144図 竪穴建物SI61出土遺物

黒色処理。7～13は甕。7～9は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は揃み上げられている。10・11の底部は木炭屑を残している。14・15は須恵器。15は平行タタキ。16は鉄線の破片。鉄部と基部の一部を残存。長さ3.32cm、線身長2.20cm、線身幅2.98cm、重量7.36gを測る。これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

39) 竪穴建物跡SI55 (第124・127図)

調査区の南西側に位置し、東側半分は建物SI51に切られている。検出される規模は南北辺長3.12m、東西辺長1.56mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。主軸方位は $N-0^\circ$ を示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾し立ち上がり、壁高は19.5～21.5cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は土師器・甕の破片が出土している。時期は明瞭ではない。

40) 竪穴建物跡SI56 (第137図)

調査区の南西側に位置し、建物の大半が未調査区域に広がっており、僅かに確認できる南北辺長0.24m、東西辺長1.83mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドが北壁に設置されたものだとすると主軸方位は $N-6^\circ-E$ を示す。床面はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は9.0～15.0cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。遺物の出土はなく、時期は明瞭ではない。

41) 竪穴建物跡SI58 (第137図)

調査区の東側に位置し、建物の大半が未調査区域に広がっており、僅かに確認できる南北辺長2.40m、東西辺長0.23mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドが北壁に設置されたものだとすると主軸方位は $N-9^\circ-W$ を示す。床面はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は8.0～10.5cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。遺物の出土はなく、時期は明瞭ではない。

42) 竪穴建物跡SI59 (第139～141図)

調査区の東側に位置し、建物東側は未調査区域に広がり、南端で竪穴建物跡SI60を切って構築している。規模は南北軸長2.72m、検出された東西軸長2.26mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位は $N-5^\circ-W$ を示す。床面はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は20.0～29.0cmを測る。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は不良である。北壁面を45.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ74.0cm、検出された両袖間の最大幅73.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、高台付坏、皿、須恵器・坏が出土している。1～4は土師器である。1は坏の体部に墨書が習書されている。内面はヘラミガキの後に黒色処理。2・3は高台付坏。内面ヘラミガキの後に黒色処理を施している。4は皿。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。5は須恵器・坏。底部にヘラ記号がみられる。

これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

43) 竪穴建物跡SI60 (第139・141図)

調査区の東側に位置し、大半が竪穴建物跡SI59によって切られ、東側は未調査区域に延びている。検出された規模は南北軸長0.23m、東西軸長1.18mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものとする主軸方位はN-9°-Eを示す。床面はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は23.5~27.0cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は土師器・高台付杯、甕が出土している。1は口縁部。内面はヘラミガキの後に黒色処理。2は甕の下半部の破片。体部ヘラナデが施されている。これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

44) 竪穴建物跡SI61 (第143・144図)

調査区の北側に位置し、建物の大半が未調査区域に広がっており、僅かに確認できる南北辺長0.32m、東西辺長2.12mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものとする主軸方位はN-14°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は27.5~30.0cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は土師器・甕。須恵器・甕の破片が出土している。これら出土遺物は9世紀代と推定される。

第2項 土坑

明確に古代の土坑として、覆土中から遺物が出土したものは2基のみである。

1) 土坑SK128 (第145・146図)

調査区の北東側に位置し、平面形は長径1.11m、短径1.00mの長方形。西側に半円形の掘形がみられる。最大深度45.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はやや丸く、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物として土師器・甕の口縁部破片が出土している。口縁部が強く外反し、口縁端部は痛み上げられる。9世紀代と推定される。

2) 土坑SK135 (第145・146図)

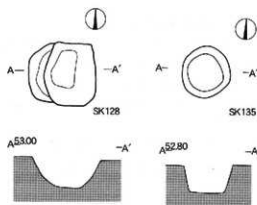
調査区の北東側に位置し、平面形は長径0.76m、短径0.73mの円形。最大深度42.8cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物として土師器・甕の口縁部破片が出土している。口縁部が強く外反する。9世紀代と推定される。

第5節 中世以降の遺構

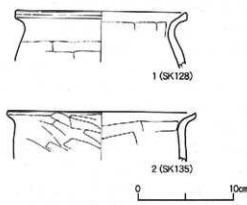
中世以降の遺構として、掘立柱建物跡7棟、溝状遺構5条、土坑48基、柱穴277基が検出された。

第1項 掘立柱建物跡

1) 掘立柱建物跡SB01 (第149図)



第145図 土坑SK128・135実測図



第146図 土坑SK128・135出土遺物

調査区南西側に位置する。遺構は南北方向の柱穴列のみ検出され、調査区外に展開するようである。検出された規模は4間で、平面形態が不明な側柱建物である。軸方位は南北柱列で $N-13^{\circ}-W$ を示す。概して1間は1.6m前後の間隔をもつが、最大1.80m、最小1.40mの間隔である。柱穴の規模は径38~56cm、深さ41.5~57.5cmの規模をもち、平面形は円形もしくは楕円形を呈する。各柱穴の底部で、柱当たりによる硬化面は確認できなかった。遺物は出土していないが、覆土の状況から中世以降の所産と推定される。

2) 掘立柱建物跡SB02 (第149図)

調査区北端に位置する。規模は2間×2間で、北列中央柱が欠損している。平面形態が東西方向に長い長方形を呈する側柱建物である。軸方位は東側柱列で $N-11^{\circ}-W$ を示す。概して1間は1.8m前後の間隔をもつが、最大2.64m、最小1.50mの間隔である。柱穴の規模は径29~56cm、深さ16.8~38.5cmの規模をもち、平面形は円形もしくは楕円形を呈する。各柱穴の底部で、柱当たりによる硬化面は確認できなかった。遺物は出土していないが、覆土の状況から中世以降の所産と推定される。

3) 掘立柱建物跡SB03 (第149図)

調査区北西側に位置する。規模は1間×1間で、平面形態がほぼ正方形を呈する側柱建物である。軸方位は東側柱列で $N-14^{\circ}-W$ を示す。概して1間の最大2.50m、最小2.30mの間隔である。柱穴の規模は径48~56cm、深さ24.5~42.5cmの規模をもち、平面形は円形もしくは楕円形を呈する。各柱穴の底部で、柱当たりによる硬化面は確認できなかった。遺物は出土していないが、覆土の状況から中世以降の所産と推定される。

4) 掘立柱建物跡SB04 (第150図)

調査区北西側に位置する。規模は1間×1間で、平面形態が東西方向に長い長方形を呈する側柱建物である。軸方位は東側柱列で $N-9^{\circ}-W$ を示す。概して1間の最大4.20m、最小1.91mの間隔である。柱穴の規模は径24~31cm、深さ10.8~26.0cmの規模をもち、平面形は円形もしくは楕円形を呈する。各柱穴の底部で、柱当たりによる硬化面は確認できなかった。遺物は出土していないが、覆土の状況から中世以降の所産と推定される。

5) 掘立柱建物跡SB05 (第150図)

調査区北西側に位置する。規模は1間×2間で、平面形態が南北方向に長い長方形を呈する側柱建物である。軸方位は東側柱列で $N-5^{\circ}-E$ を示す。概して1間の最大2.76m、最小1.93mの間隔である。柱穴の規模は径32~47cm、深さ20.0~36.0cmの規模をもち、平面形は円形もしくは楕円形を呈する。各柱穴の底部で、柱当たりによる硬化面は確認できなかった。遺物は出土していないが、覆土の状況から中世以降の所産と推定される。

6) 掘立柱建物跡SB06 (第150図)

調査区西側に位置する。規模は1間×1間で、平面形態が東西方向に長い長方形を呈する側柱建物である。軸方位は東側柱列で $N-0^{\circ}$ を示す。概して1間の最大2.64m、最小1.50mの間隔である。柱穴の規模は径24~31cm、深さ10.8~26.0cmの規模をもち、平面形は円形もしくは楕円形を呈する。各柱穴の底部で、柱当たりによる硬化面は確認できなかった。遺物は出土していないが、覆土の状況から中世以降の所産と推定される。

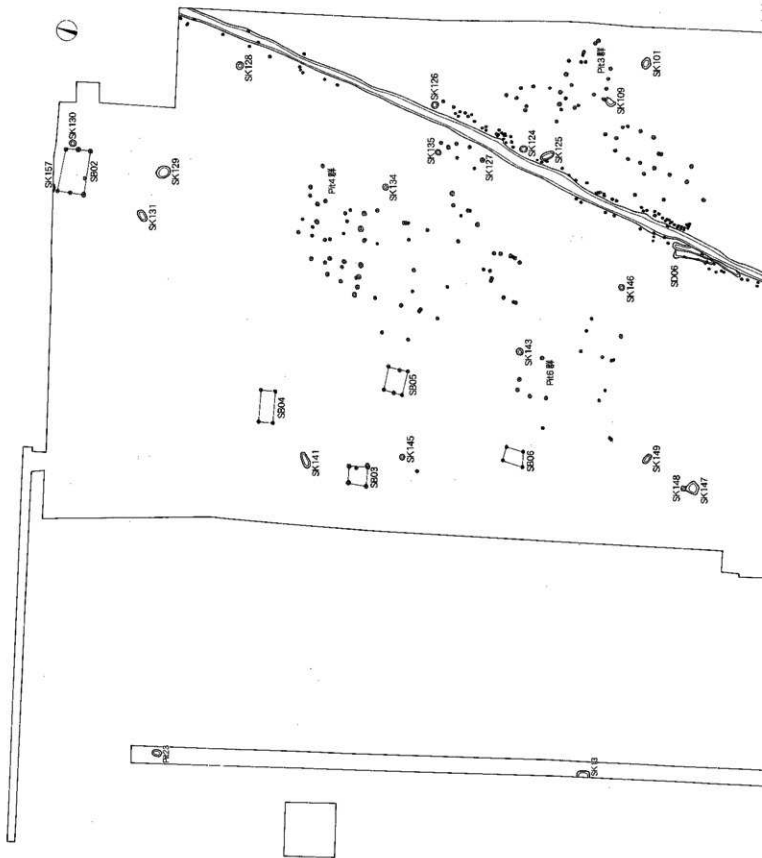
7) 掘立柱建物跡SB07 (第149図)

調査区南側に位置する。遺構は南北方向の柱穴列のみ検出され、調査区外に展開するようである。検出された規模は3間で、平面形態が不明な側柱建物である。軸方位は東側柱列で $N-88^{\circ}-E$ を示す。概して1間の最大4.42m、最小1.45mの間隔である。柱穴の規模は径24~31cm、深さ10.8~26.0cmの規模をもち、平面形は円形もしくは楕円形を呈する。各柱穴の底部で、柱当たりによる硬化面は確認できなかった。遺物は出土していないが、覆土の状況から中世以降の所産と推定される。

第2項 溝状遺構

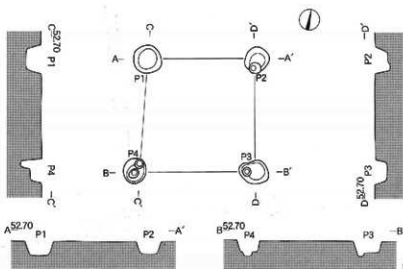
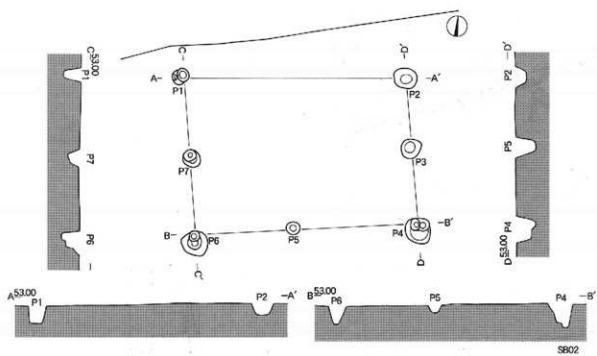
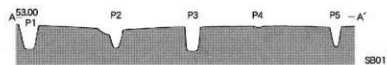
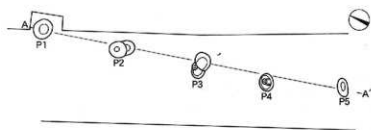
1) 溝状遺構SD02 (第148図)

調査区南西側の排水溝予定地であるトレンチ区で検出された。トレンチ幅であるため全容は不明。ほぼ直線の南東西溝で、軸は $N-78^{\circ}-E$ にとり、検出された長さ2.10m、幅1.05~1.20m、深さ45.5~50.0cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、横断面形はU状を呈する。区画溝と推定される。遺構の年代については、出土遺物もなく、不明な点が多いが、覆土の状況から中世以降で扱うべきと判断した。



第147図 中世以降遺構配置図(1)

0 20m



第149号 麗立柱建物跡SB01・02・03実測図

0 2m

2) 溝状遺構SD03 (第147・148図)

調査区のため中央を縦断するように掘削されており、ほぼ直線的に南北に走る溝で、北側および南側は未調査区域に延びるため全貌を明らかにしてはでない。軸はN-8°-Eにとり、検出された長さ122.47m、幅0.88~1.94m、深さ33.5~83.0cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、横断面は箱形を呈し、底面はほぼ平坦である。北端がやや高く、南側端が高くその比高差はわずかに14.5cmである。区画を目的とした溝と思われる。遺構の年代については、出土遺物もなく、不明な点が多いが、覆土の状態から中世以降で扱うべきと判断した。

3) 溝状遺構SD04 (第148図)

調査区南側、斜め中央を縦断する溝SD03の西側に隣接して掘削されており、ほぼ直線的に南北に走る溝である。南側が未調査区域に延びている。軸はN-6°-Wにとり、検出された長さ19.72m、幅0.30~0.62m、深さ4.5~39.5cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、横断面はU字状を呈する。北側が低く、南側が高くその比高差は35.2cmである。区画溝SD03に関連する溝であるが、性格は不明である。年代はSD03と同様中世以降で扱うべきと判断した。

4) 溝状遺構SD05 (第148図)

調査区南側、斜め中央を縦断する溝SD03の東側に隣接して掘削されており、ほぼ直線的に南北に走る溝である。軸はN-8°-Eにとり、検出された長さ6.85m、幅0.36~0.73m、深さ31~3.5cmを測る。壁面は外傾して立ち上

土坑一覧表

土坑番号	平面形	規模			壁面	底面	付属施設	備考
		長さ(軸)	X径(軸)	深さcm				
SK11	方形	1.59 × (0.42)	13.8	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK12	方形	1.31 × (1.11)	98.1	外傾	平坦	ピット1	出土遺物なし	
SK13	円形	1.22 × (0.88)	48.8	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK14	円形	1.57 × 1.50	45.9	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK25	円形	2.20 × 2.20	71.4	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK28	楕円形	1.10 × 0.81	33.4	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK36	楕円形	1.17 × 1.10	34.0	外傾	傾斜	ピット1	出土遺物なし	
SK37	楕円形	0.97 × 0.81	14.8	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK39a	楕円形	0.70 × 0.52	17.8	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK39b	楕円形	0.77 × 0.54	13.0	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK40	円形	1.12 × 1.11	26.0	外傾	傾斜	ピット1	出土遺物なし	
SK42	円形	0.76 × 0.88	8.8	外傾	傾斜	ピット1	出土遺物なし	
SK44	楕円形	0.82 × 0.80	22.1	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK45	楕円形	1.25 × (0.80)	10.0	外傾	平坦	ピット1	出土遺物なし	
SK47	楕円形	1.15 × 0.86	10.9	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK55	楕円形	1.37 × 0.91	18.0	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK57	長方形	2.80 × 1.41	12.8	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK60	円形	0.96 × 0.92	23.0	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK61	楕円形	1.14 × 0.85	13.5	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK62	楕円形	0.85 × 0.78	14.8	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK69	楕円形	1.16 × 0.89	27.5	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK71a	楕円形	1.73 × 1.28	14.9	外傾	傾斜	ピット1	出土遺物なし	
SK71b	楕円形	1.55 × 0.70	24.2	外傾	傾斜	ピット1	出土遺物なし	
SK73a	楕円形	1.04 × 0.95	24.0	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK73b	楕円形	0.70 × 0.51	18.5	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK75a	楕円形	0.78 × 0.63	33.6	外傾	傾斜	ピット1	出土遺物なし	
SK75b	楕円形	0.53 × 0.35	25.5	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK76	楕円形	1.58 × 0.71	17.9	外傾	傾斜	ピット1	出土遺物なし	
SK78	楕円形	1.42 × 0.47	12.3	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK85	円形	0.78 × 0.73	8.9	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK96	円形	0.85 × 0.55	21.5	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK124	円形	0.88 × 0.78	29.5	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK125	楕円形	2.18 × 0.93	54.3	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK126	円形	0.88 × 0.81	15.6	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK127	円形	0.73 × 0.64	9.5	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK129	楕円形	1.97 × 1.83	20.3	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK130	楕円形	1.00 × 0.92	17.4	外傾	平坦	ピット1	出土遺物なし	
SK131	楕円形	1.89 × 1.10	26.0	外傾	平坦	ピット1	出土遺物なし	
SK134	円形	0.78 × 0.77	14.0	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK141	楕円形	2.26 × 0.87	62.3	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK143	円形	0.95 × 0.94	11.5	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK145	円形	0.79 × 0.74	10.9	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK146	円形	0.85 × 0.85	10.1	外傾	傾斜		出土遺物なし	
SK147	方形	1.49 × 1.45	37.0	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK148	長方形	0.69 × 0.49	32.5	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK149	長方形	1.30 × 0.92	18.5	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK157	円形	0.88 × (0.28)	6.5	外傾	平坦		出土遺物なし	
SK159	楕円形	0.91 × (0.57)	19.5	外傾	傾斜		出土遺物なし	

がり、横断面はU字状を呈する。北側が低く、南側が高くその比高差は5.5cmである。区画溝SD03に関連する溝であるが、性格は不明である。年代はSD03と同様中世以降で扱うべきと判断した。

5) 溝状遺構SD06 (第147図)

調査区北側、斜め中央を縦断する区画溝SD03の西側に隣接して掘削されており、ほぼ直線的に南北に走る溝である。軸はN-7°-Eにとり、検出された長さ9.70m、幅0.27~1.90m、深さ11~40.5cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、横断面はU字状を呈する。北側が高く、南側が低くその比高差は1.5cmである。区画溝SD03に関連する溝であるが、性格は不明である。年代はSD03と同様中世以降で扱うべきと判断した。

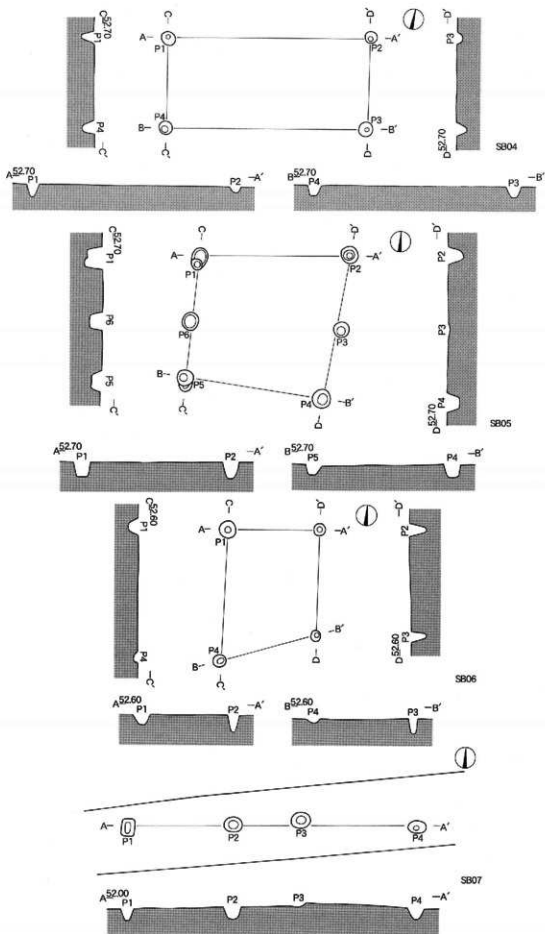
第3項 土坑 (第147・148図)

縄文時代および古代以外の土坑を一括する。円形または楕円形基調のものと同様に長方形基調のものに大別できるが、いずれも遺物の出土はなく、覆土の状態から判断して中世以降とした。また個々の記述は割愛して一覧表としてまとめた。

第4項 柱穴状遺構(ピット)

(第147・148図)

本調査区北側を中心にいわゆるピット



第150図 独立柱建物跡SB04・05・06・07実測図

と呼称される柱穴状遺構(以下ピットと呼ぶ)が検出された。調査されたピットの総数は277基で、形状からみるといずれも円形もしくは楕円形を呈している。また規模についてみると全体的にかなり纏まりがみられ径45cmを最大径、径20cmを最小径とし、また深さについても最大深度44.5cm、最小深度19.5cmである。これらの平均値は径35.2cm、深さ29.9cmとなり、その土5cm幅に収まるピットが全体の60%を占め、結果的に径30~40cm、深さ25~35cmの円形ピットが最も多いということになる。なお、これらはいずれも間尺に合うものではなく、しかも覆土中より遺物の出土はなかったため、その性格については明瞭ではない。少なくとも埋土は黒色土で覆われていたこと、円形もしくは楕円形でほぼ垂直気味に落ち込んでいたことから単独もしくは複数が組み合わさって何らかの機能をもった構造物の存在が想定される。小屋や物置などの粗雑で貧弱な柱構造の建物あるいは棚状構造物、物下し杭などの柱あるいは杭跡等が考えられるがいずれもこれといった決定的な痕跡を検証することができなかった。

(小川和博)

第3章 まとめ

1. はじめに

本調査対象となった上ノ宿遺跡は、久慈川の右岸、玉川に挟まれた標高55mの舌状台地平坦部に立地している。ここは平成18年5月第1次調査として行われた本調査区北西側1,980m(小川他2008)および平成15年7月に実施した上宿上坪遺跡(小川他2004)が南に隣接している。今回の調査面積は9,820㎡であり、北側調査区と合わせると実に20,000㎡を超える大規模調査を実施したことになる。ここから旧石器時代、縄文時代中・後期および8世紀から9世紀における古代の拠点的な集落跡、さらに中世から近世以降現代までこの土地利用の時間幅は長い。あいにく旧石器時代は安山岩製の剥片が1点出土したのみで、生活面を確認できなかったが、縄文時代では中期中葉から後期初頭までの竪穴建物跡や土坑を検出できたことは周辺地域においてもかなり貴重な資料提供となったことは間違いない。また奈良・平安時代における集落跡は丘巻である。とくに8世紀から10世紀にかけて、竪穴建物跡43軒の検出は、いうまでもなくこの地が久慈川を運る交通の要衝として一大拠点集落が形成されたことを意味している。さらに中世の村落跡と推定される遺構の検出は、北側調査区で明らかにされた段切り遺構と伴に周辺の中世城跡との関連で今後大いに注目されるであろう。ここでまとめとして調査の成果を概観したい。

2. 縄文時代

本調査区南東側の偏った区域に縄文時代中期中葉から後期初頭の竪穴建物跡と土坑が検出された。竪穴建物跡は4軒で、中期中葉・阿玉台式期、後葉・加曾利E1式期、末葉・加曾利E4式期にわたる。いずれも掘り込みの浅さや出土遺物の少なさから明確な時期判断を困難にしているが、周辺で検出された土坑からみてもこの時期判断に大きな誤りはないであろう。いずれの竪穴建物跡も横円形を基調としている。まずS112は阿玉台Ⅱ式期とした。中央に炉址が設置され、柱穴配列はやや不規則である。県内検出の当該期の建物跡の大半が炉を有しないのを一般的とするが(鈴木1984)、ここでは炉の設置故に特殊建物との判断はできない。少なくともこの時期いわゆる阿玉台土器の典型が形成され、それに合致するように建物についても「阿玉台式住居文化の盛行・多様化期(茨城県教育財団縄文時代研究班1995)」との認識も納得できよう。そして次期をSI57に当てた。半分以上が未調査区域に延びているため全容を明らかにできないものの加曾利E1式期とした。やはり出土遺物の少なさから問題視される可能性が高い。この段階では県内各地で明確な建物跡が確認されている。炉・柱穴・盛溝などの精施設は整い、前段階とは比べられない建物構築が確立する。そのひとつの契機は阿玉台Ⅱ式期からみられる有段竪穴建物の影響である。先に発掘した常陸大宮市西境遺跡の調査で有段竪穴建物の発祥圏をここ那珂川中流周辺に求めたことがあるが、その終焉を大木8b式期もしくは加曾利E1式期とした場合、有段竪穴建物に替わる形式が必要となる。SI57はこうした背景から存立したものと推定される。そして最後にSI19の中期末葉・加曾利E4式期である。形状はやはり横円形で、4本柱が主柱穴となる。周辺では中期後半の4本もしくは5本柱主柱穴から中期末葉では4本柱が主体となっており、本例も例外ではないことを傍証している。またこの時期入口部が突出する建物が見られるが、ここでは確認できなかった。一方土坑は101基検出できた。いずれも円筒形を基調とし、わずかに横断面形が袋状を呈するものが4基確認された。そのなかでSK121の加曾利E1式期をのぞき、SK103、106、139は加曾利E4式期から称名寺1式期である。また円筒形もしくは深度の浅いたらい形のうち、阿玉台式期が4基(4%)、加曾利E1式期7基(7%)、加曾利E2式期2基(2%)となり、それ以外の土坑はいずれも加曾利E3式期から称名寺2式・網取1式期にかけて構築されるものである。周辺では坪井上遺跡はじめ、高ノ倉遺跡(小川2005)、諏訪台遺跡、梶巾遺跡など中期中葉から後葉の土坑群は充実しているが、中期末葉から後期初頭の土坑群の検出は初見であろう。他地域とこのように縄文時代中期から後期の時間的・空間的位置関係を把握する上で、本遺跡はひとつの貴重な事例となろう。

3. 古代

奈良・平安時代の遺構として竪穴建物跡が43軒検出された。これに北側調査区の65軒および第1次調査区(小川他2008)の5軒、さらに南端に隣接する上宿上坪遺跡(小川他2004)の4軒を加えると実に117軒となる。この集落は少なくとも北限が北側調査区北端において検出された中世の段切り遺構までであり、南限が上宿上坪遺跡の南端浅い谷までである。こうした集落の南北両端は明らかになっているものの、問題は調査区東側および西側の未調査区域にどの

くらい広がるかである。とくに東から南東方向の久慈川に向かって台地が突出しており、より河川に近い区域に集落が開闢することは確実であろう。ここは畑地部分が少なく、大半が宅地化されており、将来的に集落規模を明らかにできないが、今調査まで検出された数の倍近くは存立する可能性は高いであろう。

なお、当調査区に限れば奈良・平安時代でも8世紀前半から10世紀前半である。とくに9世紀代が中心となる。これに対し北側調査区では8世紀代が南調査区と比較すると比較的多い。集落開始時において北側にその拠点を設け、時期ごとに北側から南側へと徐々に移動し、拡散していったことが推定される。なお、検出軒数の割りに重複建物が極端に少ないのも大きな特徴で、わずかに3例あるのみである。

ここでまず改めて検出された43軒の竪穴建物跡をならべてみると、時間差がみられながらカマドの位置を主軸方位とすると真北から東西方向に10度以内であり、しかも5度以内が30軒と圧倒し、小規模範囲内に収まるという方位の共通性を保持している。またその規模は一辺2m台5軒(13%)、3m台21軒(54%)、4m台13軒(33%)で、最小規模については半分が未調査区域に伸びているSI11の一辺2.25mがある。完掘された竪穴建物でもSI17は2.65×2.96mであった。また最大規模を測るSI21でも4.51×4.54mで、中型建物の基準値5mを超えるものは皆無で、検出された竪穴建物跡すべて小型建物に分類される。また平面形はほぼ正方形と確認できるものが主体を占めているもの、みかけ明らかに長方形になるものが7例ある。ここで問題は柱穴である。竪穴建物に構築される柱穴には主柱穴、壁柱穴、支柱穴、梯子穴が存在するが、いわゆる竪穴内無柱穴建物が20軒、梯子穴のみが8軒ある。これらはいずれも9世紀代である。一方4本柱主柱穴建物が4軒、壁柱穴建物1軒ある。4本主柱穴でもSI26およびSI41は通常みられる四隅の対角線上に穿っているものであるが、SI27はカマドの両袖部と対面する南壁際に穿ってある。同様にSI35ではカマド両袖部と南側内側対角線上に穿っている。またSI40は各壁面に接するように8本の壁柱穴が穿っている。竪穴内柱穴設置建物は8世紀後半から9世紀前半の時期に相当する。

従来から検討されてきた竪穴建物跡の属性として、出土遺物だけではなく、建物形態・構造・規模・主軸方位・カマド構造など多くの属性の類似性が認められれば、同時存在の可能性は高まるはずといわれて久しい(土井・渋江1987等)。しかし、上記編年が精緻にわたる今日、しかも検出例の多さから居住形態のみかけの類似性だけの状況証拠だけでは解決できない問題も多出していることもまた確かであろう。

4. おわりに

今回の上ノ宿遺跡の発掘調査により、縄文時代中期中葉～後期初頭の集落から奈良・平安時代の集落など、多くの成果を得ることができた。とくに古代では久慈川に関わる交通の要衝に形成された村落であり、須恵器・屋字刷の出土は重要な拠点の集落であったことを意味する。しかし、これらの発見は上ノ宿遺跡の一部であり、その意味するところの社会的、政治的背景について十分に明らかにできなかった。これらの成果はこの地域の歴史の一部であり、今後上ノ宿遺跡を含めた周辺地域の歴史解明の一助となることを念願し、ひとつの課題として提起しておきたい。

(小川和博・大瀧淳志・遠藤啓子)

参考文献

- 浅井 哲也1992「茨城県内における奈良・平安時代の土器(I)」研究ノート創刊号(財)茨城県教育財団
 浅井 哲也1992「茨城県内における奈良・平安時代の土器(II)」研究ノート2号(財)茨城県教育財団
 石野 博信 1990「日本原始・古代住居の研究」吉川弘文館
 小川和博他 2004「上宿上坪遺跡発掘調査報告書」大宮町教育委員会
 小川和博他 2005「高ノ倉遺跡発掘調査報告書」常陸大宮市教育委員会
 小川和博他 2008「上ノ宿遺跡発掘調査報告書」常陸大宮市教育委員会
 小川和博他 2009「上宿遺跡発掘調査報告書」常陸大宮市教育委員会
 斉藤 弘道 2006「茨城の縄文土器」茨城県立歴史館史料叢書9
 縄文時代研究班1995「茨城県内における縄文時代中期前半の住居跡形態について」研究ノート4号(財)茨城県教育財団
 鈴木 美治 1984「阿玉台閣における竪穴住居跡の形態についての一考察」年報3(財)茨城県教育財団
 土井義夫・渋江芳浩1987「平安時代の居住形態」『物質文化49』物質文化研究会

付章 上ノ宿遺跡出土土器観察表

図版 番号	種別 器名	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	形状・胴物	胎土	焼成	色調	流行年代	備考
S10	52-1	土師器 甕	15.0	1.3	-	外直径約6ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	赤色	口部一段文様	
S111	34-1	土師器 甕	17.0	2.7	-	外直径ヘラケズリ	石灰・黒石	良好	淡黄褐色	口部1/4段	黒色結晶
	34-2	土師器 甕	13.8	2.3	6.6	内直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	淡黄褐色	口部1/2段, 底部1/4段	黒色結晶, 黒色土器
	34-3	土師器 甕	18.0	(9.2)	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部1/4段	
	34-4	土師器 甕	21.0	(4.5)	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部1/6段	
S113	37-1	土師器 甕	-	(6.8)	7.0	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	褐色	底面跡	木炭痕
	37-2	土師器 甕	-	(2.5)	8.9	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	褐色	底面跡1/4段	木炭痕
S115	40-1	土師器 甕	13.4	4.2	6.2	内直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	底面跡	黒色結晶
	40-2	土師器 甕	13.0	4.0	6.2	内直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	赤色	底面跡	黒色結晶
	40-3	土師器 甕	12.0	(3.0)	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部1/6段	
	40-4	土師器 甕	-	(1.4)	5.4	内直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	淡黄褐色	底面跡2/3段	黒色結晶, 黒色土器
	40-5	土師器 甕	-	(1.7)	7.2	内直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	赤色	底面跡1/2段	黒色結晶
	40-6	土師器 甕	-	(1.2)	7.0	内直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	赤色	底面跡1/4段	
	40-7	土師器 甕	-	(3.4)	6.0	内直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	底面跡1/2段	
	40-8	土師器 甕	-	(2.0)	6.4	内直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	灰白色	底面跡1/2段	黒色結晶
	40-9	土師器 甕	-	(1.8)	7.4	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	灰白色	底面跡1/2段	
	40-10	土師器 甕	-	-	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	黄褐色	底面跡	
S116	43-1	土師器 甕	13.0	(3.7)	-	口部凹跡	黒色粘子・石炭・黒石	良好	赤色	口部1/4段	
S117	46-1	土師器 甕	13.0	(3.7)	-	外直径ヘラケズリ	石灰・黒石	良好	ぶい黄褐色	底面跡1/4段	
	46-2	土師器 甕	-	(1.0)	8.4	外直径ヘラケズリ	石灰・黒石	良好	褐色	底面跡	
	46-3	土師器 甕	23.0	(9.5)	-	底面跡	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部1/3段	木炭痕
	46-4	土師器 甕	7.8	5.7	3.8	底面跡	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部3/4文様	
S118	49-1	土師器 甕	16.8	25.4	9.0	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	淡黄褐色	底面跡1/2段	
	49-2	土師器 甕	12.0	(6.2)	-	ヨコナデ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部1/2段	
	49-3	土師器 甕	25.0	(3.2)	-	外直径ヘラケズリ	チャート・石灰・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部1/4段	
	49-4	土師器 甕	-	(7.1)	4.3	ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	赤褐色	底面跡1/4段	
	49-5	土師器 甕	-	(3.3)	7.0	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	底面跡	木炭痕
	49-6	土師器 甕	14.0	3.5	8.6	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	灰白色	口部1/4段	
	49-7	土師器 甕	-	(3.1)	7.2	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	灰白色	底面跡1/2段	
	49-8	土師器 甕	-	(2.8)	8.0	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	灰白色	底面跡1/2段	
	49-9	土師器 甕	-	-	-	外直径ヘラケズリ	石灰・黒石	良好	褐色	口部1/4段	
	49-10	土師器 甕	-	-	-	底面跡ヘラケズリ	石灰・黒石	良好	赤褐色	口部1/3文様, 高台文様	
S120	52-1	土師器 甕	15.0	(5.3)	-	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	黄褐色	口部1/2段	
S121	55-2	土師器 甕	15.0	(9.2)	-	口部凹跡	黒色粘子・石炭・黒石	良好	淡黄褐色	底面跡1/2段	黒色結晶
S122	55-1	土師器 甕	-	(2.8)	8.6	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	淡黄褐色	底面跡1/4段	黒色結晶
	55-2	土師器 甕	-	(1.8)	6.4	底面跡	黒色粘子・石炭・黒石	良好	淡黄褐色	口部1/4段	黒色結晶
	55-3	土師器 甕	12.2	(5.8)	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	赤色	口部1/6段	
	55-4	土師器 甕	22.0	(11.8)	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部1/7段	
	55-5	土師器 甕	18.0	(8.1)	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	赤色	口部1/4段	
	55-6	土師器 甕	-	(5.3)	8.5	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	淡黄褐色	口部1/7段	木炭痕
	55-7	土師器 甕	-	(5.4)	10.0	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	黄褐色	底面跡1/4段	
	55-8	土師器 甕	-	(6.8)	8.0	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	褐色	底面跡1/4段	
	55-9	土師器 甕	-	(1.5)	8.0	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	淡褐色	底面跡1/4段	ヘラケズリ
	55-10	土師器 甕	-	(3.4)	9.8	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	褐色	底面跡1/4段	ヘラケズリ
	55-11	土師器 甕	13.8	5.7	7.2	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	灰白色	口部一段文様	
	55-12	土師器 甕	-	(3.8)	7.7	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	褐色	口部1/4段	
	55-13	土師器 甕	18.4	7.0	11.0	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	褐色	口部1/4段	黒色結晶
	57-2	土師器 甕	24.8	(14.0)	-	外直径ヘラケズリ	黄褐色・石灰・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部2/3段	
57-3	土師器 甕	20.2	(11.8)	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部1/6段		
57-4	土師器 甕	-	(3.3)	8.0	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	灰白色	底面跡1/4段		
57-5	土師器 甕	14.8	(4.2)	-	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	黄褐色	1/2段, 高台文様		
S123	60-1	土師器 甕	-	(2.0)	7.0	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	底面跡	黒色結晶
S124	63-1	土師器 甕	12.0	(3.1)	6.7	内直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部1/6段	黒色土器
63-2	土師器 甕	-	(5.3)	11.2	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	黄褐色	底面跡1/4段	木炭痕	
63-3	土師器 甕	-	-	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	褐色	底面跡		
S125	58-1	土師器 甕	16.0	4.3	6.5	内直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	淡黄褐色	口部2/3段	黒色結晶
	58-2	土師器 甕	22.0	(14.8)	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部1/4段	
	58-3	土師器 甕	18.0	(5.3)	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部1/12段	
	58-4	土師器 甕	15.0	(9.3)	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	赤色	口部1/5段	
S126	59-1	土師器 甕	18.4	(18.3)	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	黄褐色	口部1/4段	
	59-2	土師器 甕	18.0	(11.4)	-	底面跡	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部1/4段	
	59-3	土師器 甕	13.4	(1.8)	-	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	灰白色	底面跡1/4段	
	59-4	土師器 甕	-	81.3	8.4	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	灰白色	底面跡1/4段	
S127	72-1	土師器 甕	13.2	4.0	6.5	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	褐色	1/2段	黒色結晶
	72-2	土師器 甕	-	(2.0)	6.8	底面跡	黒色粘子・石炭・黒石	良好	褐色	底面跡	黒色結晶
	72-3	土師器 甕	21.0	(13.7)	-	外直径ヘラケズリ	黄褐色・石灰・黒石	良好	褐色	口部1/12段	
	72-4	土師器 甕	-	(4.2)	7.2	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	底面跡1/2段	木炭痕
	72-5	土師器 甕	-	(3.8)	8.0	外直径ヘラケズリ	石灰・黒石	良好	ぶい黄褐色	底面跡1/4段	木炭痕
	72-6	土師器 甕	-	(1.8)	7.6	底面跡ヘラケズリ	石灰・黒石	良好	褐色	底面跡	木炭痕
	72-7	土師器 甕	-	(2.2)	6.8	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	淡褐色	底面跡	
	72-8	土師器 甕	-	-	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	黄褐色	底面跡	
	72-9	土師器 甕	-	-	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	淡褐色	底面跡	
	72-10	土師器 甕	-	-	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	黄褐色	底面跡	
S134	75-1	土師器 甕	13.8	3.7	7.8	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	淡黄褐色	口部1/3段	黒色結晶
	75-2	土師器 甕	-	(3.0)	6.4	底面跡ヘラケズリ	黄褐色・石灰・黒石	良好	淡黄褐色	底面跡1/2段	黒色結晶
	75-3	土師器 甕	-	(2.5)	7.0	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	褐色	底面跡1/7段	
	75-4	土師器 甕	-	(1.1)	7.6	底面跡ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	淡黄褐色	底面跡1/6段	
	75-5	土師器 甕	22.0	(7.7)	-	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	口部1/5段	
	75-6	土師器 甕	-	(1.5)	7.2	外直径ヘラケズリ	黒色粘子・石炭・黒石	良好	ぶい黄褐色	底面跡1/4段	木炭痕

発見 層位	器種	器体	位置 (cm)		形状・破損	胎土	釉	色調	保存度	備考	
			口径	高さ							
75-7	土師器 壺	-	(3.2)	8.0	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	黒褐色	口縁1/2残		
75-8	土師器 壺	-	-	-	外脣平行タタキ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい赤褐色	ほぼ完全		
S305	79-1	土師器 坪	-	(3.2)	7.0	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	黒褐色	口縁1/3残	黒色処理
	79-2	土師器 高台付坪	106	4.5	6.2	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい黄褐色	口縁1/3残	黒色処理
	79-3	土師器 高台付坪	142	(4.2)	-	底面縮輪ヘラケズリ, 内脣ヘラミガキ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい赤褐色	口縁一部欠損, 高台欠損	
	79-4	土師器 高台付坪	136	(3.2)	-	内脣ヘラミガキ	黒色粘土-石英-長石	良好	灰色	口縁1/4残	黒色処理
	79-5	土師器 高台付坪	-	(2.9)	-	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい黄褐色	口縁1/4残	黒色処理
	79-6	土師器 高台付坪	-	(3.0)	8.4	底面縮輪ヘラケズリ, 内脣ヘラミガキ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい黄褐色	ほぼ完全	黒色処理
	79-7	土師器 高台付坪	-	(1.8)	-	底面縮輪ヘラケズリ, 内脣ヘラミガキ	黒色粘土-石英-長石	良好	灰色	口縁1/2残	黒色処理
	79-8	土師器 高台付坪	-	(1.7)	8.0	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい黄褐色	口縁1/4残	黒色処理
	79-9	土師器 壺	-	15.0	(6.5)	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/3残	
	79-10	土師器 壺	-	20.8	(10.7)	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/4残	
79-11	土師器 壺	-	15.6	(6.0)	外脣ヘラナシ	黒色粘土-石英-長石	良好	赤褐色	口縁1/3残		
79-12	土師器 壺	-	(1.6)	7.4	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/3残	木炭痕	
79-13	須恵器 坪	-	(2.5)	8.0	底面縮輪ヘラケズリ	黄緑粘土-石英-長石	良好	灰褐色	口縁1/2残		
79-14	須恵器 坪	-	(2.2)	9.2	底面縮輪ヘラケズリ	黄緑粘土-石英-長石	良好	黄褐色	口縁1/2残	ヘラ記号	
79-15	須恵器 高台付坪	-	(1.9)	8.0	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/4残		
79-16	須恵器 壺	-	(1.7)	18.0	口口成形	黒色粘土-石英-長石	良好	灰褐色	口縁破片		
79-17	須恵器 壺	-	-	-	外脣平行タタキ	黒色粘土-石英-長石	良好	灰褐色	口縁破片		
79-18	須恵器 壺	-	-	-	外脣平行タタキ	黒色粘土-石英-長石	良好	オリーブ灰色	口縁破片		
79-19	須恵器 壺	-	-	-	外脣平行タタキ	黒色粘土-石英-長石	良好	オリーブ灰色	口縁破片		
S306	82-1	土師器 壺	14.0	(4.0)	-	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/4残	
	82-2	土師器 壺	16.0	11.0	9.0	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/4残, 底面残	
	82-3	土師器 壺	21.6	(6.7)	-	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい赤褐色	口縁1/4残	
	82-4	土師器 壺	-	(8.0)	7.8	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	灰黄色	ほぼ完全	
	82-5	須恵器 坪	14.0	4.9	6.0	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	灰色	口縁1/2残	
	82-6	須恵器 坪	11.1	3.8	6.1	底面縮輪ヘラケズリ, 内脣ヘラミガキ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/2次損	
	82-7	須恵器 坪	-	(2.8)	6.0	底面縮輪ヘラケズリ, 内脣ヘラミガキ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/4残	ヘラ記号
	82-8	須恵器 壺	-	(3.0)	8.6	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい黄褐色	口縁1/4残	
	82-9	須恵器 壺	-	(3.1)	8.0	底面縮輪ヘラケズリ, 内脣ヘラミガキ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/4残	
	82-10	須恵器 壺	-	-	-	天弁縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	灰色	口縁破片	
82-11	須恵器 壺	-	-	-	把手紐付付	黒色粘土-石英-長石	良好	灰色	把手破片		
S317	85-1	須恵器 坪	13.2	(3.5)	-	口口成形	黒色粘土-石英-長石	良好	オリーブ灰色	口縁1/4残	
	85-2	須恵器 坪	-	(1.4)	8.0	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	灰褐色	口縁1/4残	
	85-3	須恵器 壺	-	(1.2)	6.6	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/4残	
	85-4	須恵器 壺	-	-	-	外脣平行タタキ	黒色粘土-石英-長石	良好	灰褐色	ほぼ完全	
	85-5	須恵器 壺	-	-	-	外脣平行タタキ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	ほぼ完全	
S308	88-1	土師器 坪	14.2	(3.4)	-	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい赤褐色	口縁1/4残	
	88-2	土師器 坪	-	(1.4)	7.0	底面縮輪ヘラケズリ, 内脣ヘラミガキ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい黄褐色	口縁1/4残	黒色処理
	88-3	土師器 壺	21.0	(5.1)	-	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	赤褐色	口縁1/2残	
	88-4	土師器 壺	11.4	(5.4)	-	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	黒褐色	口縁1/2残	
	88-5	土師器 壺	-	(6.7)	8.0	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	赤褐色	口縁1/2残	木炭痕
S309	91-1	土師器 坪	13.4	4.2	6.0	底面縮輪ヘラケズリ, 内脣ヘラミガキ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/2残, 口縁一部残	
	91-2	土師器 坪	13.8	4.7	6.7	底面縮輪ヘラケズリ, 内脣ヘラミガキ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい黄褐色	口縁1/2次損	
	91-3	土師器 坪	13.0	3.8	5.8	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/3残, 底面1/2残	黒色処理
	91-4	土師器 壺	-	(1.1)	7.0	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/2残	
	91-5	土師器 壺	21.0	(12.8)	-	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい赤褐色	口縁1/4残	
	91-6	土師器 壺	22.0	(7.8)	-	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/4残	
	91-7	須恵器 坪	-	(1.2)	7.0	底面縮輪ヘラケズリ, 内脣ヘラミガキ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/4残	
	91-8	須恵器 高台付坪	-	(3.7)	7.0	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	灰色	口縁1/3残	
S340	94-1	土師器 壺	19.2	(7.5)	-	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/4残	
	94-2	土師器 壺	21.4	(4.7)	6.6	外脣ヘラケズリ	チャート-石英-長石	良好	こぶい黄褐色	口縁1/4残	
	94-3	土師器 壺	14.8	(6.4)	6.4	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい黄褐色	口縁1/4残	
	94-4	土師器 壺	-	(1.3)	9.0	外脣ヘラケズリ	スロリア-石英-長石	良好	こぶい赤褐色	口縁1/4残	
	94-5	須恵器 坪	11.2	4.0	7.2	底面縮輪ヘラケズリ	黄緑粘土-石英-長石	良好	灰色	ほぼ完全	
	94-6	須恵器 坪	12.8	4.6	8.4	底面縮輪ヘラケズリ	黄緑粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/4残	
94-7	須恵器 坪	13.0	4.2	8.0	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	黄褐色	口縁1/3残, 底面1/4残		
94-8	須恵器 坪	-	(1.9)	8.5	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/3残		
S341	97-1	土師器 壺	17.0	(6.5)	-	内脣ヘラミガキ	黒色粘土-石英-長石	良好	赤褐色	口縁1/2残	黒色処理
	97-2	土師器 壺	19.0	(11.4)	9.0	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	赤褐色	口縁1/2残	
	97-3	土師器 壺	-	(6.8)	9.0	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	赤褐色	口縁1/2残	木炭痕
	97-4	須恵器 坪	13.5	4.1	8.0	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/3次損	ヘラ記号
	97-5	須恵器 坪	13.4	(4.5)	-	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	1/2残	
	97-6	須恵器 坪	15.0	(4.0)	-	口口成形	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/3残	
	97-7	須恵器 坪	-	(2.2)	8.2	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/3残	
	97-8	須恵器 壺	16.9	(2.5)	-	天弁縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	灰褐色	口縁1/4残	
	97-9	土師器 壺	16.9	6.4	8.6	底面縮輪ヘラケズリ	黄緑粘土-石英-長石	良好	こぶい黄褐色	口縁1/2次損	ヘラ記号, 黒色処理
100-1	土師器 壺	14.8	11.0	8.6	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい赤褐色	口縁1/4残		
100-2	土師器 壺	13.4	(7.5)	-	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい黄褐色	口縁1/4残		
100-3	土師器 壺	14.2	(6.5)	-	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	こぶい黄褐色	口縁1/4残		
100-4	須恵器 坪	11.2	4.2	6.5	底面縮輪ヘラケズリ, 内脣ヘラミガキ	黄緑粘土-石英-長石	良好	灰色	ほぼ完全		
100-5	須恵器 坪	14.4	5.2	8.0	底面縮輪ヘラケズリ, 内脣ヘラミガキ	黄緑粘土-石英-長石	良好	灰色	口縁1/2次損		
100-6	須恵器 坪	14.0	(3.7)	-	口口成形	黒色粘土-石英-長石	良好	灰オリーブ色	口縁1/4残		
100-7	須恵器 高台付坪	-	(2.1)	7.4	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/4残		
100-8	須恵器 壺	12.8	(3.7)	-	天弁縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	ほぼ完全		
100-9	須恵器 壺	16.2	(2.3)	-	底面縮輪ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/2残		
100-10	須恵器 壺	-	(5.2)	-	口口成形	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/4残		
100-11	須恵器 壺	21.6	(11.0)	-	口口成形	黒色粘土-石英-長石	良好	灰褐色	口縁1/5残		
100-12	須恵器 壺	-	-	-	外脣平行タタキ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁破片		
100-13	須恵器 壺	-	-	-	外脣平行タタキ	黒色粘土-石英-長石	良好	灰オリーブ色	口縁破片		
100-14	須恵器 壺	-	(10.5)	13.0	外脣ヘラケズリ	黒色粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/3残		
S343	103-1	土師器 高台付坪	-	(4.2)	11.4	底面ヘラミガキ, 内脣ヘラミガキ	黄緑粘土-石英-長石	良好	褐色	口縁1/2残	

発掘 層別	発掘 層別	器種	口径 (cm)		器形・装飾	胎土	焼成	色調	厚程度	備考
			口徑	高さ						
103-3	土師器 甕		12.3	6.0	外周ヘラナデ	石灰-赤石	良好	褐色	高部1/4横	
103-3	土師器 甕		12.3	4.5	底部凹陥ヘラナデのち手持ちヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	オリーブ褐色	口縁2/3欠損	ヘラ記号
103-4	土師器 甕		13.0	4.2	底部凹陥ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/4横	
103-5	土師器 甕		-	(2.5)	底部凹陥ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	オリーブ褐色	1/2横	ヘラ記号
S44	106-1	土師器 高台付杯	12.0	5.5	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/6欠損	土師器土群 黒色処理
	106-2	土師器 高台付杯	14.4	5.6	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/6欠損	黒色処理
	106-3	土師器 高台付杯	14.0	5.5	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	黄褐色	口縁2/3欠損	黒色処理
	106-4	土師器 甕	13.2	3.6	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁2/3欠損	黒色処理
	106-5	土師器 甕	13.2	4.1	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	石灰-赤石	良好	黄褐色	口縁1/2欠損	黒色処理
	106-6	土師器 甕	13.2	4.0	内周ヘラミガキ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	黄褐色	1/4横	黒色処理
S45	106-7	土師器 甕	13.2	3.7	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/4横	黒色処理
	106-8	土師器 甕	13.2	3.7	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	黄褐色	1/4横	黒色処理
	106-9	土師器 甕	13.2	3.5	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/2横	黒色処理, ヘラ記号
	106-10	土師器 甕	12.6	1.8	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	1/4横	黒色処理
	106-11	土師器 甕	-	-	内周ヘラミガキ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/4横	黒色処理
	106-12	土師器 甕	-	-	内周ヘラミガキ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	黄褐色	口縁1/4横	黒色処理
	106-13	土師器 甕	21.4	(8.4)	外周ヘラナデ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	黄褐色	口縁1/2横	土師器土群
	106-14	土師器 甕	22.0	(10.4)	外周ヘラナデ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/6横	黒色処理
	106-15	土師器 甕	12.0	(5.3)	外周ヘラナデ	石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/8横	黒色処理
	106-16	土師器 甕	14.0	(7.0)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/4横	黒色処理
	106-17	土師器 甕	14.0	(5.7)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/2横	黒色処理
	106-18	土師器 甕	-	(7.0)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/4横	黒色処理
106-19	土師器 甕	-	(3.8)	底部凹陥ヘラナデ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	灰白色	口縁1/4横	土師器土群	
106-20	土師器 甕	-	-	外周平行タタキ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	灰色	底部1/4横	土師器土群	
S46	112-1	土師器 甕	13.0	(3.0)	-	チャート-石灰-赤石	良好	灰白色	口縁1/3横	土師器土群
	112-2	土師器 甕	-	-	外周平行タタキ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	灰色	底部1/3横	土師器土群
S47	116-1	土師器 甕	19.0	(5.3)	内周ヘラミガキ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/5横	黒色処理
	116-2	土師器 甕	15.6	(12.7)	外周ヘラナデ	雲母-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/6横	黒色処理
	116-3	土師器 甕	13.1	(4.3)	外周ヘラナデ	石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/2横	黒色処理
	116-4	土師器 甕	13.8	4.5	底部凹陥ヘラナデ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/2横	黒色処理
	116-5	土師器 甕	-	(10.9)	底部凹陥ヘラナデ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	黄褐色	底部1/4横	黒色処理
	116-6	土師器 高台付杯	12.0	5.0	底部凹陥ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1-断片	ヘラ記号
S48	117-1	土師器 甕	20.4	(6.7)	外周ヘラナデ	石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/2横	土師器土群
	117-2	土師器 甕	19.5	(8.0)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	黄褐色	口縁1/8横	土師器土群
	117-3	土師器 甕	15.3	(5.3)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/4横	土師器土群
	117-4	土師器 甕	13.1	4.6	底部凹陥ヘラナデのち手持ちヘラナデ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/2欠損	土師器土群
	117-5	土師器 甕	21.8	5.1	底部凹陥ヘラナデ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/2欠損	土師器土群
	117-6	土師器 甕	21.8	5.1	底部凹陥ヘラナデ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1-断片	ヘラ記号
S49	120-1	土師器 甕	13.8	4.8	底部凹陥ヘラナデのち手持ちヘラナデ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	黄褐色	口縁1/4横	土師器土群
	120-2	土師器 甕	13.4	4.0	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/4横	土師器土群
	120-3	土師器 甕	14.0	4.9	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/2横, 底部1/4横	土師器土群
	120-4	土師器 甕	-	(3.1)	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	黄褐色	口縁1/2横	土師器土群
	120-5	土師器 高台付杯	13.6	4.5	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/2横	土師器土群
	120-6	土師器 高台付杯	13.4	4.8	内周ヘラミガキ	石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/4横	土師器土群
	120-7	土師器 高台付杯	13.0	(4.0)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/4横	土師器土群
	120-8	土師器 甕	22.8	(4.8)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/4横	土師器土群
	120-9	土師器 甕	-	-	外周平行タタキ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	底部1/4横	土師器土群
	120-9	土師器 甕	22.0	(20.7)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/3横	土師器土群
S50	123-1	土師器 甕	22.0	(22.0)	外周ヘラナデ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/2横	土師器土群
	123-2	土師器 甕	21.6	(14.0)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/2横	土師器土群
	123-3	土師器 甕	21.6	(14.0)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/2横	土師器土群
	123-4	土師器 甕	22.0	(12.3)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/4横	土師器土群
	123-5	土師器 甕	20.0	(5.3)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/4横	土師器土群
	123-6	土師器 甕	12.0	(2.2)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/4横	土師器土群
	123-7	土師器 甕	-	(4.0)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/2横	土師器土群
	123-8	土師器 甕	-	(2.7)	外周ヘラナデ	雲母-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/3横	土師器土群
	126-1	土師器 甕	13.0	(3.0)	外周ヘラミガキ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/4横	土師器土群
	126-2	土師器 甕	13.4	2.1	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	黄褐色	口縁1/2横	土師器土群
	126-3	土師器 甕	-	(1.1)	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/4横	土師器土群
	126-4	土師器 甕	-	(1.4)	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	石灰-赤石	良好	黄褐色	口縁1/4横	土師器土群
	126-5	土師器 甕	18.8	(6.8)	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/4横, 底部1/3横	土師器土群
	126-6	土師器 甕	21.0	(10.8)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/4横	土師器土群
126-7	土師器 甕	18.2	(12.9)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/4横	土師器土群	
126-8	土師器 甕	21.4	(8.0)	外周ヘラナデ	チャート-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/2横	土師器土群	
126-9	土師器 甕	13.2	(6.0)	外周ヘラナデ	チャート-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁3/4横	土師器土群	
126-10	土師器 甕	23.0	(4.5)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/6横	土師器土群	
126-11	土師器 甕	-	(10.3)	外周ヘラナデ	チャート-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/2横	土師器土群	
126-12	土師器 甕	23.0	(2.3)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/4横	土師器土群	
126-13	土師器 甕	-	(7.0)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	黄褐色	口縁1/4横	土師器土群	
126-14	土師器 甕	-	(7.3)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	黄褐色	口縁1/4横	土師器土群	
126-15	土師器 甕	-	(7.8)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/6横	土師器土群	
126-16	土師器 甕	-	(1.2)	底部凹陥ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	灰色	口縁1/4横	土師器土群	
S52	130-1	土師器 甕	15.6	4.4	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	黄褐色	口縁1/4横, 底部1/3横	土師器土群
	130-2	土師器 甕	-	(2.7)	底部凹陥ヘラナデ, 内周ヘラミガキ	海綿骨針-石灰-赤石	良好	黄褐色	口縁1/4横	土師器土群
	130-3	土師器 甕	25.2	(2.7)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/4横	土師器土群
	130-4	土師器 甕	12.8	(10.7)	外周ヘラナデ	雲母-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/2横	土師器土群
	130-5	土師器 甕	-	(23.0)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/2横	土師器土群
	130-6	土師器 甕	-	(4.6)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/2横	土師器土群
	130-7	土師器 甕	-	(4.2)	外周ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	褐色	口縁1/4横	土師器土群
	130-8	土師器 甕	-	(3.4)	底部凹陥ヘラナデ	黒色粘土-石灰-赤石	良好	灰白色	口縁1/4横	土師器土群

器名 種別 数量	種別	容量 (ml)		形状・用途	胎土	焼成	色調	遺存度	備考	
		口径	高さ							
130-9	須恵器 甕	-	(6.3)	146	外置平行タケ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 灰色	底面1/4残		
130-10	須恵器 甕	-	-	-	外置平行タケ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 灰色	体部破片		
130-11	須恵器 甕	-	-	-	外置平行タケ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 灰色	体部破片		
S583	133-1	土師器 甕	-	(2.1)	9.2	底面凹陥ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 赤褐色	底面1/2残	
	133-2	土師器 甕	23.0	(10.5)	-	外置ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 赤褐色	口縁1/4残	
	133-3	土師器 甕	23.0	(5.5)	-	外置ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 赤褐色	口縁1/4残	
	133-4	土師器 甕	7.2	8.0	-	外置ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 赤褐色	口縁1/2残	木炭痕
	133-5	須恵器 杯	128	5.2	8.4	底面凹陥ヘラケズリ	海神骨針・石灰・黒石	良好 灰色	口縁1/2残, 底面2/3残	
	133-6	須恵器 高台付杯	14.0	(3.8)	-	口口成形	海神骨針・石灰・黒石	良好 灰白色	口縁1/6残	
	133-7	須恵器 杯	-	(2.6)	8.6	底面半球ヘラケズリ	海神骨針・石灰・黒石	良好 灰色	底面1/4残	ヘラ破片
	133-8	須恵器 杯	-	(2.6)	7.2	底面凹陥ヘラケズリ	海神骨針・石灰・黒石	良好 灰色	底面1/4残	
	133-9	須恵器 杯	-	(1.4)	8.5	底面凹陥ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 灰白色	底面1/4残	
	133-10	須恵器 杯	-	(1.3)	6.8	底面凹陥ヘラケズリ	海神骨針・石灰・黒石	良好 灰色	又片部	
	133-11	須恵器 甕	9?22.8	(2.0)	-	天井半球凹陥ヘラケズリ	海神骨針・石灰・黒石	良好 灰色	口縁1/8残	
	133-12	須恵器 甕	11.8	(2.5)	-	天井半球凹陥ヘラケズリ	海神骨針・石灰・黒石	良好 灰色	口縁1/8残	
	133-13	須恵器 甕	-	-	-	外置平行タケ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 黒褐色	体部破片	
S584	136-1	土師器 杯	13.4	4.0	7.1	底面凹陥ヘラケズリのちり持ちヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 黒褐色	口縁1/2次残	黒色結核
	136-2	土師器 高台付杯	13.4	(4.0)	-	内面ヘラミガキ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 浅黄褐色	口縁1/4残	黒色結核
	136-3	土師器 杯	-	(2.2)	6.5	底面凹陥ヘラケズリ, 内面ヘラミガキ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 灰色	底面1/2残	黒色結核
	136-4	土師器 甕	-	(1.5)	6.2	内面ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 黒色	底面1/4残	
	136-5	土師器 高台付杯	12.4	5.2	7.5	底面凹陥ヘラケズリ, 内面ヘラミガキ	海神骨針・石灰・黒石	良好 赤褐色	口縁1/2次残	黒色結核
	136-6	土師器 高台付杯	-	(4.7)	7.2	底面凹陥ヘラケズリ, 内面ヘラミガキ	海神骨針・石灰・黒石	良好 浅黄褐色	口縁1/4残	
	136-7	土師器 甕	22.6	(6.8)	-	外置ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 褐色	口縁1/4残	
	136-8	土師器 甕	19.0	(5.0)	-	外置ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 黒褐色	口縁1/7残	
	136-9	土師器 甕	14.6	(7.9)	-	外置ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 黒褐色	底面1/2残	木炭跡
	136-10	土師器 甕	-	(7.7)	8.0	外置ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 黒褐色	底面1/2残	木炭跡
	136-11	土師器 甕	-	(3.8)	8.4	外置ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 褐色	底面1/4残	
	136-12	土師器 甕	-	(5.8)	9.2	外置ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 赤褐色	底面1/4残	
	136-13	土師器 甕	-	(1.4)	6.8	外置ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 赤褐色	底面2/3残	
	136-14	須恵器 杯	-	(1.4)	6.2	底面凹陥ヘラケズリ	海神骨針・石灰・黒石	良好 灰色	底面1/4残	
	136-15	須恵器 甕	-	-	-	外置平行タケ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 褐色	体部破片	
S585	127-1	土師器 甕	-	-	-	外置ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 赤褐色	口縁破片	
S586	138-1	土師器 甕	21.0	(1.5)	-	コナナ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 浅黄褐色	口縁破片	
S589	141-1	土師器 杯	13.0	4.1	6.0	底面凹陥ヘラケズリ, 内面ヘラミガキ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 赤褐色	口縁1-2次残	黒色土層
	141-2	土師器 高台付杯	15.0	4.5	7.6	内面ヘラミガキ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 褐色	底面1/10残	
	141-3	土師器 高台付杯	15.0	(4.4)	-	内面ヘラミガキ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 赤褐色	底面1/10残	
	141-4	土師器 高台付杯	-	(2.7)	6.0	内面ヘラミガキ	海神骨針・石灰・黒石	良好 赤褐色	底面1/4残	黒色結核
	141-5	須恵器 杯	-	(1.3)	6.6	底面凹陥ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 黄褐色	底面1/4残	
S590	142-1	土師器 高台付杯	12.0	(3.3)	-	内面ヘラミガキ	チャート・石灰・黒石	良好 赤褐色	口縁1/4残	黒色結核
	142-2	土師器 甕	-	(5.7)	7.4	外置ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 黒褐色	底面1/2残	木炭痕
S591	144-1	土師器 甕	-	-	-	外置ヘラケズリ	海神骨針・石灰・黒石	良好 赤褐色	体部破片	
	144-2	須恵器 甕	-	-	-	外置平行タケ	黒色粘土・石灰・黒石	良好 灰白色	体部破片	

写真図版



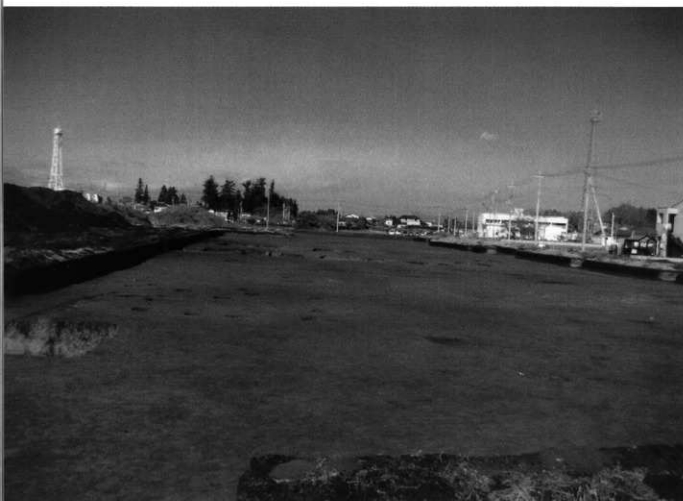
1. 遺跡調査区航空写真



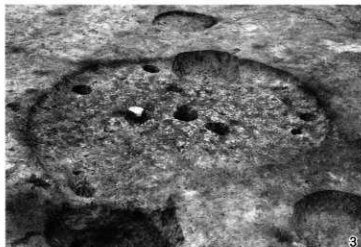
2. 遺跡調査区航空写真



1. 遺跡調査区航空写真



2. 調査区全景



1. 旧石器時代試掘グリッドPG1

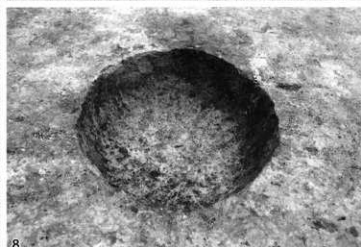
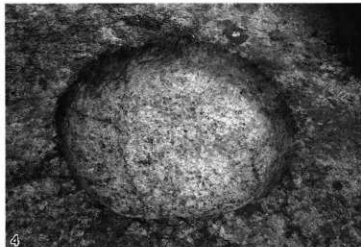
2. 旧石器時代試掘グリッドPG2

3. SI12

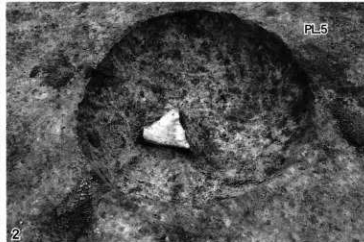
4. SI14

5. SI19・20

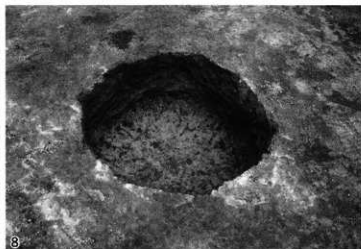
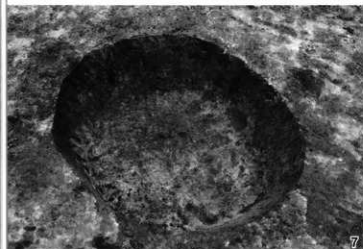
6. SI57



1. SK22 2. SK24 3. SK25 4. SK27 5. SK33-1 6. SK33-2 7. SK46 8. SK50



1. SK59 2. SK60 3. SK64・60~70 4. SK72 5. SK77 6. SK79 7. SK83 8. SK97



1. SK99 2. SK115 - 116 3. SK117 4. SK120 5. SK123 6. SK139 7. SK140 8. SK152



1. SI15-1

2. SI15-2

3. SI16

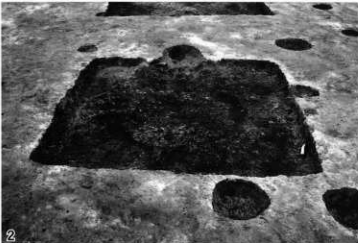
4. SI17

5. SI18

6. SI21

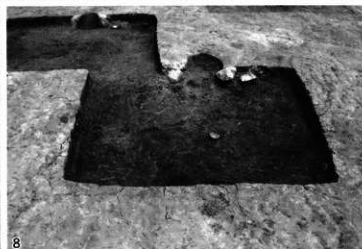
7. SI24

8. SI26



1. SI27 2. SI34 3. SI35-1 4. SI35-2 5. SI36

6. SI37 7. SI38 8. SI39



1. SI41-1

2. SI41-2

3. SI42

4. SI43

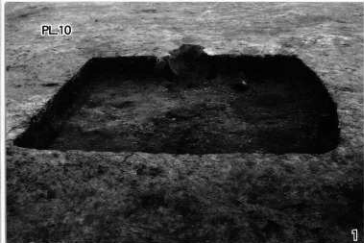
5. SI44

6. SI45

7. SI46

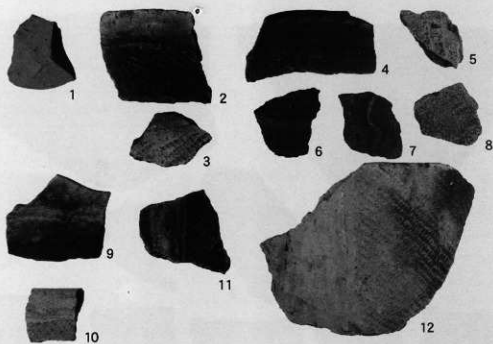
8. SI48

PL-10



1. SI49 2. SI51 • 55 3. SI52 4. SI53 5. SI54

6. SB02 7. SB03 8. SB05



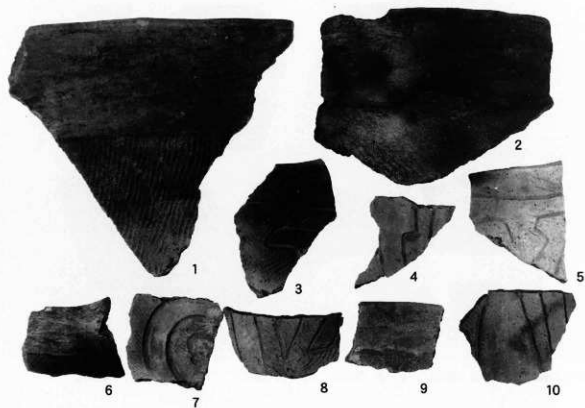
1 (旧石器時代の剥片) 2・3 (SI19) 4～8 (SI57) 9・10 (SK17) 11 (SK34) 12 (SK83)



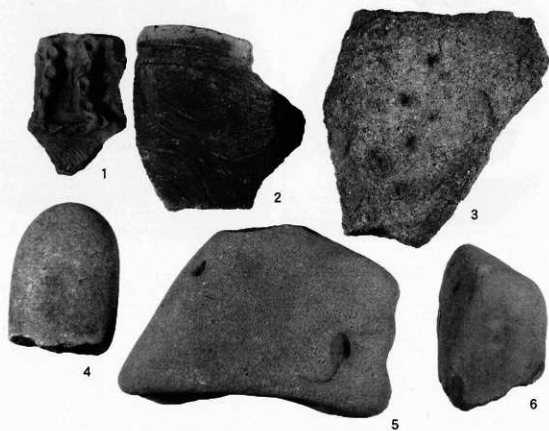
13 (SK33)



14 (SK24)



1 (SK60) 2~5 (SK99) 6~8 (SK103) 9・10 (SK110)



1 (SK151) 2 (SK153) 3 (SI12) 4 (SK46) 5 (SK72) 6 (SK110)



1



2



3



4



5



7



6



8



10



9



11

1 (SI10) 2 (SI11) 3 (SI13) 4 (SI15)
 5 (SI17) 6 (SI18) 7 (SI20) 8 (SI21)
 9 (SI22) 10 (SI22) 11 (SI22)



1



4



6



7



9



2



3



5



8



10



11

1 (SI26) 2 (SI26) 3 (SI27) 4 (SI34) 5 (SI35) 6 (SI35) 7 (SI35) 8 (SI35) 9 (SI36)
 10 (SI36) 11 (SI38)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



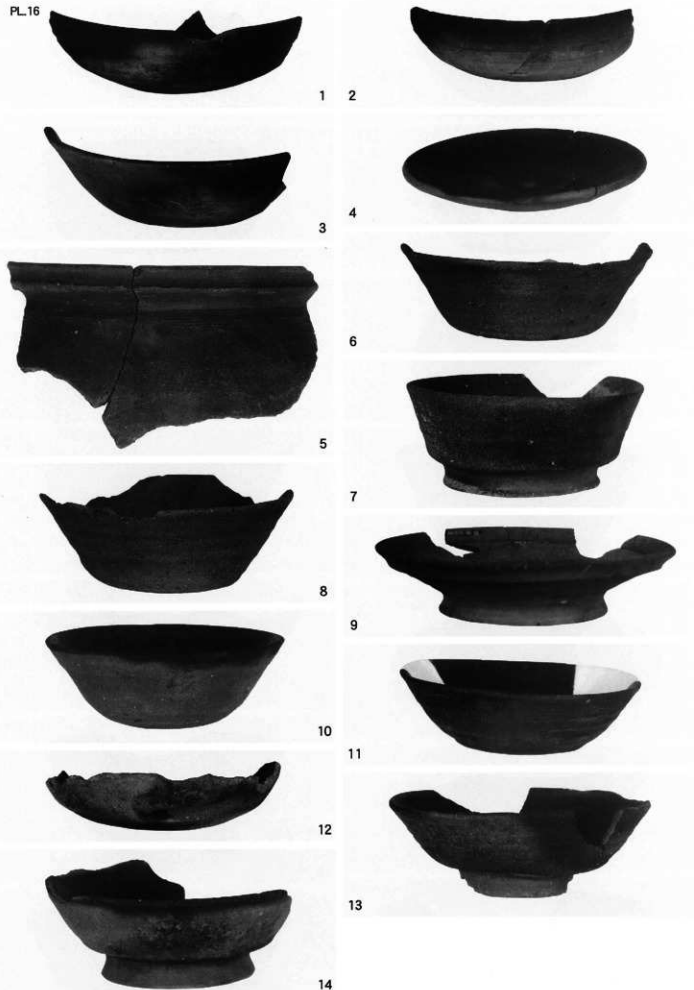
12



13



14



1 (SI45) 2 (SI45) 3 (SI45) 4 (SI45) 5 (SI47) 6 (SI47) 7 (SI47) 8 (SI48) 9 (SI48)
 10 (SI49) 11 (SI49) 12 (SI49) 13 (SI49) 14 (SI49)



1



2



3



4



5



6



7



8



9

1 (SI50) 2 (SI50) 3 (SI50) 4 (SI50) 5 (SI51)
 6 (SI51) 7 (SI52) 8 (SI52) 9 (SI52)



1 2



3



4



5



6



7-1

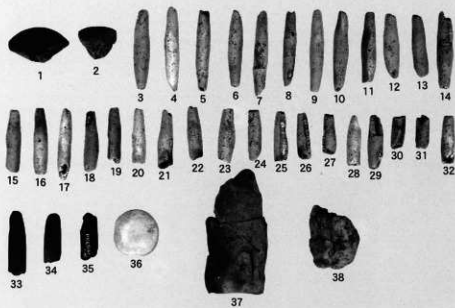


8

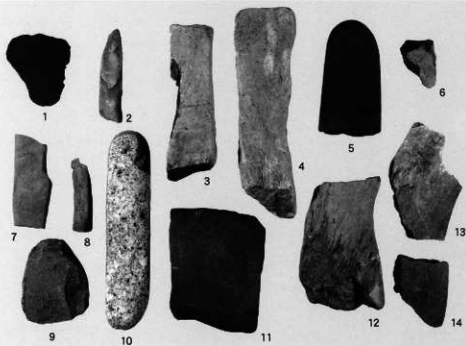


7-2

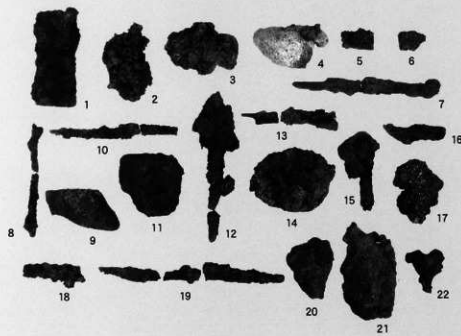
1 (SI53) 2 (SI54) 3 (SI54) 4 (SI54) 5 (SI54) 6 (SI69) 7-1 · 7-2 (SI15) 8 (SI41)



1. 土製品
1~32 (SI27)
33~36 (SI41)
37 (SI51)
38 (SI52)



2. 石製品
1 (SI20)
2・3 (SI22)
4 (SI34)
5 (SI35)
6 (SI36)
7~10 (SI47)
11 (SI48)
12 (SI49)
13・14 (SI52)



3. 鉄製品
1 (SI11)
2~4 (SI13)
5・6 (SI22)
7 (SI24)
8・9 (SI26)
10・11 (SI27)
12~14 (SI35)
15 (SI45)
16 (SI47)
17 (SI48)
18 (SI52)
19~21 (SI53)
22 (SI54)

報告書抄録

ふりがな	かみのしゆくいせき はつかつちようさほうこくしょ							
書名	上ノ宿遺跡 発掘調査報告書							
副書名	第2次調査1							
巻次								
編著者名	小川和博 大瀧淳志 遠藤啓子							
編集機関	有限会社 日考研栄城							
所在地	〒300-0508 茨城県稲敷市在倉3321-1 TEL.029-892-1112							
発行機関	常陸大宮市教育委員会							
所在地	〒319--2292 茨城県常陸大宮市中富町3135-6 TEL.0295-52-1111							
発行年月日	2009年12月28日							
ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみのしゆくいせき 上ノ宿遺跡	ひらき 常陸大宮市 宇留野3083-1 他9筆	334	117	36度 32分 42秒 5	140度 25分 12秒 1	20080401 ～ 20081225	9,920㎡	店舗建設に伴う記録 保存のための調査
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上ノ宿遺跡	集落跡	縄文時代、奈良・平安時代、中世以降	竪穴住居跡 竪立柱建物跡 土坑 柱穴 溝	47軒 6棟 148基 76基 1条	縄文土器・土師器・須恵器・硯・石器(石鏃・石皿・磨石・砥石)・鉄製品(刀丁・釧先・鉄線)		縄文中・後期、奈良・平安時代の集落跡である。	
要約	<p>本遺跡は縄文時代および古代の拠点集落跡である。縄文時代は中期から後期の竪穴建物跡4軒、中期中葉から後期前半の土坑101基が検出され、調査区南東側に展開している。また、古代では奈良・平安時代の竪穴建物跡43軒が調査区ほぼ全面で確認されている。これら竪穴建物跡からは土師器・須恵器が多数に出土し、土師器や高台付坪には黒書土器もあり、それに関連するとみられるほぼ完形に近い須恵器・風字甕が竪穴建物跡から出土している。また鉄製品である釧先、鉄斧の完存品も竪穴建物跡から検出され、その他鉄線や刀子等の出土も特筆される。なお中世以降では溝や竪立柱建物跡等が検出されている。</p>							

常陸大宮市上ノ宿遺跡

—第2次調査I—
発掘調査報告書

発行日 平成21年（2009）12月28日

編集 有限会社 日考研茨城
茨城県稲敷市左倉3321-1

発行 常陸大宮市教育委員会
茨城県常陸大宮市中富町3135-6

印刷 有限会社 田辺印刷
千葉県いすみ市苅谷663-4
